　プロローグ

『〝シ〟の音が好きなんです。シは幸せのシって、よく言うじゃないですか』

　どこかの教室で吹奏楽部が自主練をしている。トランペットかトロンボーンか、それともチューバか。種類は分からない。楽器には詳しくない。それでも、金管楽器の類だろうというのは漠然と分かる。

　あの時間で嫌というほど染みついた音は、その音がシの音階である事を僕に告げていた。他の音階は分からないが、シの音だけは判別できるようになった。あまりに未熟な絶対音感だと自分で辟易する。

　廊下に差し込む夏の白い日差しは、僕がこの学校にいた数年前と何も変わっちゃいなかった。不意に気を抜けば、僕はまだ高校生で、着慣れた制服でここを歩いているような、そんな錯覚に苛まれる。

　でも今この瞬間、僕が着ているのは小奇麗なビジネススーツで、僕の職業は残念ながら学生じゃなくただの会社員で。あの日々で嫌ってきた大人という生き物に、僕はなってしまっている。数年前の僕が見たら軽蔑するだろうなと、どうでもいい事を思った。

「……君、ですか？」

　廊下を歩いていた時、後ろから声が聞こえた。それが数年前に聞いていた彼女の声とは別物に聞こえ、僕は一瞬だけ戸惑ってしまう。

　振り向いて見ると、レディーススーツを着こなした女性が少し不安げな表情をして立っていた。やはりと言うか、僕が知っている彼女とは少し違って見えた。彼女がそのまま成長した姿、と言われれば納得はしてしまうのだが。

「名執君だよね？　よかった。びっくりするくらい大人になってたから、違う人だったらどうしようかと思った」

「ちょうど今、僕も同じ事を思ったよ」

　加齢による成長はもちろん、化粧を施した彼女は別人のようになっていた。数年前、彼女は「化粧なんて無意味」と吐き捨てていた。そのセリフにそぐうほどの容姿だって持ち合わせていた。短かった髪はいつの間にか長くなり、後頭部で一つ結びにしている。

「僕の中のさんは、数年前の女子の『蔑白』のままで止まってた。でも今こうやって顔を合わせて、蔑白さんは大人の『蔑白夕未』になったんだなって思わされたよ」

「……えっと、どういう意味？」

「綺麗になったって事」

　僕が言うと、彼女は驚いたようにほんの少し目を開け、「大人になるって事は、お世辞が言えるようになるって事だったりするかもね」と苦笑いをした。もちろんお世辞ではないが、それを言うのは野暮な気がしてやめた。

「それ、に言ったらどうなるんだろう」

　ふと、蔑白さんが言った。

　それは蔑白さんにとって、僕にとって、何でもないような一言だった。同窓生が集まれば昔を懐かしんで思い出を語るように、僕と蔑白さんがいれば「彼女」の存在について語り合うのは自明の理なのだ。

例えば、他の人に「綺麗になったね」と言われれば、彼女は少し困って「ありがとうございます」と言うのだろう。その行動の正しさこそが彼女を彼女足らしめている。

でも、僕が「綺麗になったね」と言えば、彼女は苦虫を嚙み潰したような表情で「本当に、やめてください」と言うに違いない。「本当に」の部分に強いアクセントを置いて。それが容易に想像できる。

　その説明を一からしてしまうのもやっぱり野暮な気がして、僕はただ「嫌がるに決まってる」とだけ小さく言った。

「夏架が生きてたら、きっと本当に綺麗な大人になったんだろうね」

「……そうかもね」

　本当は「分からない」と答えたかった。もう存在しない未来を勝手に想像する事が気持ち悪かった。でも、今この場でそれを口にするのは不正解なのだろうと、なんとなく分かっていた。これも大人になるという事かもしれない。

「そういえば、君はいるの？」

　口調をほんの少しだけ明るくして訊ねてみる。蔑白さんは「来てない」と首を横に振った。

「来てないっていうか、多分来ないよ。名執君なら分かるでしょ？」

「分かるよ。真囚君が来てたら怖くて逃げてたかもしれない」

　そう言うと、蔑白さんは「何それ」と少し笑った。本心だ。僕は今になっても尚、真囚君の事を少しだけ恐れている。

この学校を卒業して数年。僕は何も変わっちゃいなかった。身長が伸び、髭も生えるようになって、嫌いなトマトだって食べられるようになった。なのに、心だけは未だ成長できないままだ。あの時間に囚われ続けている。あの日々を終わらせられずにいる。僕だけが、あの日々の延長線上に立っている。

「真囚君が来ないのは、もちろん僕がいるからっていうのもあると思う。でもそれ以上に、さんがいないからなんだろうね」

　僕がいる事、彼女がいない事。それは対義語のようで同義語のような、そんなもどかしい距離感にある。僕の言葉に、次は蔑白さんが「分かるよ」と言った。

「私だって、夏架を忘れられずにいる。夏架が死んで、嬉しいって思ってる自分がいる」

　いや、僕だけじゃない。真囚君も蔑白さんも、未だ彼女を忘れられずにいる。大人というのは多分、そういうものかもしれない。いくら体が成長しても、好き嫌いが無くなっても、お世辞や出まかせを言えるようになっても。心だけは自分の一番大切な場所に居残り続けるのだ。そこに縛られたまま、どこにも行けずにいる。まるで地縛霊のように。

　廊下の窓から、旧校舎が見える。随分寂れてしまった、ボロボロの建物だ。もう取り壊しが決まっているらしい。僕の、僕らの心は、何年経とうともあそこに居続けるのだろう。いつもの席に座って、いつものように蒸し返すような暑さの中、いつもの授業を受ける僕らが想像できる。

　不意に気を抜けば、僕は未だ高校生で、着慣れた制服を着ている。

「ねえ、名執君」

　蔑白さんに名を呼ばれ、僕はそちらを見た。蔑白さんは見慣れた制服に身を包んでいた。真っ白なそれは夏の日差しを照り返し、ほんの少しだけ眩しい。

「夏架を殺したのは、名執君じゃないよね？」

　化粧っ気のない顔で、僕をじっと見つめて彼女は言った。僕は何と言うべきか答えあぐね、でもやっぱりすぐに口を開いた。この状況で、彼女に言える事なんて一つに決まっているから。

「いや、紙透さんを殺したのは、僕だよ」

　金管楽器の音が聞こえる。

　高いシの音はきっと、死の音にも似ている。

第一部　「嘘」

〝執着を手放ぬよう、誰も彼もが、こんなにも優しくて醜い嘘を吐く。〟

「私の夢は、全人類を幸福にする事です」

　紙透夏架は転校初日、開口一番に宣言した。その言葉が宇宙で最も綺麗だと信じて疑わないみたいに、彼女の瞳は強く澄んでいた。

　教室の喧騒を聞き流しながら、僕は窓の外の青空を眺めていた。彼女の言葉の真意を知りたいなどとは思わなかったが、その覚悟がどれほどのものなのか、ほんの僅かに興味があったのは否めない。梅雨の陰鬱とした空気が抜け去った後の、夏の始まりみたいな日だった。

　紙透夏架がクラスを牛耳って苛めの主犯格になるのは、それから僅か半月後の話だ。

＊　　＊　　＊　　＊　　＊

　高校一年生にもなって全人類とか幸福とか、そんな大それた事を言えば、はみ出し者になるに決まっている。紙透夏架は転校した当初、それ相応の待遇を受けていた。要するに変人扱いされていた。

　どれだけ綺麗な言葉であっても関係ないのだ。きっと人は彼女を見下げるだろう。誰よりも前を、上を向くこの少女を信じない。それが不相応であればあるだけ、人は哀れんでしまうのだ。あるいは、眩し過ぎる彼女を直視できないだけかもしれない。自分はきっと、夏のように輝かしい彼女にはなれないと知っているから。

　最初に紙透さんの声を聞いたのは、その日の昼休みだった。

　僕は昼休み、窓際最後列の席に座って一人で昼食を取っている。惣菜パンの中に入っていたトマトを避けて食べる。紙透さんに与えられた席は、僕の隣だった。

「紙透さん」

　彼女に声をかけたのは、同じクラスの蔑白夕未だった。僕はいつものようにパンを頬張りながらスマホを触り、でも、ちらりと視線だけで隣の様子を伺った。

「なんですか？」

　紙透夏架は、名前にそぐわず涼しい人間だった。それがクラスの第一印象だろう。自己紹介の時は自分の言いたい事だけを言い、表情を変える事もしない。それ以降、この時間まで喋り出す事もなかった。あとは、肩甲骨辺りまで伸びた黒髪が綺麗とか、そのくらいだ。

「私、蔑白夕未っていうの。名前だけの学級委員長やってる。一緒にお昼食べたいなって思って。隣、いい？」

「はい、大丈夫です。私は紙透夏架です」

「知ってる」

　蔑白さんは笑いながらどこからか椅子を持ってきて、紙透さんの机の上で弁当箱を開けた。一方で、紙透さんの食事は小さなパックの野菜ジュースとクッキー数枚だけ。

「それだけで足りるの？」

「はい。小食なので」

「それクッキー？　どこに売ってるやつ？　何のクッキー？」

「自分で作りました。オーツ麦という麦で作ったものです」

「へー。よく分かんないけど凄そう」

　それから二人は、しばらくどうでもいい話をしていた。ここの校舎が古臭くて気に入らない事、紙透さんが以前までいた学校の事、紙透さんが親の都合で転校してきたという事。まあ、話すと言うにはあまりに一方的ではあった。蔑白さんが年相応の女の子らしさを見せるのに比べ、紙透さんは仏頂面のまま一言二言返すだけだった。

　蔑白さんは、誰とでも仲良くなれるような人間だった。話しているとなぜか、まるで昔からの友人であったかのような錯覚を起こさせる。だから、他の人が紙透さんとの距離感を図り損ねているのに対して、違和感なく接する事ができたのは蔑白さんだけだった。「夏架って呼んでいい？　私の事も夕未でいいから」「分かりました」という会話も不自然じゃなかった。

「夏架が朝言ってた、『全人類を幸福にする』っていうの、何か方法があるの？」

　蔑白さんが何でもないように訊ねる。その瞬間、一瞬だけ会話が止まった。蔑白さんが「どうしたの」と戸惑いながら言う。

「少し、意外でした。『どういう意味？』ではなく、方法を訊ねられたのは初めてです」

「だってそうじゃん。するって決めてるならもう方法を訊く以外になくない？」

「私がこういう事を言う度、人は普通奇怪なものを見る目で私を蔑みます。蔑白さんは他の人とは違うんですね」

　紙透さんは相変わらず無感情に言い、そして机の中から一枚の紙を取り出す。時間割表だった。昼休みの後、つまり五時間目は音楽になっている。

「音楽は、音楽室で授業を受けるんですか？」

「そうそう。それもまたこの貧乏くさい校舎の音楽室で」

「なら、そこで分かります」

　紙透さんがそれを言った時、教室中の興味が一斉に彼女へと向けられた。僕だって例外じゃない。蔑白さんはクラス全員の意見を代弁して、「何が？」と訊ねた。

「全人類を幸福にする方法です。音楽室でそれを見せられると思います」

　手に力を込めながら、彼女は言った。僕の視線は自然と、その彼女の手に吸い寄せられていた。

「先生、紙透さんが何か言ってたんですけど」

　授業開始五分前、胸を仰け反らせて座っていた真囚君が大きな声で叫ぶ。彼は悪い意味でよく目立つ人間だ。彼に良い印象を持つ人は少ない。

「紙透さん？　どうしたの？」

　音楽担当の女教師が訊ねる。紙透さんはまず、真囚君に向かって軽く一礼した。何でもないように、「ありがとうございます」と言いたげに。真囚君本人はそれに不快そうな表情を滲ませた。

「少しだけ、ピアノを弾いてもいいですか？」

　紙透さんは不思議な人だ。彼女の真っ直ぐな眼差しに当てられると、なぜか逆らう気が失せていく。彼女自身が一つのルールみたいに思えてしまう。女教師は「別にいいけど」と、隣にあったピアノに目をやった。紙透さんはまた「ありがとうございます」と会釈をした。

　そうして彼女がピアノ椅子に腰をかけた瞬間、僕は理解した。

　例えば、受話器は電話機に固定されるように。モナリザがルーブル美術館に飾られるように。宝石が淡い光に照らされながらショーケースに並ぶように。どんなものにも居場所というのがある。そこに必要とされているから、そこでこそ価値が見出せるから。そういうものだ。

　彼女の居場所は、きっとそこだった。ピアノ椅子に座り、鍵盤にゆっくりと手を置く。鋭い目つきを崩さず、流れるような手つきで音を奏でていく。その全てが、彼女が世界で唯一美しく在れる場所である事を示していた。

「私にはこれしかありません。ピアノを弾く事しか能がない私ですが、これさえできれば世界を幸福で満たす事もできると思っています」

　気付けば曲は終わっていて、ピアノ椅子から立ち上がった彼女がそう言っていた。朝の自己紹介の続きみたいな演説だった。

　そして今度こそ、もう彼女の言動を見下げる者はどこにもいなかった。彼女が奏でた旋律は、それを実現できる強さを持ち合わせていたから。

　それに反比例するように、僕の中にあった興味はどこかへと消え去っていた。幸せで満たしてくれるものなんて、興味が無かったから。

＊　　＊　　＊　　＊　　＊

　それから紙透夏架は、クラスの中心になっていった。昼休みになると蔑白さんを含めた友人数人で昼食を取るようになった。

「オーツ麦は肌荒れや乾燥肌にいいんですよ」

「でも夏架って、肌荒れ気にしないでいいくらい綺麗な顔してるよ？」

「私が気にしているのは手の肌荒れです。手が荒れていると皮が厚くなってしまう。鍵盤と指の間に少しでも違和感があると、完璧な演奏ができなくなるんです」

「確かに、夏架の手ってピアノ演奏者の手って感じがする。昨日ガチャガチャのレバー回してる夏架見てて思った」

「え、ガチャガチャって何」

「昨日夏架と買い物行ったついでに一緒にやったの。そうそう、夏架が目当てのものが出ないってずっと回しててさ。私笑い堪えるのに必死だったんだけど」

「夏架がガチャガチャとか想像しただけで面白いんだけど。何が欲しかったの？」

「ウォシュレットの、ボタンです」

　一際大きな笑い声が響く。最初こそ怖いイメージもあって距離を置かれていた彼女だったが、話せば面白い人間と分かったらしく、そんな彼女を慕う人は多かった。

「夏架」

　僕のやや後ろから、低い声が一つ聞こえた。真囚君だ。彼も例外じゃない。彼もまた、紙透さんがピアノを披露したあの日以来、何かと彼女に近付こうとしている。

「えっと、この前は助かった。あいつも喜んでた」

「それは良かったです。私でよければいつでも協力しますので。ちゃんにもよろしくお伝えください」

　これも盗み聞きをしていて分かった事なのだが、というか隣で大声で喋られたら嫌でも耳に入るのだが。ともかく、紙透さんは真囚君の妹にピアノを教えているのだそうだ。どういう経緯があったか知らないけど、不良と呼ばれても仕方ないあの真囚君がこうも変わる。それほどに彼女の演奏が鮮烈だったという事だろう。

「それで、言ってたコンサートの事だけど」

「はい、分かってます。夢来ちゃんにも私の方から声をかけます」

　紙透さんが言うと、周囲にいた女子たちが「何の話？」と彼女に訊ねた。

「今度、コンサートに出場するんです。それに夢来ちゃん、君の妹も呼ぶ予定で」

「へぇ。いつ？」

「二年後です」

「まだまだじゃん」

「早めに準備するに越した事はありませんから」

　僕は検索エンジンのサジェストに「紙透夏架」と名前を入れて調べてみた。芸能人ほど有名ではないにしろ、名前を入れるだけでコンテストの結果や大会の名前が出てくる。自身で語った夢を成し遂げる為、こうやって紙透夏架の音を広めているのだろう。

「それってどんなコンサートなの？　なんか凄いやつ？」

　蔑白さんが訊ねる。紙透さんはその質問に「凄いやつ、かどうかは分かりませんが」と悩ましく口を開いた。

「一つ確かなのは、とても大切なコンサートだという事です。この十数年の人生で、最も緊張する一日であり、同時に、最も楽しみな一日でもあります」

　僕と紙透さんが初めて話したのは、とある日の午後の授業だった。眠くなるような気温が、窓の外から僕を温めていた。

　授業中に彼女が落とした消しゴムが、僕の足元付近に転がってきた。僕はそれを拾おうとして、屈んで右腕を伸ばした。

「ありがとうございます」

　それが、僕に向けられた最初の言葉だった。こういう時は何と返すべきなのだろう。いつも少しだけ悩まされる。僕は「あ、うん」と言葉にならないような曖昧な返事をした。

　消しゴムを受け取った彼女が、僕の腕を見つめていたのに気が付いた。腕を伸ばすとそれを目で追いかけ、下ろすと目も下を向く。僕は気になって「何か付いてる？」と訊ねた。

「あ、いや。名執君って腕が長いんだなってちょっと思って」

　その言葉に、僕の体は一瞬固まってしまった。今度はそれを見た紙透さんが「何か？」と不思議そうに首を傾げた。

「僕の名前を覚えてるとは思ってなくて」

「いい加減、クラスメイトの上の名前くらい覚えます。それに、隣の席ですから」

　彼女が転校してきて、既に半月が経っている。僕は半年経っても、多分一年経っても、一クラス分の人名を覚えられる自信がなかった。

「腕の長さなんて気にした事なかった」

「少し羨ましいです。ピアノを弾くのに有利ですから」

「そうなの？」

「もちろん人によるでしょうけど、例えば私の場合、高すぎる音や低すぎる音を鳴らそうとすると、腕をうんと伸ばさないといけないんです」

　そう言って紙透さんは、僕がしたように右腕を横に伸ばした。高い音の鍵盤を叩こうとしているみたいに、横に長く。僕はまた、そんな彼女の手をじっと見つめていた。

「そう言えば、名執君の下の名前をまだ聞いた事がありませんでした」

　ピアノを弾いているような態勢をそのままに、彼女が僕に言った。僕は自分の名前を言葉にしようと、口を開く。

「夏架さん？　どうした？」

　その時、彼女の仕草を不審に思った女教師が名を呼んだ。紙透さんは少し慌てながら「なんでもありません」と弁明する。

「もだぞ。授業中は私語禁止ー」

　僕も名前を呼ばれ、「すいません」と形だけの謝罪を口にする。教師がまた前を向いて板書を始めたのを見て、僕は紙透さんの方を向く。そして小さな声で囁いた。

「分かったと思うけど、崇音っていう名前。名執崇音」

　世の中には、どうしようもなく言語化できないものがある。

「暑い」以上に暑かったり、「感動」以上に感動したり、「美しい」以上に美しかったり。そういう時、人はただ自分の言語能力への無知を噛み締めるしかない。

　僕が自分自身の名を口にした時、彼女が見せた表情もその類だった。一つ分かるとすれば、僕はその時の彼女の顔を、一生忘れる事ができないだろうという事だ。

　怒り、悲しみ、苦しみ、絶望。そういう感情を全て凝縮したかのような表情だった。おおよそ人が人生で見せる事のない表情だったと思う。

「名執、崇音」

　彼女が柔らかな声音で、初めて僕の名を呼んだ。まるで催眠にでもかかったかのように無感情だった。

「……紙透さん？」

　僕は不思議になって、彼女を呼んでみた。紙透さんは「そっか」と呟いただけだった。

「なんでもないです」

　そしてそれが、僕と彼女が生前交わした最後の言葉だった。

　彼女は自分の手に握られていた、さっきの消しゴムを筆箱の中にしまう。

　その筆箱の中から、音符のストラップらしきものが半分だけ顔を出していた。

＊　　＊　　＊　　＊　　＊

　最初は、鞄の中に煙草が入っていたところから始まった。所持品検査の際にそれが教師に見つかり、その時になって初めて僕もそれを目にした。青空と言うにはあまりに深い、暗い藍色のパッケージだった。

　僕は困惑した。煙草が入っていた事に、ではない。苛めというものが始まった事さえどうでもよかった。分からなかったのは、苛めが始まった理由だ。

　元々苛めのあるクラス、あるいは悪意のあるクラスなら分かる。火が次々と違う人へ燃え移り、元々燃やされていた人は何でもないような顔をして火を点ける方へ回る。そういう話は聞いた事がある。

　このクラス、この学校で苛めなんて、そんな事が起きるとは思わなかった。そういうフィクションじみた行事からはかけ離れている場所と思っていた。苛めなんて、どこか遠い国の御伽噺のようなものだった。

　加えて、何かを皮切りにしたように突然始まった事も疑問だった。僕が何か、誰かの気に障ったような言動を取ったのならまだ分かるのだ。でも僕はいつも通り、誰とも関わらずにただ一人で行動していただけだった。

　最近何か不可解な事があっただろうかと、直近の記憶を思い浮かべてみて、そして脳裏によぎったのが彼女との会話だった。

　教師の言葉を聞き流しながら、隣に目をやる。紙透夏架は、涼しい表情で俯いている。

　周囲を見渡して、数人の視線が彼女にあったのを見て、僕はようやく理解した。彼女か、と。理由は分からないけど、彼女が中心に違いない。そう思った。同時に、彼女を中心とした「これ」はこの先も続くと、そんな予感があった。

　何かが壊れたりとか何かが失くなったりとか、そういう細かい事は連続して起きていた。けれど時たま、明らかに規模の大きいものも訪れた。机の上にあったお菓子が近所のコンビニで起きた盗難事件の商品だったり、学校の備品である机が鈍器か何かで殴りつけられたように壊れていたり。そういう、教師を巻き込む類のものだった。

　不思議だったのは、身体への実害は一切無かった事だった。てっきり誰かに殴られたりするものかと思っていたけど、起こるのは決まって僕の身のギリギリを掠めていくものだった。これも紙透さんから指示があったのかもしれない。体に傷は付けるな、とでもいうような。大方苛めの事実が露呈するのを恐れたのだろう。

　紙透夏架が転校してまだ半月の話だ。そしてそれは、僕らが高校三年生になるまでの二年間、ずっと続いていた。

＊　　＊　　＊　　＊　　＊

　その日は金曜だった。土日という連休を前に、一週間に一度だけ味わえる高揚感。それは、夏の始まりを予感させるような六月の快晴とよく似ている。

　僕はある意味で、休日というものが好きではない。でもそれは、休日が嫌いという事でもない。休日が好きだからこそ、それを手に入れたくないと思う。

　休日になると、ネガティブな僕はこう考える。「ああ、あと数時間で休日も終わってしまう」と。簡単に言えばカウントダウンを始めてしまう。そういう意味では、休日に入る前の金曜日が好きだ。その高揚感だけを永遠に味わえたらいいのにと思う。

　それは夏も同様だ。夏になれば、否応なしに夏の終わりまでを意識してしまう。夏が始まる前の、その年初めて蝉の鳴き声を聞いた瞬間の、今日のように夏の始まりを想起させるような空を見上げた時の、そんな日々だけを求めていたいと思う。

「名執君じゃん」

　駅のホームにあった自販機で、百五十ミリリットルのサイダーを購入した時だった。傍のベンチに座っていた、蔑白さんに声をかけられた。

「名執君こっち行き？」

「まあ、うん」

「私は逆方向。入るホーム間違えちゃった」

「じゃあ戻れば？」

「冷たいなあ。夏なのに冷たい」

　蔑白さんは少し笑って、それっきり黙ってしまった。こういう時の会話の持続方法を知らない。少し気まずいだけの沈黙が流れる。用が無いなら話しかけないで欲しい。

　蔑白さんとは一年生の時に同じクラスになって以来、二年生三年生と違うクラスだった。たまに廊下ですれ違った事があるくらいだろうか。

　ホーム内に古いラジオのようなざらついたアナウンスが流れる。しばらくしてようやく、「名執君さあ」と蔑白さんが口を開いた。少しだけ低い声だった。

「学年のライングループ、入ってないでしょ」

「うん」

「入りなよ。宿題の締め切りとか連絡くるから便利だよ？」

「今の僕が入ったらどうなるか、ちょっとだけ興味はある」

「ウケる」

　僕を苛めよう、みたいな空気感は、今や僕らの学年全てのクラスに蔓延していた。恐ろしいのは苛めそのものではない。紙透夏架という一つの存在が、ここまでの影響力を持った事だ。彼女の何が人を駆り立てるのか知らないけど、このままいくとテロだって起こせるような気もしている。

　彼女は大きく笑いながら携帯を取りだし、何かの画面を僕に見せる。紙透さんとのラインの履歴だった。

「一年の時の夏、夏架から一斉送信がきたの。名執君をシメよう、みたいな。それから、その方法と実行する人を夏架が決めて、それをメッセージで送ってる」

「それをライングループでやらない理由は？」

「知らない。大きな場所で情報共有するより、個人間でやり取りする方が証拠残らない、とかじゃないの」

「大変そうだね」

「頑張ってるっぽいね。しかも夏架に命令されなくても自主的に動く奴もいるから」

　蔑白さんは「色々大変かもしれないけど頑張ってね」と僕の肩を叩き、そしてどこかに去って行った。電車を待ってしばらくして、ようやく僕を待つ為にあそこにいたのだと気が付いた。

　混じり気の無い、澄んだ青空がひたすらに眩しかった。文字通りに身を焦がすような直射日光が憎らしかった。ペットボトルの蓋を開け、中身を少しだけ口にする。のどごしの悪い炭酸が食道を通って、あと何口で飲み干してしまうのだろうと、そんな事を考える。

　紙透夏架が自殺したのはその日だった。

　ホームから転落し、電車に轢かれて死んだらしい。

＊　　＊　　＊　　＊　　＊

『私は世界でただ一人、名執崇音という人間が許せませんでした』

　学年のライングループにそのメッセージが送られた十分後、紙透さんは死んだ。

　その関係で、僕は軽い取り調べを受ける事になった。彼女の推定死亡時刻や、突如送られたメッセージの存在。それらは全て、その時に警察から初めて聞かされた事だ。当然ながら、僕は彼女を殺してなどいない。すぐに解放された。

　それからすぐに、自殺したのだろうという事が教師を通じて生徒に知らされた。「紙透夏架」と検索をかけると、相変わらず過去の輝かしい栄光だけが出てくる。そのくらい、彼女の死は些細なものだったらしい。

　結局、学年に残ったのは「名執崇音が復讐したんだ」という空気感だった。まあ、動機としては大いにあり得る話だ。彼女が転校して二年、もう彼女を否定する人間はいない。

　ようやく、という言い方が正しいかは分からないが、身体への実害が起きたのはそれからだった。買い換えたスリッパを履いてトイレを出ようとした時、僕の行き先を真囚君が阻んだ。

「……何したんだよ」

　彼が何を言いたいのか、僕はすぐに分かった。僕が見ていた限り、彼は最も紙透さんに洗脳された人間だった。狂信者と言い換えてもいい。とにかく、彼は紙透夏架という神様を妄信し続けていた。

「消しゴムを、拾った」

「それから？」

「名前を教えた。僕の名前を」

「そうかよ」

　てっきり顔を殴られるとばかり思っていたから、胃液を吐き出した時に気付いた痛みは予想よりも遥かに強かった。少し考えれば分かる事だった。人の目に付く場所に傷は付けない。虐待と同じじゃないか。

「俺の妹はそれなりにピアノが上手かったけど、夏架の演奏を聴いてから井の中の蛙って事を思い知って、夏架みたいに上手くなりたいって言ってた。コンサートだって楽しみにしてた」

　後にも先にも、僕にこういう事を繰り返したのは彼だけだった。規模の大きいものも、多分真囚君一人が画策していたのだろう。それだけ、彼の心は紙透さんに囚われ続けている。

「夏架がどれだけピアノが好きだったか、どれだけコンクールを心待ちにしてたか、全人類を幸福にするって夢がどれだけ本気だったか、お前に分かるか」

　どっちにしろ模範解答は無かった。僕が何と言おうと彼は僕を殴るつもりだった。

「……知りたくもない、そんなの」

　そうと分かっていても、普通はなるべく当たり障りのない答えを口にするべきなのだろう。なのに、僕は彼を、あるいは彼女を嘲笑うようにそう言っていた。無意識でそれを選んでいた。

　彼は懐からハンマーのような鈍器を抜くと、それで僕の右手を打った。鳩尾を何度も殴られ続けるより、その一回の方が痛かった。

「……なんで、笑ってんだよ」

　トイレから出て行く寸前、彼はそう言った。僕は笑っていたらしい。

　笑った自覚はなかった。でも、笑っていたならその理由は明確に分かる。それを口に出す事はしなかったけど。

＊　　＊　　＊　　＊　　＊

　紙透夏架が死んで一か月、彼女は死んで尚苛めの主犯格で在り続けた。

　その日もまた、よく晴れた日だった。夏の始まりが過ぎて、夏の終わりまでをカウントダウンし続ける日々だった。

　朝、僕が登校すると真囚君が出合い頭に水をかけてきた。自販機にペットボトルで売っている、ただの水だ。容器を押しつぶすと、飲み口から勢いよく水が出てくる。そうやって僕に水をかけた後、僅かに残った水を一気飲みしてゴミを僕に投げつけた。水を飲みたいけど、ペットボトル一本分は少し多い。適度な目分量だけ飲みたくなる気持ちは少し分かる。

　教室にいた人達が「可哀想に」「またやってるよ」と口々に呟いたのが聞こえた。僕は教室に入らず、そのままトイレに向かう事にした。着替えと、体を乾かす為だ。

　その道中、蔑白さんが廊下の向こうから歩いてくるのが見えた。ふと思い出してみると、蔑白さんが一連のあれこれに与した記憶は無いような気がする。ある意味で、唯一の傍観者だったかもしれない。

　アクアリウムの床を濡らしながら、廊下をゆっくりと歩く。蔑白さんとすれ違うその瞬間。彼女は僕の方に音もなく近付いてきて、そして、耳元でこう囁いた。

「夏架を殺したのは、私だよ」

　トイレを出る頃には、もう一時間目の授業が始まっている時間だった。僕に対する教師の心象は地ほどに落ちている。授業に出ようか、それともやめようか。そう考えていた時だ。

　どこからか、ピアノの優しい音色が流れてきた。いや、方向は分かる。音楽室だ。ピアノがあるのはそこしかない。じゃあ、誰がピアノを弾いている？

　答えは簡単だ。音楽の授業を受けているどこかのクラスだ。そう考えるのが普通だし、それ以外にはあり得ない。ちょっと練って考えるにしても、授業をサボったどこかのクラスの生徒が弾いている、くらいだろう。

　しかしなぜか、僕の直感はそのどちらでもなかった。むしろ、この場に置いて最も非現実的な答えを導き出していた。そんなはずはない。でも、それ以外には考えられない。そんな自己矛盾に決着を付ける為、僕の足は音楽室へと向かっていた。

　古臭い校舎にあるのは音楽室を始めとした特別教室、それに一年生のクラスだ。音楽の授業でもない限り、三年生になった僕らがその校舎に立ち入る事はほとんどなかった。

　音楽室の扉の前に着いた時、僕は不思議な気持ちに苛まれた。僕は、この扉を開けなければならない。理由は分からないけど、脳内で僕の声がこだましていた。本能にも近しい何かが、僕を掻き立てていた。扉にあるすりガラス越しに室内を見ると、ピアノを弾く誰かの背中が薄っすらと見える。

　さて、受話器が電話機に固定されているのを見た時、モナリザがルーブル美術館に飾られているのを見た時、宝石が宝石店のショーケースに並んでいるのを見た時。人は何を思うだろう。僕の答えはこうだ。「何も思わない」。

　そこが居場所だからだ。そこ以外にあっては不相応だからだ。然るべき場所にあるのを目にした時、不自然さが全く感じられない。人はそこを居場所と呼ぶ。

　扉を開けて、ピアノ椅子に座ってピアノを弾いている彼女を見た時、僕の中に違和感というものが全く無かったのだ。それが例え、一か月前に死んだはずの彼女だったとしても、僕はそれになんの疑問も抱けなかった。笑ってしまうくらい、おかしな話だ。

　紙透夏架はそこで、ピアノを弾いていた。凪のように穏やかな表所で、ただ一心不乱に、この世界にはそれ以外に何も存在しないように。ただ、目の前の楽器を奏でていた。

　そっと、一歩を踏み出す。音楽室に足を置く。それでも、彼女はピアノを弾き続ける。きっと僕の事など眼中にないのだろう。視界に映っているのは、白と黒の鍵盤だけだったに違いない。

　それは僕が彼女の隣に立っても変わらなかった。さすがにここまでくると、僕は自分の見ているものが幻覚なのだと気付いていた。けれど、今になって紙透さんの幻覚なんてものを見る理由が分からなかった。この幻覚は、触れたら消えるのだろうか。もし消えたら、この吸い込まれるようなピアノの音色も止むだろうか。そんな事を思いながら、そっと、彼女の背中に触れてみる。

「邪魔するな」

　僕の手は、彼女の背をすり抜けて腹部を突き抜けた。何かに触れたような感覚は無い。煙に触ろうとしているみたいだった。

　彼女の表情は一転し、明らかに不快な感情を表していた。他の何も受け付けない、不純物を許さない強さがある。

　少し悩んだが、僕はただ待ってみる事にした。これが幻覚にしろ何にしろ、最後はどうなるのか。僕が関与して表情を変えたという事は、いつか終わりがあるのだろうと思った。だから、その時がくるまで、隣で彼女の手を見つめていた。

　十分ほど経った頃だろうか、紙透さんは高い音を出そうと、右腕をピアノの端に伸ばした。しかしそこで指が滑ったらしく、彼女は「クソ」と叫んで鍵盤を拳で叩いた。音楽室に耳を劈くような不協和音が響く。

「何しに来たんですか」

　目の前にいるのが、あの紙透夏架だとは思えなかった。彼女が冷たい人間だと誤解されやすいのは、感情を顔に表さないからだ。しかし今、紙透夏架は明らかな敵意と怒りを込めて僕を睨んでいる。いや、紙透夏架は死んでいるから、これは彼女じゃない。ならやっぱり、僕の見ている幻覚だろうか。

「死んだ人間がピアノを弾いてたら、確かめたくなるものじゃない？」

「私ならそんな事はしませんけど」

　彼女は手を伸ばす。またピアノに触れようとする。でも、その手は鍵盤に触れる事なく、ピアノをすり抜けてしまった。ついさっき、僕が彼女に触ろうとしたみたいに。

「……触れない」

　彼女は小さく呟くと、溜め息を吐いてまたピアノ椅子に座り込んだ。

　僕が紙透夏架の幻覚を見る理由が分からない。仮に幻覚なのだとして、僕の知っている紙透夏架とこうも乖離している理由も分からない。だから僕は、もう一つの可能性を口にした。幻覚なんかよりも、はるかに現実味のない可能性を。

「君は、幽霊なの？」

　彼女は僕の言葉を無視し、「初めに言っておく事があります」と、立ち上がって怒りをそのままに話を続けた。

「私は、貴方が嫌いです。何よりも嫌いです。貴方の存在が、この世の何より憎い」

　僕は反応に困ってしまった。はっきりと嫌悪を示された場合の対処法なんて、大人も時間も教えてくれなかった。道徳の授業でも習わなかった。

「理由が分からない。僕が君に何かした？」

「ちょっと黙ってください、私が喋ってます」

　僕の質問には答えなかったくせに。思ったが言わなかった。というより、言えなかった。幽霊という現実離れした事実を前に、僕は頭を整理する必要があった。

「私は気が付いたらここにいました。目の前にピアノがあったから、何かを考えるより先に手を伸ばした。最初は何の問題もなく弾けていましたが、貴方が来てから触れなくなった。何もかも、全部全部貴方のせいです」

　そう言って彼女はまたピアノに触れようとする。案の定、彼女の手はすり抜ける。

「死んだ自覚はありました。朝起きて、『起きたんだ』と自覚する瞬間が分からないように、最初から決められていたように、私は死んだという事実を持っていました。だからこそ、最悪だった。生きていない私では、ピアノを弾いたって何の意味も持たないのに」

　彼女はそこを一区切りとして、また「最悪」と溜め息を吐く。口を挟めるならここだと思ったから、僕は「分かったから」と口を開いた。

「もう、分かったから。君は死んで幽霊になって、ピアノも弾けなくなって、ああ可哀想だね、って。そういう事だろ？　君がどうして僕を嫌ってるのか知らないけど、もうそんな事どうでもいい。とにかく、もう君とは金輪際関わらないから」

　言いたい事だけをまくし立てて、僕はその場を去ろうとした。彼女が幽霊だから、それが何だと言うのだろう。ピアノを弾けないままこの場所に自縛され続けて、誰かがピアノを弾く度唇を噛み締めて。そうやって死ねないまま死に続ける。それだけが事実だ。何一つ、僕には関係ない話だ。

「私が喋っていると言ったでしょう」

　紙透さんは僕を引き留めようと、僕の肩に触れようとしたらしかった。しかしその手はやっぱりすり抜けて空を切る。彼女は小さく舌打ちをした。

「幽霊というのは世の中にそういるものじゃありません。でなきゃ、この世は人間より幽霊で溢れかえっています」

　僕に触れようとした手を、そっと戻しながら彼女は言った。僕の視線は、宙ぶらりんになった彼女の手にある。

「では、幽霊の数が極端に少ない理由、分かりますか」

「そりゃあ、成仏するからじゃないの」

　僕が言うと、なぜか紙透さんは僕の顔を睨み付けた。自分から質問したくせに、意地でも僕の言葉を肯定したくないらしい。

　僕は彼女の言いたい事がなんとなく分かって、「つまり」とその答えを口にした。

「自分を成仏させろって言うんだろ？　その手伝いをしろって」

「いえ違います」

　否定の言葉だけは早かった。彼女は続けて「その逆です」ときっぱり言う。

「私を成仏させないで欲しいんです」

　僕を睨む彼女の瞳は、どこまでも澄み切っていた。まるで夏の青空のように、あるいは、夏そのものを凝固させたかのように。ビー玉のように透明だった。

「成仏したくないって、どうして」

　僕が訊ねると、紙透さんは意味が分からないというような顔をした。皺の寄った眉間はそのまま、片目をほんの少し細め、首を小さく傾げる。

「成仏したくない事に、理由が必要ですか？」

　その言葉に、僕は「どういう意味？」と訊ねる事しかできなかった。

「だって、幽霊って普通は成仏したがるものだろ。自分の中にある未練みたいなものを消化して、安らかに眠りたいって思うものじゃないの？」

「人が死にたくないと思うように、私だって消えたくなんてないんです。生きてる貴方が、生きてる人間の尺度で勝手な事を言わないでください」

　言われてみればそれは、極々当たり前にも思えた。幽霊は成仏するもの、だなんて、そんなのは死んだ事もない人間が勝手に言ってる事だ。死にたがる人間の方が少ないのと同じで、成仏したくないと泣き喚く幽霊がいるのが普通かもしれないのに。

「そうだとしても、方法が分からない。成仏させろって言うなら、未練を解消すればいいのかもしれないけど、その逆なんて知らない」

「分かってるじゃないですか」

　紙透さんがさも当然のように言う。僕は一瞬意味が分からなかったが、自分の言った事を頭の中で反芻して、そしてようやく理解した。

「成仏するのは未練が無くなるから、つまり幸福になるから。その逆です。私を不幸にすればいいんです」

　彼女は、心底嫌そうに言った。

　理屈は理解できる。でも、感情はそうじゃない。僕は一番大切であろう、根本的な疑問を口にした。

「君は、僕の事が嫌いなんだろ？」

「はい」

「じゃあどうして僕に頼む？」

「私にとっては貴方と関わる事、それ自体が既に耐え難い苦痛なわけです。つまり、貴方と共に行動すれば不幸じゃないですか」

「無茶苦茶だ」

　僕は呆れて思わず苦笑いをした。僕に断られる事を考えていないみたいな言い方をする。この傲慢さは、いったいどこから生まれるのだろう。

「貴方は断ろうとするでしょう。でも、結局は引き受ける事になりますよ」

　僕の思考を読み取ったかのように彼女は言う。いや、読み取る以前の問題だ。普通の人間なら断る。僕は「どうして？」と訊ねてみた。

「貴方は、私に恨みを持っています。言葉にできないほどの、憎悪や嫌悪。それを晴らすタイミングは、今しかないんですよ」

　そうかもしれない。彼女が僕にしてきた数々の事を振り返ると、彼女を不幸にしてやりたいと思うのは当然だ。

　でも、そこがもう間違いだ。彼女は根本的な勘違いをしている。誓って、僕は彼女を恨んだりしていないし、仕返しをしてやろうなんて微塵も思っちゃいない。

「分かった。君を不幸にすればいいんだろ。その代わり、文句は言わせない。君が頼んだ事だ」

　でも、僕はそれを承諾した。承諾した時、彼女は何も言わずに眉をひそめていた。

　そんな時でも、僕の視線は彼女の手にある。

＊　　＊　　＊　　＊　　＊

「簡潔に言います。私には二つ、成仏したくない理由があります」

　別の日の放課後、真囚君にハンマーで殴られた右手を抱えて音楽室に向かった。

　彼女は常に、ピアノの傍に立っていた。触れられないと分かっていても、そこから離れたくないのだろう。

「まず一つ、まだ曲が完成していないから」

　彼女が転校初日に披露した曲、僕が幽霊になった彼女を見つけた時に弾いていた曲。あれはどちらも、彼女自身が作曲したものらしい。

「あの曲を完璧にさせるまで、私は成仏できません」

「曲が完成したら、成仏してもいいって事？」

「いえ、まだです。私が出場するはずだったコンサートを成功させたいんです。本来なら、あのコンサートで完成した曲を披露するはずでした」

「あのさ」

　そこで僕はやっと、気になっていた事を訊ねようと口を開いた。訊くならこのタイミングだと思ったから。

「したい事もやる事もあって、どうして自殺なんかしたの？」

　ここまでの彼女の話を聞いていれば、至極当然の疑問だったと思う。成仏したくないほどに、死にたくないほどに成し遂げたい事があって、どうして死を選んだのか。

「……私は、自殺したんですか？」

　なのに、紙透さんはそう言ったのだ。僕の顔を見て、心からの困惑の表情を浮かべて。

「……どういう意味？」

　自殺なんかじゃない、と言うならまだ分かる。警察の見解は間違っていて、誰かに突き落とされた。それなら、彼女が志半ばにして死んだ理由も分かる。でも、今の言い方はまるで。

「覚えてない、みたいな言い方に聞こえたんだけど」

　そう言うと、紙透さんは僕から顔を背けた。多分、僕の言った事が正しかったから。

「……覚えてるのは、私が駅のホームで電車を待っていたところまでです。そこから記憶が飛んで、気が付いたらここに立っていました。それこそ、まるで眠っていたように」

　最初から自殺の意思があったなら、それは覚えているはずだ。なのに、それさえ頭には無くて、気付いたら死んでいた。ここから分かる事は、一つだけだ。

「私は、どういう風に死んだのでしょうか」

　彼女が訊ねるので、僕は自分が知る限りの範囲で話した。学校の人間が話していた事と、警察から聞いた事も。

「一つ確かなのは、君は自殺したと警察が言ってる事。それから、君の四肢は電車に轢かれた瞬間に千切れた事。これは僕の目で直接見たわけでもないし、もしかすると間違いかもしれない」

「そこまで酷い状況で、どうやって死体を判別したんでしょう。私と分からないような状況に思えますが」

「事故現場の近くにいた生徒の一人が、君と分かって警察に報告したらしい。言わば第一発見者だ」

　そこまで言った時、紙透さんはまた僕の顔を睨んだ。表情にほんの少しの違和感を含ませながら。

「名執君、妙に詳しいですね」

「取り調べ受けたからね」

「取り調べって、どうして？」

「どっかの誰かさんが変なラインしたから」

　そう言うと、紙透さんは少し考えるような素振りを見せ、でもすぐに「ああ」と思い出したように言った。まさかこいつ、今の今まで忘れてたのか。

「いい気味ですね」

「言うと思ったよ」

「じゃあその右腕の怪我は、私のせいという事になるんでしょう」

　彼女の言葉に、僕は思い出したように右腕を見る。打撲痕のような、青い痣がある。

「分かってたのかよ」

「言っておきますけど、罪悪感とか少しもありませんよ。本気でいい気味と思ってます。貴方が不幸になればなるだけ、私は嬉しいですから」

　不幸になりたいと言っておきながらそれはどうなのだろうと、少しだけ思った。その疑問は口には出さず、僕の口からは代わりに別の言葉が零れていた。

「別にいいよ。僕もそう思うから」

　それは、無意識で言った事だった。会話を聞きながら生返事をした時のように、自分が口にした言葉なんて一瞬で忘れる。だから、目の前の彼女が不可解なものを見る目で僕を見ていた理由が分からなかった。

「なに」

「……別に」

　紙透さんはそう言って、話題を変えるように「決めました」と言った。

「私を発見してくれた、いわば第一発見者が誰なのか、知りたいです」

「知って、それでどうするの」

「どうもしません。というか、できないでしょう」

「じゃあ何の為に探すんだよ」

　そう訊ねると、紙透さんは深い溜め息を吐いた。どうしてそんな事も分からないのか、とでも言いたげな苛立ちを多分に含んだ溜め息だった。

「本当はお礼が言いたいです。『私を見つけてくれてありがとう』って。でも、私にはそれもできない。お礼すら言えない悔しさと情けなさを噛み締めるしかない。それもまた、私にとっての不幸ですから」

「マゾヒストだ」

「殺しますよ」

　やれるものなら、と少し言ってみたかったが口には出さなかった。

「で、それに協力しろって言うの？」

「当たり前じゃないですか。貴方がやらなきゃ誰がやるんですか」

　今度は僕が溜め息を吐く番だった。不幸にしろと言ったり人を探せと言ったり。話があちこちに飛躍する。

「つまり、前提として私を知っている人間、という事になりますね。それなりに限定されると思います」

「は？」

　僕は思わず、そんな素っ頓狂な声を出していた。彼女本人は「なんですか」と不快感を露わにして僕を睨む。こいつ、本気で言ってるのか。

　紙透夏架という存在を知っている人間。それで限定されたなんて、本気で言っているのだろうか。馬鹿にも程がある。クラスの人間はもちろん、生前の彼女の人間力はそこだけに留まらなかった。完璧な容姿と、人に慕われる性格。そんな人間は中々いない。十中八九、学校の人間は全員彼女を知っている。生徒も教師もだ。おまけに、ピアノでそれなりに名もあったらしいから、範囲は学校外にまで及ぶ。

「そんな人はたくさん——」

　彼女の言葉を思い出したのは、僕がそう言おうとした時だった。通りすがりに、僕に耳打ちするようにそっと囁かれた彼女の言葉。

「夏架を殺したのは、私だよ」

「……そう言えば、蔑白さんが、君を殺したって言ってた」

「は？」

　そんなはずがあるか、という表情だった。そうなると思う。紙透さんと蔑白さんは親友だった。誰が見てもそうだった。誰よりも密度のある関係性だった。そんな荒唐無稽な話、信じる方がどうかしているのだろう。

「貴方が、そんな嘘をつく理由が分かりません」

「そうだね。だから嘘じゃないんだよ。理由が無いから、嘘じゃない。蔑白さんが第一発見者だとしても辻褄は合う。殺人事件の犯人は大抵第一発見者だって言うし」

「あり得ないでしょう。夕未さんが、私を殺すとか。私と夕未さんを知る人間なら誰だってそう言います。そのくらい、名執君だって分かるでしょう」

「言いたい事は分かるけど、蔑白さんがその口でそう言ったのは確かだよ。君が信じようと信じまいと、それだけが事実だ」

「貴方は、私の親友を、私の目の前で侮辱してるんですよ。それが自分で分かってるんですか」

　その言葉に、僕は思わず笑ってしまった。お前が、そんな事を言うのか。

「自分が人にした事は棚に上げて、一丁前に人間らしい事言うんだね」

　僕の言葉に紙透さんは黙った。別にそんな事本気で思ったわけじゃない。でも、犬が好きだと言った人間が猫を連れて帰ってきたら、笑うに決まってる。

「違う。夕未さんじゃない。夕未さんは、私を殺したりなんてしない」

　紙透さんは機械のように、その言葉だけ繰り返している。信じる信じないのスタートラインにすら立たず、そこから目を背けて僕が嘘をついていると言う。

「だけど現に、君は殺された時の事を覚えてないんだろ？　誰かに突き落とされたとしても、それを覚えてない」

　そう言うと、紙透さんはまた黙ってしまった。

　僕はどうするべきか迷った。だから、まずは第一に優先すべき事を考えたのだ。彼女を成仏させない為に、彼女を不幸にする。その為の行動を取る。

　僕の視線はいつでも、彼女の〝手〟にある。

「簡単だよ。蔑白さん本人に確かめればいい」

　紙透さんが音楽室の外へ出たのを初めて見た。制服姿のまま廊下を歩く彼女は、どこからどうみたってこの学校の生徒だ。

「蔑白さん」

　僕が声をかけると、蔑白さんは顔を上げてこちらを見た。僕の隣には、紙透さんが立っている。

「なに？」

　蔑白さんは首を傾げながら笑いかける。僕はそれに眉をひそめた。

「言い忘れてましたが、私の姿を認知しているのは今のところ名執君だけです」

　早く言えよ。心の中でそう叫んで、「何してるのかなって思っただけ」と言葉を紡ぐ。

「日誌書いてるの。面倒くさいやつ」

「このクラスでも委員長やってるんだ？」

「名前だけのね」

　そこは蔑白さんや紙透さんの所属する三年二組の教室だった。僕が所属している一組ではない。ゆっくりと教室に入り、蔑白さんの隣の席に座ってみる。彼女はそれに「どうしたの？」と少し微笑みながら訊ねた。

「ちょっと話がしたくて」

「いいよ。何の話？　恋バナとか？」

「紙透さんについてなんだけどさ」

　僕が言うと、蔑白さんはさっきまでの微笑みから一転、酷く不快そうに顔を歪めた。僕はもちろん、傍で見ていた紙透さんも少し身じろいだのが分かった。

「まさか、名執君からその話するとは思わなかったな」

　彼女は視線だけで話の続きを促す。人当たりのいい蔑白さんからは、想像もできないような表情だった。

「紙透さんが死んだとき、まあ、簡単に言うと体がぐちゃぐちゃになったらしい。普通なら誰かも判別できないくらいに。でも、誰かが警察に紙透さんだっていう事を報告してる。第一発見者がいる。それってもしかして、蔑白さんだったりしない？」

　そう訊ねると、蔑白さんは何を考えているのか分からないような表情をしたまま、しばらく黙っていた。僕が「どうしたの？」と言おうとしたタイミングでようやく口を開く。

「名執君は、その第一発見者を探してるの？」

「まあ、うん」

「どうして今更？　そもそも、どうしてよりにもよって名執君が？」

　紙透さんのせいで苦しめられていた僕が、どうして紙透さんに関わるような真似をしているのか。そう訊ねたかったのだろう。

　チラリと、傍に立つ紙透さんを見る。彼女も彼女で、何を考えているのか分からない表情をしている。

　女子は怖いな。そんな事を思いながら、とりあえず「秘密」と言ってみた。蔑白さんは特段気にした様子もなく、「ふーん」と生返事をする。

「残念だけど、いや残念なのか知らないけど。私じゃないよ」

「そっか。残念だよ。君に発見されたなら紙透さんも喜んでただろうに」

「なにそれ、夏架への嫌味？」

　そう言って蔑白さんは少しだけ笑った。紙透さんが舌打ちをしたのが聞こえた。

「話ってそれだけ？」

「……いや、もう一つ。蔑白さんに伝えたい事があって」

　蔑白さんは日誌を閉じ、体をこちらへと向けた。聞いてやるから話せ、という事だろう。僕は一つ息をつき、口を開く。紙透さんを不幸にする、その為の言葉を吐く為に。

「紙透さんは、君の事が嫌いだった」

　隣にいた紙透さんが、「は？」と声を漏らした。僕は言葉を続ける。

「本人から聞いた事がある。蔑白さんの言動全てが神経を逆なでする、蔑白さんが息をするだけで、存在するだけで、果ての無いような憎悪が湧きたってくる」

「……名執君？」

　僕の名前を、紙透さんが焦ったように連呼する。だけどそんなの、僕が知らないふりをすれば五十二ヘルツの鯨にしかならない。

「本当に大切なものだけはどこかに隠して、嘘をついて自分を大きく見せようとして、それでヘラヘラ笑っているような、蔑白夕未という存在が殺したいくらいに憎い。確かにそう言ってた」

「名執君」

　紙透さんは一際大きく言い、僕の肩に強く触れようとする。でも、それすらも、生きている僕には届きはしない。

「……それを、私に言いに来たの？」

　僕は頷く。

「どうして今になって？」

「分からないけど、何となくそうしたかったから、とか？」

　敢えて、紙透さんがより苛立ちそうな言い方をした。肉親を殺した後で、子供に向かって「ごめんね」と言うみたいな、そんな誠実に見せかけた挑発を。

　紙透さんは、もう何も言わなかった。もう何もしなかった。ただじっと、蔑白さんを見つめていた。自分の親友が、こんな虚言を信じるはずがない。そんな祈りを込めていたのだろう。

「そっか、よかった」

　その声は、確かに蔑白さんのものだった。今度は僕が「は？」と、情けない声を漏らす番だった。

「名執君にだけ教えてあげる。私もね、夏架の事が大嫌いだった」

　蔑白さんは、笑っていた。自分より弱い小動物を愛でる時の、純粋無垢な笑顔を浮かべていた。

「自分のせいで生まれる不幸には目を瞑って、自分が創り上げた幸福だけを全人類なんて過大評価して、それで都合の良い笑顔を都合の良い場所だけに振り撒く。そんな紙透夏架が、死んで欲しいくらいに嫌いだった」

　ちらりと、彼女の顔を見る。おそらく紙透さんは、絶望していた。本当の絶望とはこういう事を言うのだろう。そうとしか表せないような顔をしていた。あるいは、悲しんでいた。涙を零していないのが不思議なくらいに、ただ悲しんでいた。誰がどれだけ惨たらしい殺され方をしても、多分僕にはこういう表情はできない。

「……だから、殺したの？」

「そう。背中を押してやった」

　蔑白さんが「チクる？」と訊いてきたので、「しないよ」と言った。本心だった。

「夏架を殺せば、名執君が私を見てくれるかなって思ったから」

　また突然に、蔑白さんが言った。その時僕がどんな表情をしていたかは分からない。でも、蔑白さんは僕の顔を見て「あ」と気付いたように言った。

「言ってなかった。私、名執君の事が好きなの。ずっとずっと前から好きだった」

　蔑白さんの頬は少し紅潮していて、何かの訓練を受けていない限りこうはならないだろうと思った。つまり、恐らくは本心なのだろうと。

「……じゃあ、僕を苛めから助ける為に、わざわざ紙透さんを殺したって事？」

　僕が訊ねると、蔑白さんは屈託のない笑顔で頷いた。人から好かれる所以の、愛らしい笑顔を浮かべていた。僕はどうしてか、目の前にいる蔑白夕未が突然に気持ち悪く思えていた。

「恋愛下手だから話しかけるタイミングとか分からなかったの。けど、夏架がどうしてか名執君を苛めて、ここだって思った。夏架を殺せば名執君を救えるし、名執君は私を見てくれる。一石二鳥でしょ？」

　一番の親友だったはずの人間から「嫌いだった」と言われ、おまけに「殺したのは自分だ」と追い打ちされる。紙透さんの気持ちはどうだろう。心底不幸だろう。皮肉にも、どれもこれも紙透さん自身が望んだ事だ。

「断りにくい状況作っちゃってごめんね。でも、こうするしかなかったから」

　そう言って蔑白さんは、僕の手を握った。そこから伝わる体温、彼女の浮かべる笑顔。全てが本物だった。

「どうかな。夏架のいなくなった世界で、一緒にならない？」

　目の前には幸せそうな蔑白さん、隣には誰よりも不幸な紙透さん。僕の為に蔑白さんは、紙透さんを殺した。五感から入ってくる情報が過多する中で、僕の第六感だけは、何よりも強く、こう叫んでいた。

　——違う。この手じゃない。

　僕は蔑白さんの手を振り解いて、立ち上がる。呆気に取られる彼女に、僕は一つだけ言い残した。

「ごめん。僕のタイプは、僕なんかを好きにならないような子なんだ」

「とりあえず、一つだけ」

　誰もいない廊下で、紙透さんは言った。

　率直に強い人だと感じた。あんな状況に居合わせて、一つだけだなんて。もっと言いたい事も訊きたい事も山ほどあるだろうに。実際、今の僕がそうなのに。

　あるいは、ただ知りたい事以外のものから目を背けているだけなのかもしれない。両極端に位置するそのどちらかだ。

「どうして、あんな嘘をついたんですか」

　僕の後ろで彼女が訊ねる。どんな表情をしていたのか、僕には分からない。知りたいとも思わない。

「君が言った事だろ。不幸にして欲しいって。君の大切な人が不幸になれば、君は不幸だ。結果として僕が思うよりも酷い事になったみたいだけど」

「貴方はそれで」

「文句は言わせない、とも僕は言った。それ以外に何かあるなら話を聞く」

　紙透さんの言葉を遮り、僕は言った。紙透さんはまたしばらく黙る。

　アクアリウムの床は、夕焼けの橙色を照り返して眩しく輝いていた。その眩しさに目を細めながら歩く。目的地なんかなかった。そんなもの無くても、僕はずっとずっと遠くに行きたかったはずだ。昔からそうだ。

「では、一つ質問、一つ提案をします」

　僕はそこで一度立ち止まり、初めて彼女の方を振り返った。

　彼女はいつも通りに、僕を睨んでいた。彼女がどんな感情を抱いているのか、想像するのは少し難しい。

「名執君は多分、周囲の事に無頓着です。いや、ただ面倒くさがりなだけかもしれない。どちらにせよ、自分に関係のない事は興味の無い人間でしょう」

「分からないけど、そう言われるとそうかもしれない」

「そんな貴方が、どうして嘘をついてまで私の頼みを聞くのですか。いや、そもそも、どうして私の頼みを断らなかったのですか」

　僕はそこで、「君への復讐だ」という返事をするのが最も適切だと分かっていた。状況も動機も理由も、まるで示し合せたかのようにその一つの答えだけを導いていた。でも、僕はそうしなかった。そこで嘘をつく意味は無かったから。

　どういう言い方をしようか。少し考え、やっぱり止めた。どんな言い方をしたって、気持ち悪いものだというのは僕がよく知っている。

「僕がただ唯一、君の好きな部分を挙げるとすれば、多分君の〝手〟だ」

　そう言うと、紙透さんは「手？」と言って自分の手をまじまじと見つめる。

「とある時から、僕は完璧な〝手〟を探すようになった。その持ち主が君だった」

「……手フェチ、みたいな事ですか？」

「全然違うけど、別にそれでいい」

　紙透さんの手は、ピアノの弾き過ぎでボロボロになってる。オーツ麦とやらで文字通りに手入れされた手。率直に言って、僕はそれに惚れ込んでしまった。

「もし君がいなくなれば、もう君の手を拝む事もできなくなる。だから、こうやって君を不幸にしてやろうと躍起になってる」

　気持ちの悪い執着だと、自分でも思う。それでもあの日以来、僕はそれだけを求めて生きてきた。十年以上の時間を空けて、ようやく僕は見つけたのだ。今更それをみすみす逃すなんて、そんなの惜しい。

「これが君の頼みを断らなかった理由。それで、提案っていうのは？」

　彼女は僕を気持ちの悪いものを見る目で見つめながら、「まあ都合がいいです」と呟いた。

「例え私の為だとしても、勝手にされては困る事もあるわけですよ。さっき蔑白さんに嘘をついたみたいに」

　悪い事をした、なんて微塵も思わなかった。彼女自身が望んだ事であり、同時に、僕の為でもあったから。

「私と一つ、約束をして欲しいんです」

「どんな？」

　僕が訊ねると、彼女は一つ息をついて、僕の前に両の手を差し出す。そして、こう言った。

「『私の両手を捧げます』」

　彼女の表情は微笑みとも真顔とも違う、どこまでも穏やかな表情をしていた。何か暖かいものに触れるような、大切な思い出に触れるような、そんな表情だった。

「これは幼い頃、私がよく使っていた誓約の文言です」

「……どういう意味？」

「何かを心の底からお願いしたい時、これを使うんです。言われた側の人間は、自分に捧げられたものを考慮して、そのお願いを受け取るかどうかを決めなければいけない」

「……どういう意味？」

　同じ言葉を同じイントネーションで訊ねる。紙透さんは「つまり」と説明を続けた。

「例えば、『世界を救ってください』『私の髪の毛一本を捧げます』ってお願いされても、どう考えても割に合いません。その時は、お願いを断れる。でも、『世界を救ってください』『私の全てを捧げます』とお願いされて、それが見合う価値ありと判断したら、貴方は世界を救わなきゃいけない、って事です」

「世界を救うのに捧げられて割に合うのは、一生分の裕福くらいだと思うんだけど」

「大切な恋人の命を捧げられたら、世界を救わなきゃいけないって考える人だってきっといます」

　意外とロマンチックな事を言うんだな、と言おうとして、やっぱりやめた。

「ちなみに、さっき僕が嘘をつくって知ってたら、君は何を捧げて止めようと思ってた？」

「親指くらいなら捧げてたかもしれませんね」

「ちんけだな」

「この天才ピアニスト紙透夏架の親指ですよ。貴方の存在なんかよりよっぽど価値があると思いますけど」

　本人には言わないけど、もし「親指を捧げる」と言われていたら、僕は彼女の言う事を聞き入れる他なかっただろうと思う。そのくらい、僕の中で彼女の手は絶対的だった。

　彼女自身、音楽室から出るのはその日が初めてだったらしい。もののついでと言って、自分の事故現場に向かうと言った。もしかすると、ぐちゃぐちゃの死体から自分を見つけてくれた第一発見者がいるかもしれない、と。

駅までの道中は肩を並べて歩いた。理由を聞くと、やっぱりと言うべきか「嫌いな人間と歩く事は不幸以外の何物でもないでしょう」と、本当に嫌そうに言った。現に今も、苛立ちを隠さずに歩いている。幽霊じゃなかったらヤバい奴だと思われそうだ。

理由は分からないけど、彼女の姿を認知できるのは僕だけらしい。だから、すれ違う人々は僕の事をすっと避けても、その隣にいる紙透さんを避けようとはしなかった。彼女は一瞬ぶつかりそうになると目を瞑るのだが、人はその体をすり抜けていく。それの繰り返しだった。

　しかし駅の構内に入ると、人気は一気に少なくなる。音楽室や蔑白さんの元へ行ったせいで生徒の帰宅時間帯とも少しズレたから尚更だ。学生が数人歩いているだけだった。

　だから、僕のよく見知った顔である彼の姿はすぐ目に飛び込んできた。静かな駅の自販機で、天然水を買っているところだった。

「……さっきの誓約ってさ、僕以外に誰かとやってたりする？」

　ペットボトルの蓋を開けて口を付ける真囚君を遠目に、隣にいた紙透さんに訊ねる。彼女は少し怪訝そうな表情をしながらもそれに答えてくれた。

「夢来ちゃん、憐君の妹となら。ピアノの練習をしながら、そういう話はしたかもしれません」

「へえ。練習ってどんな？」

「一緒にピアノを弾くだけですけど」

「仲が良いんだね」

「何が言いたいんですか」

「別に」

　それだけ確認すると、僕は真囚君の元まで近付いた。五メートルほどの距離になった時、彼は僕の存在に気が付き、こちらを見た。目が合っても、彼は特に反応を示さなかった。

「紙透さんは、君の事が嫌いだって言ってた」

　隣で紙透さんが「また」と怒ったように言う。構わず、僕は話を続ける。

「自分の信じたいものだけを見つめて、それを勝手に何かの象徴みたいに崇め奉って、それ以外の自分に不必要なものは世界の裏側に隠す。脳内にお花畑を耕す事を生甲斐にしてるみたいな、真囚憐が嫌い。心底吐き気がする。そう言ってた」

　彼は紙透さんのピアノの音色に惚れたと同時に、紙透夏架という偶像を信じ続けた人間だ。言葉では表せない、何かがある。自分にとっての神様みたいな彼女に否定された時、彼はどんな反応をするだろう。

「……お前、ボロボロの教科書教室のゴミ箱に捨てただろ。やめろよ。俺が先生に目ェ付けられるだろうが」

　それだけ言うと、彼はそのまま立ち去ろうと僕に背を向けた。僕はそれに拍子抜けする。そもそも、その教科書は真囚君にボロボロにされたやつだ。

「残念でしたね。憐君には効かなかったみたいです」

　隣で紙透さんが言った。その表情は、どこか安堵しているようにも見える。

　意外と言えば意外だし、同時に、どこかでそうなる気もしていた。逆上して僕に殴りかかるか、全部全部どうでもよくて無視するか、そのどちらかだろうと。

「真囚君」

　だから、僕は彼にこう言ったのだ。彼が最も嫌がるであろう言葉を、彼が最も嫌がる表情で。

「僕の話を聞いて欲しいんだ。『僕の髪の毛を捧げる』」

　その瞬間だった。彼は数メートル先から、手に握っていた水入りのペットボトルを僕の顔に投げつけた。そして、僕がそれに目を瞑った一瞬でこちらまで詰め寄り、僕の顔を思いきり殴る。一瞬の出来事で、僕は自分が殴られた事にもしばらく気が付けなかった。

「何で知ってんだよ」

　僕の胸ぐらを強く掴んだ真囚君が訊ねる。どうしようもない怒りの感情だけがひしひしと伝わってきた。

「まさか、君の妹しか知らない、なんて思ってた？　思い上がりだよそんなの。自分にとっては何より大事なものでも、他の人間からすればどうだっていいんだ」

　本当に、心の底からそう思った。僕が何をどれだけ大切に、丁重に心の中に閉まっていても、人はそれを平気でこじ開けようとするのだから。それが人間だと、僕は身を持って知っているから。

　こんな時に限って、駅に人が入ってきた。名前は覚えてないけど、顔は見た事ある気がする。同じ学年の女子達だ。彼女達は僕と真囚君をちらりと見て、「またやってる」「可哀想」「ドンマイ」などと勝手な事を吐き捨てて去っていった。

「紙透さんが大切にしてるものなんて何もないよ。少なくとも、君が知ってるものは何も。この誓約の文言だって、彼女にとってはどうでもいいんだから」

「黙れよ」

「だから僕が知ってるんだよ。彼女が何よりも憎んでるはずの、この僕が」

　そう言うと、真囚君はもう一度僕の顔を殴る。突き飛ばされた勢いで、僕はその場にへたり込んだ。そう言えば顔を殴られるのは今日が初めてだと、どうでもいい事を思った。

　また立ち去ろうとして背を向けた彼に、僕は「訊きたい事がある」と言葉を投げた。

「紙透さんが死んだ時、死体を判別して警察に報告したのは君なの？　第一発見者は、君なの？」

　真囚君は向こうを向いたまま立ち止まり、「だったら何だよ」と小さく言った。

　隣の紙透さんを見る。彼女はほんの少し目を見開きながら、驚いたような表情のまま、そこに立っていた。

「紙透さんが『私を見つけてくれてありがとう』、だってさ」

　そう言うと、真囚君は鞄の中から何かを取りだす。その正体を認識した瞬間、僕はとっさに両腕で顔を守った。その直後、右腕に鈍い痛みが走る。

「……なんでお前じゃないんだよ」

　そう言って、彼は今度こそ立ち去って行った。どうして死んだのがお前じゃないんだ。そういう意味だろう。僕の口から小さく、「僕もそう思うよ」と言葉が零れた。

　傍で見ていた紙透さんは、僕の事なんか心底どうでもよさそうだった。その視線は、真囚君の背中に注がれている。優しさのある、慈愛を含んだ眼だった。あるいは、哀れんでいるような眼だ。

「……何を思ってるの？」

　立ち上がりながら、紙透さんに訊ねる。彼女は「申し訳ないです」と言った。

「まさか、憐君がここまで苦しんでいるとは思っていませんでした」

「ああ、そうだね。全部君のせいだ。君が幸福にしたいと言ったピアノのせいで、彼は不幸になってる」

　彼女は、「そうかもしれません」と小さく言葉を漏らす。

「できる事なら、私の事なんか忘れて欲しいと思います」

　彼女はそう言って、「本当に、ごめんなさい」と呟いた。

　僕の足元には、彼が投げたハンマーが転がっている。

「憐君に嘘をついたのも、夕未さんに嘘をついたのと同じ理由ですか？」

　誰もいない駅のホームで、僕は電車を待っている。僕の隣で紙透さんは訊ねた。

「もう一つある。真囚君は僕の話を聞こうとはしない。だからああやって怒らせてでも、意識を僕に向けた方がいいんじゃないかと思った」

　実際、効果はあった。真囚君は面白いくらいに挑発に乗ってきた。言いたい事も言えたし、聞きたかった事も聞けた。彼が、真囚憐が、紙透夏架の第一発見者らしい。

　僕の言葉に、紙透さんは眉をひそめた。何か納得いかないというか、釈然としないような、そんな表情だ。

「なんだよ。君の望みは叶っただろ。言いたい事があるなら言えよ」

「……ずっと気になってたんです。貴方の言動全部」

　そこに置かれた自分への献花を見つめながら、彼女は言った。僕は自販機で買ったサイダーで、痛む右腕を冷やしている。

「私が『貴方が不幸になればなるだけ私は嬉しい』と言った後、貴方は『僕もそう思う』と言いました。覚えてますか？」

「どうだったかな」

　本当に覚えていなかった。いつの話だろう。幽霊になった紙透さんと初めて会ったあの日だろうか。

「余計な嘘で憐君を怒らせたり、何より、『僕もそう思うよ』というさっきの言葉」

「イライラする。要約しろよ」

　献花の傍にしゃがんで、形だけの合掌をする。いや、この場合は紙透さん本人に手を合わせるのが正解なのだろうか。彼女は「要するに」と口を開いた。

「私からすると、名執君は自分から不幸になりたがってるように見えるんです。私が苛めを主導していた時もそうでした。貴方は一度だって、不幸の渦中にいるような顔をしなかった。どうしてですか」

　風が吹いた。強い夏風だった。

　僕はそれに目を細めた。でも、隣の彼女はそうしなかった。それどころか、彼女の髪は少しだってなびいたりしなかった。全て、通り抜けてしまうから。

「君が不幸になりたいのは、成仏しない為。それは分かる。じゃあもし人間だったら、どうする？」

　僕が訊ねると、彼女は少し首を傾げて「当たり前のものを求めるでしょうね」と言った。

「当たり前に幸福を求めながら、当たり前に生きます。事実、こうやって死んで幽霊なんかになる前はそうしていました」

　紙透さんはやけに「当たり前」という言葉を強調した。それが普通だと、人間とはそういう生き物なのだと言いたかったのだろう。

「多分僕は、幸せになりたくないんだと思う。不幸になりたがってるのかもしれない」

　そう言うと、彼女は「はあ？」と少し苛立ったように言った。幸福を求めるはずの人間が、不幸を求めていると言う。本能とか倫理とか尊厳とか、そういうものに背こうとする生き物が目の前にいるのだ。そんな反応をするのは当然だろう。

「幸福っていうのは素晴らしいものだと思う。でもだからこそ、それを手にしてしまうと、もうそれ以上はないんだよ。幸福っていうのはきっと、そこまでの道のりを指すのであって、手に入れた瞬間、それはもう幸福なんかじゃない」

　ペットボトルの蓋を開け、そっと一口飲む。炭酸が喉を降りていく。美味しいと思う。だから、そこで終わりだ。たった今僕が手にしたはずの幸福は、この瞬間に終わってしまった。

「土日の連休が好き。でも、土日になるのは嫌い。夏が好き。でも、夏になるのは好きじゃない。だったら一生、幸福はいらない。幸福はきっと、ぼうっと見上げているくらいが丁度いい」

　献花から一枚の花弁が舞って、風に流されて線路の奥に消えて行った。ハート型の、小さな紫色の花弁だった。種類も花言葉も分からなかった。

「不幸になりたい事の説明になっていません。それはただ、幸福になりたくない事の言い訳を並べただけです」

「単純な事だよ。だって、幸福になるのって面倒くさいじゃん。自分が欲しいものを手に入れる為に、汗水垂らして努力して、それで存外綺麗じゃなかったらどうする？　今までの全部が無駄だ」

　そう言うと、紙透さんが眉間に皺を寄せたのが分かった。怒っている。自分の生き様を否定されたからだ。自分が信じていたものを、侮辱されたからだ。

「私は本気で、全人類を幸福にしようとしていました。人を幸福にする事こそが、私にとっての幸福でした。その為だけにピアノを弾き続けてきた私を、貴方はどんな目で見てたんですか」

「その崇高な夢そのものは否定しないよ。だけど、ただ生き辛そうだなとは思った。夢が叶うと信じて疑わない、そんなに必死こいて何も手に入れられなかったらどうするんだろう。そう思った。事実、君は死んでこれまでの努力は全部パーになったわけだしね」

　ざらついたアナウンスが鳴った。僕が乗る電車が来る事を告げている。

「僕は、全人類不幸になればいいと思ってる。幸福を求めようとするからいけないんだ。運良く小さな幸福を手に入れられればラッキー、くらいに考えれば何も失わずに済む。道端でお金を拾うみたいに」

「好きな人の為に誰かを殺す事、好きな人の為に誰かを殴る事。貴方は、幸福の為に手を伸ばす全ての人を否定するわけですか。そうやって都合よく、自分だけ関係ないって顔して幸福から逃げ続けるわけですか」

　電車が轟音を鳴らしながら近づく中、「ただ臆病なだけじゃないですか」と、紙透さんが苛立ったように言ったのが聞こえた。

「だから、君と僕は真逆なんだ。幸福になりたいのに不幸になるしかない君と、幸福になんかなりたくない僕。道理で君が僕を嫌うわけだよ」

「……ええ、そうですね。私は、名執崇音という人間が、この世界の何よりも嫌いです」

　電車に乗り込み、ホームとは逆の方向を向いたままつり革を掴む。彼女がどんな表情をしていたのか。僕は知らないままだ。

　何故か異様に疲れた気がして、その日は帰ってすぐに布団に入った。一人暮らしはこういうところがいい。自分の匙加減で堕落できる。

　僕は時たま、同じ夢を見る。昔の出来事だ。それを、断片的に夢見る夜がある。

　夢の中で、僕は扉の前に立っていた。横開きのドアだ。僕の視線は扉の取っ手と同じくらいの低い位置にある。そのくらい幼い頃の出来事だった。

　僕は、この扉を。開けなければならない。理由は分からないけど、脳内で僕の声がこだましていた。本能にも近しい何かが、僕を掻き立てていた。

　扉を開ける。部屋の中心には、僕と同い年の女の子がいた。その子はこちらを振り向くと、僕に向かって「たーくん」と言った。そんな彼女に、僕は「ゆーちゃん」と声をかけた。

「『可哀想』になるのは、難しい。私もたーくんみたいになりたいのに」

　年相応の不満げな顔をして、彼女は言った。僕はその子の傍に寄って「ならなくていい」と言った。

「可哀想になんかならなくていい。僕みたいになんかならないで欲しい。ゆーちゃんは、そのままでいい」

「でもそうじゃないと、私は生きてる意味が無いよ」

　会話の意味はよく分からなかった。ただ、女の子は僕のような人間になろうとしている。可哀想で惨めな僕みたいに。その切望だけは何となくと伝わってきた。

　難しい顔をしたままの女の子に、僕は「こうしよう」と提案をした。

「僕はこのまま、可哀想な僕のまま、ずっと生き続ける。だから、いつかゆーちゃんに迎えに来て欲しい」

　そう言うとようやく、女の子は少し嬉しそうな顔を見せる。その瞳に浮かび上がった期待に、僕は優しく微笑んだ。

「可哀想なんかじゃない、もっと幸せになった君が、可哀想になった僕を救いに来て」

　そう言って僕は、女の子の手を取った。ボロボロで、とても格好いい手だった。そうだ、この時からだ。僕が、完璧な〝手〟を求めるようになったのは。他には何も無くていい。その完璧な手さえ分かっていれば、この子だと確信できるはずだった。

「じゃあ、約束して欲しい」

　女の子はそう言ってポケットから、音符の形を模したストラップのようなものを取りだす。どうやらそれは二つで一つらしく、二つの四分音符を合わせて初めて記号が完成するようだった。オタマジャクシのような形ではなくて、連桁と呼ばれる上の線で繋がっている形のものだ。

「たーくんにこれを持ってて欲しいの。いつか私がたーくんのいる場所に行く時、目印になるように。これが完成した時、私がたーくんを救い出したって証明になるように」

　女の子は四分音符を半分に別け、片方の音符を手渡す。僕はそれを受け取り、「分かった」と笑った。

　その子は僕の手に四分音符を握らせ、ぎゅっと僕の手を包み込んだ。その時彼女がくれた体温の温もりを、今でも覚えている。木漏れ日のように、穏やかな暖かさだった。

「その日がくるまで、僕は君を待ってる」

　僕がそう言うと、女の子は笑った。

　そうやって、夏そのものみたいに眩しい笑顔で笑った後、彼女は僕に向かってこう言うのだ。

「裏切り者」

　いつも、そこで目が覚める。

　内容に多少の変化はあれど、終わり方はいつもこうだ。女の子が「裏切り者」という言葉を吐き捨てるところで夢は終わる。

　布団から体を起こし、机の上にある学校用の鞄を漁る。一番底にあった、四分音符のストラップを取りだしてみる。あの日以来僕は、一つの音符が完成するその日を待ち続けている。

　時計を見ると早朝四時を示していて、空はまだ薄暗い。朝っぱらから重い溜め息を一つ吐いて、決心した。やっぱり、やるしかない。

＊　　＊　　＊　　＊　　＊

　音楽室に向かうと、紙透さんはいつもピアノを弾いている。もちろん、鍵盤には触れられないから、実際に弾けるわけではない。目を瞑って鍵盤一つ一つの音を思い出しながら、両手を動かし続けている。彼女が想う、究極の一曲を完成させる為に。

　そう言えば、幽霊になった彼女と出会った初日だけは、彼女はピアノに触れていた。あれはどうしてだったのだろうかと、今になってふと気になった。

「この世界でたった一人、憧れたピアニストがいました」

　夏空を透過する彼女が言った。放課後、僕は音楽室を訪れていた。教室の中央にあった椅子の一つに座り、黙って彼女の話を聞いている。

「その人とは、私がかつて通っていたピアノ教室で出会いました」

「どのくらい前の事？」

「覚えていません。記憶も朧げになるくらい、昔の話です。それでも、その人が奏でた旋律だけは、今でも鮮烈に脳裏にこびりついています。昨日の晩御飯を思い出すよりも先に、その音を思い出せる」

「まあ晩御飯なんか食べてないんですけど」と真顔で言った。彼女は朝から晩まで音楽室にいるらしい。他に行く場所が無いのだから仕方ない。ここでピアノを弾く真似事を延々と続けているらしく、お腹が空くという感覚もないのだろう。

「その人のピアノには、全人類を幸福にする力がありました。私もそんな風になりたくて、ずっとピアノを弾いています。その人のように、聴く者の全てを赦すような、そんな音だけを奏でていたかった」

「その人は、今どうしてるの？」

　そう訊ねると、彼女の手が一瞬だけ止まった。

「……分かりません。いつの間にかいなくなってしまったから」

　例えば、僕が夢に見るあの女の子を人生意義にしているみたいに、彼女にとってはきっとその人が「そう」なのだろう。言葉にならないほど、言葉になんかしたくないほど、何もかもの全てであるように自分の一番奥深いところに居座っている。人にはきっと、そういうものがある。

「ただ一つ確信しているのは、その人は間違いなく天才だったという事です。ピアノを弾き続けている限り、どこかでその人の名前を見るはずだと思った。なのに、そうならなかったのは、もう既にピアノを辞めているか、あるいは死んでしまったか。そのいずれかだろうという事です」

　紙透さんはそこで話を一区切りとし、両手を下ろした。そして僕の方を見て「分かった事があります」と真顔で言った。

「幽霊になって名執君と初めて会ったあの日だけ、私はピアノに触れる事ができていました。恐らくですが、その理由が分かりました。昨日の貴方との会話の中で」

「そうやって都合よく、自分だけ関係ないって顔して幸福から逃げ続けるわけですか」

「ただ臆病なだけじゃないですか」。昨日見た、血の通わない冷たい紙透さんの顔が思い出される。

「多分、極限まで不幸のどん底に突き落とされた時です。その瞬間だけ、私は何かに触れる事ができるのだと思います。あの日、私は自分の死を自覚しました。もう夢を叶える事ができないのだと、本当の絶望を知りました」

　そう言って彼女は自分の手を見つめた。あの日の、鍵盤を叩いた指の感覚を思い出すように。

「君は、僕の事が嫌いだと言う」

「はい」

「僕が君の前に現れた瞬間、ピアノに触れられなくなった理由は？」

「『死んでしまった』『夢を叶えられない』という不幸を、『名執崇音が現れた』という不幸で邪魔されたからだと思います。前者の不幸にだけ集中していれば、苦しみながらも、もっとピアノを弾けたのかもしれません」

「無茶苦茶だ」

　苦笑いしながら言った。紙透さんは「事実です」と飄々としている。

　彼女の手を見る。指の腹はボロボロ、ところどころ豆があったり皮が破れているのが分かる。死ぬ直前の状態のままなのだろう。彼女の手はこれからも、これ以上にも以下にもならない。

「……よかったよ。迷いが無くなった」

　僕は立ち上がって、ピアノに近付く。鞄を足元に落とす。

「つまり僕は、やっぱり君を不幸にするしかないんだね。もう再起不能になるくらいの、ただ真っ直ぐで、不純物のない不幸を与えてやるしかない」

　僕の言葉に、彼女は眉をひそめた。僕はこれから、彼女に不幸をもたらす。それこそ、死にたくなってしまうくらいの絶望を。しかし皮肉にも、彼女が死ぬ事はもうない。

　僕はそっとピアノに触れてみた。窓際に置かれている大きなピアノは、少し日に焼けている。年季が入っているのだろう。

「このピアノは、いいピアノなの？」

「……分かりませんが、愛着というフィルターを通してしまうとなんでも輝かしく見えるものです」

「愛着あるんだ？」

「死ぬ前はもちろん、死んでからも、私はずっとここにいましたから。私の意思も、ここで育まれた思い出も、全てが詰まっています」

　人の平穏な学校生活を脅かしといて、よくそんな事を簡単に言える。そう思った。

　二年か、と、率直に思った。あの夏に転校してきて二年、紙透さんはずっとこの場所にいた。教室にいる時間と同じくらい、ここでピアノを弾いていた。不器用ながらも大切に思ってきた友人達と同じくらい、ここでの時間を大切にし過ぎていた。

　なんだか、酷く蒸し暑かった。窓から見える青天井が、白い日差しが、ただひたすらに暑苦しかった。

　紙透さんを不憫に思う。とんでもない不幸を与えて、もうこの世から消え去ってしまいたくなっても、そうできないのだから。不幸を与えればそうするだけ、成仏というものが遠ざかってしまうのだから。

「あの、何をするつもりですか」

「君は僕を苦しめて、あまつさえ、不幸に見えなかったとまで言う。本当にそう思うの？」

　鞄に手を入れて、僕は「それ」を取り出す。その瞬間、紙透さんは僕のしようとしている事を理解した。理解してしまった。

「……名執君」

「そんなわけないだろ。殺したいほど憎いに決まってるだろ。蔑白さんが君を殺さなきゃ、僕が殺してた。僕が考え得る限りの、君にとって一番残酷な方法で」

「まさかと思いますけど、それ」

「でも残念な事に、もう君は死んでる。だから僕ができる最大の復讐は、君の目の前で地獄を見せる事くらいなんだよ」

「お願い」

「僕が君の手に執着するように、君にとっての執着は『これ』なんだろうね」

「名執君」

「覚えておいて。これはどこまでも純粋な君への憎悪だ。全人類を幸福にするとか、調子に乗らなければこんな事にはならなかったのにね。僕への嫌悪を自分勝手に振り撒かなきゃ、こんな目に合わずに済んだのにね」

「止めて」

「自分が取った行動を後悔するといい。今更な過去をどうしようもなく悔やむといい。生きていようが死んだ後だろうが、もう時間は巻き戻らないんだから」

　言いたい事は、全部言い切った。

「それ」を両手で強く握りしめ、大きく振りかぶる。彼女にとっての執着をぶっ壊す。明確な破壊意思を持って。

「『私の両手を捧げます』」

　ぴたりと、僕の手が止まった。

糸で釣られているように微動だにしなかった。たったの十三音に、こうも容易く動きを止められる。

「……お願いします。止めてください」

　紙透さんはそう言って、深く頭を下げた。

　暑かった。わけもなく、汗が止まらなかった。

「断る」

　腕を振りかぶった瞬間、聴くに堪えない、痛々しい音が耳を劈いた。

　最初に、何かのパーツらしきものが一つ弾け飛び、紙透さんの身体をすり抜けて地面へと転がっていった。何度かそうしているうち、また別のパーツが転がっていく。それでも構わず、僕はピアノを壊し続ける。

　やがて腕がもう上がらなくなったところで、力任せに殴るのはやめた。まだ外れてない白鍵と黒鍵を一つ外していった。

　そうやってほとんどの鍵盤を外し終えると、今度はそれ以外をまた力任せに殴っていった。ペダル、脚、譜面台、鍵盤蓋、棚板、屋根、突上棒、側板、ピアノ線まで。硬くて壊れない部分でも、最低限の傷は付けてやった。

　どれだけそうしていたか分からない。気付けば青空はいつの間にか赤色に上塗りされていて、制服は汗でぐっしょりと濡れていた。

「大切な口約束すら破られる気持ちはどうだよ。君が望んだ不幸そのものだろ」

　僕は俯いたままそう言った。彼女の顔は見なかった。

　彼女はゆっくりとした足取りで、ボロボロになったピアノに触れようとする。僕はその結末を見届けず、手に握り締めていた「それ」を鞄にしまい、音楽室を跳び出した。

　彼女がピアノに触れようと触れまいと、幸せになんかなれないじゃないか。幸せに希望なんか見出すからだ。最初から全てを諦めていれば、こんな事はしなかったのに。

　ふと気が付いた時、僕はいつの間にか廊下の真ん中に立っていた。向こうから、真囚君が早い足取りでこちらに歩いてくる。彼の表情から察するに、音楽室へ行こうとしているのは分かる。

「返せよ」

　かける言葉を探していた僕に、彼が言った。何の事かすぐに思い当たった僕は、「何でもお見通しなんだね」と言った。

「お前しかいないだろうが。何考えてんだよ」

「何も考えてないんだよ。自分の事しか考えてない」

　僕は自分の鞄からハンマーを取り出し、真囚君に手渡した。受け取った瞬間、彼は少し眉を寄せる。

「何に使った？」

「ピアノを壊した」

「いつ」

「今」

「何の為に」

「紙透さんの為」

　そう言うと彼は、不思議そうな顔をした。てっきり怒るかと思ったが、そうでもなかったらしい。彼からすれば、僕の行動が単純に疑問なのだろう。

「なあ、お前何がしたいんだよ」

「何もしたくない。何もしないで生きていたい。それだけなのに、生きる事そのものが何かを強要される事でもある。面倒だと思う」

「お前が何をしようと俺には関係ない。でも今後、夏架と関わるなら、俺がお前を殺す。あいつの為とか、どの口がほざいてんだよ」

　その言葉を聞いた僕は、とある事を確信した。やっぱり彼は、紙透夏架という偶像に囚われ過ぎている。

「……真囚君は、信頼できる人間だと思うよ」

　本当に、心の底から思う。真囚君はさらに眉をひそめた。

「今になっても僕を苛めてるのは、君だけだね」

　紙透さんが転校して、僕に強い嫌悪をぶつけるまで半月。そして、それから彼女が自殺するまでが二年。その後、僕に継続して嫌がらせをする人間は徐々に減っていった。まるで洗脳から解かれたように、一斉に手を引いた。紙透さんがいなくなった事もそうだし、彼女が自殺をして警察が関与したのも一因だろう。

　ただ、それでも、真囚君だけは違った。彼はずっとそれを続けていた。紙透さんの感情を代弁するように僕を嫌った。紙透さんの為だけに、ずっと、ずっと。

「気付いてるだろ。周囲からすれば、同情するべきは僕じゃない。哀れむのは僕じゃない。君なんだよ、真囚憐」

「可哀想」「またやってるよ」「ドンマイ」。あの学校にいた人間は、口々に勝手な言葉を吐き捨てる。でもそれは、僕に向けられたものじゃない。全ては、真囚君に向けられたものだ。

「自分で分かるだろ。君のそれは、傍から見ても分かるくらいに酷い。まるで操られているみたいに、紙透さんに縛られてるみたいにずっとそうなんだ。『今でも紙透さんの事を忘れられずに可哀想』。残念だけど、それが皆の本音だ」

「何が可哀想だよ。勝手な尺度で人の事推し量ってんじゃねえよ」

　彼は鼻で笑ってそう言った。どんな形であれ、彼の笑顔を見たのは初めてだった。

「俺は、あいつに陶酔してる。盲目だと自覚してる。それの何が悪いんだよ。自分の信じたいものを信じて、それで幸せになる事の何が悪いんだよ」

　ああ、ここにもだ。ここにもいた。幸福の為に、必死にもがき続ける人間が。もういない人間の事ばかりを考えて、手にする事のない彼女の心に手を伸ばしている。

「夏架にどんな意図があってあんな事言ってたのか、俺は知らない。別に知らなくてもいい。ただ、お前に向けてた感情は本物だった。それだけは分かる。夏架がお前を嫌い続けるなら、俺はお前を殴る。死んだあいつができなかった分も、俺が全部」

　ハンマーの先を僕の肩に優しくあてる。脅迫、というよりは、自分自身への誓いのように見えた。これからも自分の身は紙透夏架にあると、そんな言葉だった。

「だから、『夏架を救った』なんて言葉を吐くお前が許せない。あいつを救う役割は、俺だけのもんだ。お前が夏架の敵で、俺が夏架を救うヒーロー。これから先も、ずっと」

　紙透夏架は化け物だ。たった一人の人間をこうも狂わせる。いや、狂っていたのはあの学校の人間全員だ。そのくらい、彼女のピアノはただ美しかった。

　その場を去ろうとする真囚君に、僕は「納得したよ」と声をかけた。

「だから君は、あんな嘘をついたんだな」

　そう言うと、彼はぴたりと足を止めた。こちらを振り向いて「何がだよ」と言った。

「どうして第一発見者は自分だなんて嘘をついたのか、考えてたんだ。君は、紙透さんのヒーローになりたかったんだね。凄いと思うよ」

　それだけは本心だった。誰かを幸福にしたいと願うように、誰かを救いたい、誰かにとってのヒーローになりたい。何よりも強い想いで、最も尊まれるべき思いだ。

　彼は話を聞かずに去ろうとする。だから、僕はまた嘘を重ねる。

「でも、嘘をついてまで誰かを救おうとする事が正しいなんて、僕には思えない。ただ怯えて端っこから見てただけなのに、敵が倒れた瞬間に『あれは俺が倒したんだぞ』って言ってるようなものだから」

　そう言うと、彼は勢いよく僕に近付いてまた胸ぐらを掴んだ。人は本心を言い当てられると、こうやって取り繕ろうとする。

　嘘をついて誰かを救う。結構な事じゃないか。そこまでして救いたい人間がいる事も素晴らしい。そこは理解している。でも、僕が彼に言える事は、そういう事じゃない。

「それとも君には、紙透さんが嘘を付くような人間を好く女の子に見えてたのかな。人類の幸福を望む人間が、誰かに嘘をついてまで別の誰かを幸せにしたいと思う人間に」

「黙れよ」

「それはどう考えたって、紙透さんの望むところじゃない。だって、彼女の夢は『全人類』の幸福だから」

「殺すぞ」

「要するに結局、君の行動はただの我儘でしかないんだよ。好きな女の子に振り向いて欲しくて何でもやっちゃうイタい奴だ。紙透さんの為なんて嘘。僕を殴りたいのだって」

　そこでまた、僕は顔を殴られた。廊下の壁に手を付いて、倒れる事を何とか回避する。

「何で知ってんだよ」

「……何が」

「俺が嘘ついてるって、誰かから聞いたか。本当の第一発見者でも見つけたのか」

　彼がそれを訊ねるだろうという事は分かっていた。分かっていたから当然、僕はそれ用の返答を用意している。

「紙透さんから聞いたんだよ」

　彼の顔が一瞬、歪んだのが見えた。これを言ったら、彼は何を思うだろう。今度こそ殺されるかもしれない。なぜか笑いが込み上げてきそうだった。

「前に紙透さんが『ありがとう』って言ったのを君に代弁して伝えただろ。紙透さんは幽霊なんだ。僕以外には見えないらしいけど。その紙透さん本人から聞いた。君が第一発見者なんかじゃない事」

「分かんねえ」

　僕の話を遮って、彼が叫んだ。真囚君は頭を抱えている。

「お前が殴られてもヘラヘラ笑ってる事、お前が夏架を行動原理にしてる事、お前が嘘をつく事、何より、夏架がお前を嫌いだった事。何も、全部分かんねえ」

「……最後に限っては僕も同じだけど」

　真囚君は壁に寄りかかって、なんとか立っている状況だった。僕なんかよりも支えが必要な人間に見える。僕は「嘘じゃないよ」と嘘を付いた。

「紙透さんが言ってた。君は第一発見者じゃない。君は、紙透さんの全部を背負い過ぎようとしてる」

　頭を抱えながらも、彼はこちらを見た。話の先を促しているような、彼が初めて僕に向けるものの類だった。

「『できる事なら、私の事なんか忘れて欲しい』。紙透さんは確かに、君に向かって言ってた」

「……それこそ、お前が自己保身の為に付いた我儘な嘘だろうが」

「そう思われても仕方ない。でも、本当だよ」

　その人の一生を、何が支配してしまうかなんて誰にも分からない。ピアノだったりするし、過去に一度だけ見たただの手だったりする。真囚君が紙透さんに抱く執着は、間違いなくそれだ。

　そして、そのしがらみから抜け出す事は極めて困難だ。自分からそれを抜いてしまえば、もう自分には何もなくなると知っているから。例えそうだと理解していても、怖くて一歩を踏み出せない。

　でも、真囚君は違う。例え待ち受けるものが空虚だとしても、もう忘れる他にない。だって、紙透夏架本人から許されたのだから。もう、自分なんかに囚われず生きてくれと、彼女本人から言われてしまったのだから。

「我儘に、自分勝手に生きてみろよ。誰かに憑依された自分じゃなくてさ」

　そう言うと、「何様なんだよ」とまた胸ぐらを掴まれた。でも、その力はとても弱々しいものだった。

「俺はお前の言葉を信じない。例えお前に夏架が見えてるとしても、お前が都合よく作り上げたただの幻想だ」

「確かに。そうかもね」

　紙透夏架の亡霊なんていなくて、僕にしか見えていない。それを否定する術はない。

　真囚君は「何でお前なんだよ」と言いながら、僕の制服から手を離した。

「何でお前だけ、そんな都合よく逃げてんだよ。何で、俺じゃないんだよ」

　幻想でも妄想でもいいから、彼女の姿をもう一度見たい。そういう切望が、彼の口調から伝わってくる。

「紙透さんはいつも音楽室にいる。ピアノの傍にいる。もし僕の言葉を信じる気になったら、行ってあげて。それで、もういい加減忘れるからって、君の口から伝えてあげて」

　ようやく、言いたい事が全て言えた。拳一つ分なんて、割に合わない。

　真囚君は何も言わず、僕に背を向けて今度こそ立ち去った。放課後の夕に染められた彼は、この世界の何よりも哀慕に満ちているように見える。

　殴られた頬をさすりながら、目的地まで歩く。真囚君と出くわしたのは偶然だ。今日の目的は、彼女と話をする事だった。

「蔑白さん」

　教室の後方から声をかける。すると彼女はこちらを振り向き、笑って手を振った。いつも通り、日誌を書いていたらしい。

「どうしたの、その顔」

「転んだ」

「憐君か」

　教室に入って、また蔑白さんの隣に腰掛ける。「真囚君の事は好きか嫌いかで言うと？」と訊ねると、「死んだ人間に操られてる奴の事なんか興味ない」と言った。

「一つ、蔑白さんに訊きたい事があってさ」

　僕が訊ねると、蔑白さんはペンを置いて話を聞く態勢を取った。

　正直、別に訊かなくてもいい事だった。さっきの真囚君だってそうだ。僕には関係ない。紙透さんが言うように、僕はそういう人間のはずだ。なのに。

「どうして、紙透さんを殺した、なんて嘘をついたの？」

　こんな、紙透夏架の亡霊を弔うような事。自分が情けなくて嫌になる。

「……証拠はあるの？」

　蔑白さんは何を考えているのか、よく分からない表情で小さく言った。

「君はあの日、僕とは逆の路線に行くって言って僕と別れた。紙透さんが落ちたホームとは違う方向に行くのを、僕は見送ってる」

「そんなの、向こうに行くふりをして戻ってきた、って言い訳ができるよ。万が一私が疑われた時、名執君にアリバイを説明してもらう為って」

　会話をしていて少し気持ち悪くなってきた。蔑白さんは人を殺したと言い、僕は殺していない事を証明しようとしている。ミステリーとは真逆なのだ。

「蔑白さんの言う通り。それだけじゃ、証拠としては不十分過ぎる」

「その言い方は、他にもあるんだね」

「ない」

「は？」

　蔑白さんの顔が珍しく崩れる。こんな表情を見たのは初めてだったかもしれない。紙透さんの前では、こんな顔を見せていたのだろうか。

「僕が蔑白さんは紙透さんを殺してないって思ったのは、それが気になったからだよ。君が違うって言うなら、きっと違うんだろう。君が、紙透さんを殺した」

　そう言うと今度は眉をひそめて、意味が分からないというような表情をした。その気持ちはよく分かる。僕だって、どうしてこんな事をしているのか分かっていない。

「名執君は、それでいいの？」

「いいとか悪いとか、そういう事が必要とは思わない」

「じゃあ私を疑ったのはどうして？」

「だって」

　僕は一瞬、言葉に詰まった。自分でもその理由が不明瞭だったから。

　でも少し考えれば、その理由はすぐに出てくる。最初から用意していた答えみたいに、明確な言葉はある。

「全人類を幸福にしたい紙透さんが、それを可能にするぐらいの強さを持った彼女が、一番傍にいた君を不幸にするとは思えないから」

　内心では、紙透さんを殺してなんかいないんだろうなと確信していた。明確な証拠はない。ただ、紙透夏架という死んだ人間を見て思っただけだ。あれだけ強い人間が、心の底からの友人を不幸にするわけがない。

「……名執君の事は、不幸にしたのに？」

「それはそれだよ。僕の事は嫌ってたらしいし」

「じゃあやっぱり全人類を幸福に、なんて無理な話だったんじゃん。そんな事言いながら、どこにでもいるような男子生徒を好きになる努力すらしない。強くなんてないよ」

　蔑白さんはうんと腕を伸ばしながら、欠伸を噛み殺す。そして「残念だけど」と少し口ごもりながら言った。

「私が夏架を嫌ってたのは本当だよ。世界の何より、あらゆる概念の何よりも、紙透夏架が嫌いだった」

　彼女はきっと、紙透さんを殺してなんかいない。蔑白さん本人が殺したと言うのなら、別にそれでも構わない。解せないのは、どうしてそんな嘘をつくのか、という事だった。

「君がそう言うなら、それでいい。じゃあ例え話をしよう」

　それを訊ねる為に、僕はそんな言い方をした。真実を聴きたいだけなのに、どうしてこんなにも遠回りをしなければいけないのか。僕は少し苛立っていた。

「例えば、君は紙透さんを殺していないと仮定しよう。それで、『紙透さんを殺したのは私だ』と嘘をついていたとする。その場合、君はどうしてそんな嘘をついたんだろう？」

　蔑白さんは余裕ぶったような表情で、どこか涼しそうに微笑んでいた。わざとらしく、「そうだなあ」と考える素振りを見せる。

「あくまで想像だけど、名執君が恨んでいるであろう夏架を殺したって言えば、名執君が私を見てくれると思ったから、かな」

　ついさっき、似たような話を聞いたような気がした。

　同じだ。真囚君が紙透さんにとってのヒーローになりたくて嘘をついたように、蔑白さんもまた、僕の気を引く為に嘘をつく。誰も彼もが、誰かの為に嘘を吐き続けている。

「丁度よかったんだと思うよ。どうしてか分からないけど夏架が死んで、なら私が殺した事にすれば名執君が喜ぶからって。偶然の産物を利用させてもらっただけ」

「例え話だけどね」と、あくまで自分が殺したというスタンスは崩したくないらしい。

「どうしてそんな事を？」

「理由は言ったでしょ」

　この前の会話を思い出す。僕を苛めから救い出す為、紙透さんを殺したのだと。確かに彼女の口から聞かされた。

　そこでふと、僕は思った事があって、それを訊ねてみる事にした。

「蔑白さんは『ずっと前から好きだった』って言ったよね。それって、いつ？」

　考えてみればおかしかった。僕らは会話どころか、挨拶すらまともにした事が無い。僕はずっと独りでいて、彼女は多くの友人に囲まれてきた。僕らが関わり合う余地なんてどこにもないはずだ。

「『ずっと』って事は、このクラスになってから？　それとも、高校に入学した時？」

　そう訊ねると、彼女は目を細めて、自嘲するかのように笑った。まるで、人生の全てを諦めたかのような笑みだった。いつも柔和な笑顔を浮かべる蔑白さんからは想像もできない表情で、僕は美しいと少しだけ思った。

「『ずっと』、じゃないよ。『ずっとずっと前から』って言ったでしょ。名執君が想像するよりもずっと昔」

　意味が分らなくて、僕は眉をひそめる。その表情を見て、蔑白さんは小さく笑いながら「その前に訊きたいんだけど」と言った。

「その人にとっては何でもないような一瞬が、別の人にとっては一生を支配するような出来事になるって信じられる？」

　質問の意味は分かっても意図が分からない。意図を訊ねたかったのだが、蔑白さんは「早く答えろ」というような冷たい目で僕を睨んでいる。仕方なく僕は、その質問にこう答えた。

「信じるよ。あると思う」

　心から、思う。あの夢の中の出来事を思い出す。あの一瞬が、今も僕をこんな風にさせている。こんなにも僕を呪って離れてくれない。

「何でもないような事が、自分にとって一生の執着になる事ってあるからね。傍から見れば、気持ち悪いくらいの執着に」

　そう言うと蔑白さんは「それならよかった」と言って、それから、ゆっくりと口を開いてこう言った。バラード曲のように、ゆっくりとした速度で。

「名執君さ、ピアノやってたでしょ」

　感情の起伏が少ないと自覚している僕だけど、その時ばかりは驚いてしまった。僕がどんな顔になっていたかは分からないけど、蔑白さんはさっきよりも大きな声で笑った。

「あれって何年くらい前？　十年とか？」

「……なんで、知ってるの？」

　ゆっくりと訊ねると蔑白さんは、「相当昔だし、もうほとんど覚えてないんだけどね」と言いながらも話してくれた。

「でも、名執君の弾いてたピアノの音だけははっきりと覚えてる。逆にそれ以外は覚えてないくらい。名執君が弾くピアノは、私の一生を呪うに充分だった。その時からだよ。私が名執崇音って存在を意識してるのは」

「ずっとずっと前」という言葉の意味が分かった。どこで出会ったかは分からないけど、蔑白さんは僕のピアノを聴いた事がある。

　自然と視線が、蔑白さんの手に寄る。蔑白さんの手には傷なんかなくて、ガラス細工を扱うみたいに、とても綺麗だった。

「どうして、そんな嘘をつくの？」

「嘘じゃないよ」

　蔑白さんはケラケラ笑う。それに、なぜか言い様もない嫌悪を感じていた。肌で感じていたのは、蔑白夕未への苛立ちだった。

「僕がピアノを弾いてたのは本当だよ。だけど僕の為に紙透さんを殺したとか、僕のピアノを聴いて好きになったとか、どうしてそんな嘘をつく必要があるんだよ」

「……どうして嘘をついてると思うの？」

　どうしてって、そんなの、普通に考えれば分かるだろ。

「逆に、どう生きていけば僕を好きになるような人間になるんだよ。僕を好きになるような奴がいたとして、どうかしてるとしか言えない」

　ピアノが弾けたからとか、たかがそんな事で人を好きになるなら、この世の中はもっとシンプルで生きやすいはずだ。それならまだ、理由なんてないのに殺したいくらい嫌われる方が納得する。

「そんな事、あっていいはずがない」

「嘘じゃないよ」

　蔑白さんは、僕の言葉をほぼ遮るように勢いよく言った。低い声で、小さな声で、だけど、決して聞き逃せないような声で。

「君がそういう生き方をしてるのは知ってる。でも、だからって私の幸福まで否定しないで。名執君と一緒に不幸になれるなら、それは私にとっての幸福だよ」

　そう言って彼女は、僕の手を優しく握った。その体温は木漏れ日のように、穏やかな暖かさだった。

「もう一回だけ言うから、ちゃんと見て。ちゃんと聞いて」

　頭の中で、あの夢がリフレインしている。「たーくん」と、僕の名を呼ぶ声が大きく響いている。

「私は、名執君が好きだよ」

　その表情が、視線が、全てが。彼女は嘘をついてなどいないという事を示している。だけど僕は、信じない。信じたくない。

　彼女の目から、視線を逸らす。

　机の上にあった、蔑白さんの筆箱が目に入る。

　筆箱には、よく見知った四分音符のストラップが付けられている。

　彼女の名は、蔑白夕未だ。

＊　　＊　　＊　　＊　　＊

　それから一週間、僕は学校に行かなかった。というより、行けなかった。ピアノを壊した事で、停学にさせられていた。

　その一週間は多分、僕の人生で最も穏やかな百六十八時間だったと思う。学生が学校という施設から距離を置けば、自然とそうなる。一人暮らしをしているなら尚更だ。

　一度だけ近くのスーパーに外出した際、真囚君を見かけた。彼は、中学生か高校生くらいの女の子を連れて歩いていた。さすがに彼女という事はないと思うから、多分紙透さんがピアノを教えていたらしい妹だと思う。

　真囚君は僕に気が付かなかったが、その子は僕と目が合った。見かけの年齢に合わず、あまりに大人びた冷たい目をしていて、この世のありとあらゆる悲しみを味わって生きてきたかのような雰囲気があった。

　停学中に起きた事と言えばそのくらいだ。それ以外はずっと家に引き籠っていた。あと、強いて言えば二回くらい例の夢を見た。いつも通りの内容だ。女の子が僕に渡してくれた片方の四分音符は、間違いなく僕の手元にあるものと同じで、蔑白さんが持っていた四分音符は、恐らくそれと合致するものだった。

　四分音符のストラップと「夕未」という名前を持つ彼女が、夢に出てくる女の子かどうかは分からない。でも今は、そんな事どうでもいいような気がしている。僕にとって大切なのは、いつかこの場所から僕を掬い取ってくれるあの手の持ち主だけだから。それが誰であろうと、僕はその日を待つ他ないのだろう。

　停学明けの初日、僕は教室には向かわず、朝から音楽室へと向かった。どうしても、確かめたい事があったから。

　彼女はこちらに背を向け、窓から見える景色を眺めていた。今日も今日とて空は、夏を象徴するかのような青を塗り広げている。

「そのピアノ、新品？」

　僕が訊ねると、彼女はその場から動かずに「そうです」と肯定した。

「貴方が壊した思い出は全てなくなって、代わりにどうでもいいピアノが一昨日運ばれてきました」

「思い出は作り直せばいい」

「死んだ人間への皮肉ですか」

　彼女はゆっくりとこちらを振り向き、僕の顔を見る。いつものような仏頂面を崩さぬまま、僕にこう言った。

「嘘つき」

　確かに、その通りだ。僕も真囚君も蔑白さんも、紙透さんさえも。誰も彼もが嘘をついている。誰一人、まともじゃない。だから僕は、彼女に向かってこう言ってやったのだ。

「お互い様だろ」

　僕が一人暮らしをしているのは、親からの虐待がきっかけだった。両親と親類縁者の話し合いの結果、いつの間にかそう決まっていた。そこに僕の意思は存在しなかったけど、まあ妥当な結果だろうと思う。

　家族という存在が世界の全てであった頃、家に僕の居場所はなかった。だから、唯一許されていたピアノ教室に逃げていた。そこが僕の世界であると思い込むようにしていた。

　あの女の子と出会ったのも、手を握られたのもその場所だ。四分音符を分け合い、いつか迎えにくるからという言葉を信じたかった。

「貴方にとって救いとはなんですか？　その子にどうして欲しいのですか？」

　紙透さんが相変わらずピアノの傍から離れないまま、僕に訊ねる。音楽室中央にある椅子に腰掛けながら、僕は「分からない」と言った。

「でも、その子がくれる幸福なら、きっと生半可なものじゃないんだと思う。今まで僕に訪れた不幸を全部ひっくり返すような、生きてきてよかったって人生を肯定できるような瞬間であって欲しい」

「無理ですね」

「どうして？」

「一切の妥協なく『生きてきてよかった』と思える瞬間なんて、人間にはおおよそ手に入れられないものですよ」

　そうかもしれない。どんな幸福を手に入れたところで、人間なんて行き着く先はみんな同じだ。いつか手放さないといけなくなる。そんな妥協のない幸福を手に入れれば、後はそれが消えていく喪失感を味合わされるだけだ。

「それを分かっていても、君は求めてる。死んで尚、自分の夢を叶えようとしてる」

「そうです。だから人間というのはどうしようもなく救いのない人間です。いつかは死ぬくせに生きたいなんて、おかしいと思いませんか」

「極端だね」

　僕が少し笑うと、音楽室に夏風が吹き込んだ。僕の髪の毛が少し揺れて、紙透さんは風に目を細める。たかが風なんか、全て通り抜けてしまうというのに。

「答え合わせをしよう」

　最初は、その言葉を皮切りにした。彼女は何も言わず、ただそこに立っていた。

「どうして嘘をついたの？」

　そう訊ねてみると、彼女は「何の事でしょう」と感情を出さずに言った。

「君が説明しないなら、僕もしないよ」

「私が言いたいのは、どの嘘の事でしょう、という意味です」

「……一つじゃないの？」

「どうでしょうね」

　煮え切らない言葉の羅列に、僕は溜め息を吐く。

「どうして、死んだ時の事を覚えてない、なんて嘘をついたのかを聞きたかった」

　僕が言うと、彼女は「ああ、その事ですか」とわざとらしく言った。

「嘘だと思った理由は？」

「ただの直感。強いて言えば、蔑白さんの名前を出した時やけに否定したなと思って」

「夏架を殺したのは、私だよ」。それを紙透さんに伝えた時、彼女は「夕未さんは、私を殺したりなんてしない」と言った。紙透さんがあんなにも必死になった理由が分からなかった。

「そりゃあ、友人にそんな事をされたなんて、普通は信じたくないものでしょう」

「だから直感だよ。それに君は、何でもかんでも自分の主観で否定する人間じゃないだろうから」

「気持ち悪いですね」

「何が」

「まるで私と仲が良いみたいに、私の事を推し量っているのが」

　彼女はそう言って、一つ息をついた。口に出す言葉を決め、決心したように。

「名執君の言う通りです。私は何も忘れてなんかいません。だから、夕未さんが殺したと言った時、否定したんです。彼女が私を殺していない事なんか、死んだ私が一番知っていますから」

「じゃあどうして死んだの」

　そう訊ねると、彼女は鼻で笑った。「貴方も知っているでしょう」と、僕を嘲笑う。

「自殺ですよ。警察はそう発表したのでしょう？」

　僕はそれに、ほんの少しだけ驚く。「なんで」と、少し大きな声で訊ねた。

「理由は、……言いたくありません。生きるのに理由は求められないのに、死ぬ事には理由が必要なんて変な話だと思いませんか」

「違う。どうしてそんな嘘をついたのかって訊いてる」

　今度は紙透さんが驚く番だった。まるで拍子抜けしたように、目をほんの少し見開く。彼女が自殺した理由なんて、どうでもいい事だ。

「大した理由があったわけではありませんが、一つ挙げるとすれば、名執君を困らせたかったから、でしょうか」

「……困らせる？」

「だって、本当は覚えている記憶を『覚えてないから』と言えば、貴方は困るでしょう」

「まるで僕が君に協力すると分かってたみたいな言い方だ」

「その通りです。こればかりは賭けでした」

　賭けなんて、自分には賭けるものが無いくせによく言う。命すらない奴に、もう失うものなんて無いのに。

「だからこそよく分からないんです。私の手が好きだから私を成仏させないとか、意味が分からない」

「分からないも何もそのままの意味だけどね。僕は君を失わない為なら、多分なんだってできる」

　大切なピアノを壊すくらいなら、簡単に。口には出さなかったけど、そう思った。

　学校中にチャイムが響いた。始業を告げる鐘の音だ。僕らはその間どちらともなく話す事を止めていて、その十数秒だけは、まるで世界に二人きりのような錯覚になった。

　チャイムが鳴り終わった後、「今度は私の番です」と紙透さんが口を開いた。

「どうして嘘をついたのですか？」

　僕の言葉を真似て、彼女はそう言った。だからとりあえず僕も「何の事？」と彼女を真似て言ってみた。

「貴方がついた嘘は一つだけでしょう」

「僕は嘘なんかついてないよ」

「それがもう嘘じゃないですか」

　彼女がそう言った後の一瞬、僕らの間に少しだけ沈黙が訪れた。場面転換の暗転みたいな沈黙だった。彼女は自分から言うつもりはないらしく、観念して僕から言う事にする。

「嘘はついてないじゃないか。ただ言わなかっただけだよ」

「余計に質が悪いです」

　眉間に皺を寄せ、苛立ったように言う。そうかもしれない、と少しだけ思った。

「だって、僕が第一発見者だって言ったら、君は余計に怒るだろ」

「怒られるのが怖いから言わないんですか？　ガキですね」

　もう何を言っても文句を言われる気がして、余計な事は言わないでおこうと決心する。

「君が自殺したっていうあの日、僕も同じ駅にいた。それで、君の身体が転がってきたから、それを警察に言った。それだけ」

「それはつまり、私の顔が貴方の目の前に転がってきた、という事ですか」

「いや。君の顔は、ぐちゃぐちゃに潰れて跡形もなかったらしい」

　それは取り調べを受けた時、警察から聞いた事だった。顔も残らないような死に様なんて、僕には想像できない。痛かったのかとか、どうでもいい事を考える。

　紙透さんは僕の話を聞いて、また眉を寄せた。それは不快感の表れではなく、疑問の表れらしい。

「じゃあ、どうして私だと？」

「もうなんとなく分かるんじゃないの？」

　僕は挑発するように少し笑いながら、紙透さんのそれを見た。紙透さんは僕の視線の位置に気が付き、「まさか」と息を呑む。

「これですか」

　紙透さんが心から驚いた顔を見せたのはそれが初めてで、一杯食わせた気分になって少しだけ清々した。

　あの日、蔑白さんと別れた後、僕はホームで電車を待っていた。その時、駅を通り過ぎるだけの電車が何かとぶつかり、鈍い音を鳴らした。やがてそれは線路に何かを巻き込むような鋭いものに変音する。そして僕の目の前に転がってきたのが、彼女の両手だった。

「言っただろ。君の四肢は千切れた。それが偶々、僕の足元に投げ出された。一瞬で分かったよ。これは、紙透夏架の手だって」

「……そうですか」

　彼女はそう言っただけだった。自分が納得できる理由さえあればそれでいいのだろう。

「どうして黙っていたのですか」

　彼女が怒ったように訊ねる。僕は「決まってるだろ」とげんなりした気分で言った。

「僕が第一発見者だって言ったら、君は嫌がってただろ。『お礼を言いたい』なんて言っておいて、そのお礼を言うべき相手が何よりも憎む人間なんだ。僕なら嫌になる」

「……確かに、嫌ですね。貴方にお礼を言う気なんて微塵もありません」

　そこは嫌がってでも言うべきなんじゃないか。少し思った。

「でも残念ながら、貴方のそれはミスです。私を不幸にしたいなら、あの場で告白するべきだった。それで、私の大きな自尊心に傷を付けて、無理矢理にでも私を謝らせるべきだった。土下座しろとか言って」

「無駄に大きい自覚はあるんだな」

　少し挑発するように言ってみると、彼女は黙ったまま僕を睨んだ。なぜか「悪いのはお前だ」とでも言いたげな目をされたので、ごまかす為に次の言葉を紡ぐ。

「どうして僕が嘘をついてるって分かったの？」

「それは、単純な事です。聞いてたので」

「何を？」

「貴方と憐君の会話、貴方と夕未さんの会話を」

「……盗み聞きか」

「人聞きの悪い。あれはただ、……いや、盗み聞きですね」

　それから、今度は彼女から話してくれた。僕がピアノを壊した後の事を。

「貴方にピアノを壊されて、貴方を追いかけたんです。触れるわけでもない、見える人がいるわけでもない。何もできないと分かっていながら、その激情を止められませんでした。我を忘れるほどの怒りというのはそういうものです。廊下を走った先で、貴方と憐君を見つけました」

　真囚君と交わした会話の中身は覚えている。最後の最後に、一番言いたかった事が言えた事も。

「その後で、今度は貴方が教室に向かうのが分かりました。教室にいるのは当然、夕未さんです。そこでの会話も全て聴いていました」

　彼女はそこまで言うと、なぜかまた眉をひそめた。さっきと同じ、懐疑心を滲ませた表情だ。

「分からないんですが、どうして貴方は、そんな事をしたのですか」

「そんな事って？」

「憐君がついた嘘、夕未さんがついた嘘。それを暴こうとした事です。だって全部、貴方には関係ない事じゃないですか」

　罪悪感、贖罪、償い。いかにもそれらしい単語が頭をよぎる。でもすぐに振り払った。僕の中に巣食うものが、そんなにも綺麗なはずがない。僕が紙透さんに抱くものは、この世で一番醜いものだ。

「どうだろうね」

　さっきの紙透さんと同じ、煮え切らない言葉を吐く。彼女はそれ以上問いただす事はしなかった。代わりに、今度は自分から彼女自身の話をし始めた。つまり、僕が停学になっている間の事だ。

「憐君が来たんです。貴方が休んでいる間に」

　そう言いながら彼女は、ピアノの方に視線を向ける。閉じられた屋根の上に、教科書類や筆記用具が置かれている。

「誰かに見られたくなかったのでしょう、厳重に戸締りをした後、ゆっくりと話してくれました。自分が第一発見者などではない事と、貴方がピアノを壊したせいで停学になった事。加えて、私の私物も一式揃えてくれました。弔いか何かのつもりなのでしょう」

　よく見ればそれは、全て紙透さんの物だった。あの筆箱には確かに見覚えがある。

　真囚君が幽霊の存在を信じた、というわけではないだろう。それは少し信じ難い。

　ただ、違うと分かっていてもやらなければならない事というのが確かにあるらしい。自分の口で、想い人に対して嘘をついてしまった事。それを謝る事こそが、彼にとっては紙透さんに対する贖罪なのだろう。

「また憐君に会ったらお伝えください。私がお礼を言っていた事」

「殴られて終わりだよ」

「だからですよ」

　彼に殴られた時の痛みを思い出して、無意識に頬をさすっていた。彼はこれからどうするのだろう。まだ、僕に対しての当てつけを続けるだろうか。

「さて、これが最後です」

　紙透さんはそう言って、ピアノに触れようとする。当然、手はすり抜ける。何も通さない身体なのに、地面には立っていられるんだなとか、どうでもいい事を思った。

「どうして貴方は、私の大切なピアノを壊したのですか」

　彼女はそう言いながら、ピアノ椅子に腰をかけた。身体を通り抜けるものとそうでないものがあるのだろうか。なら、そこにある差異はなんなのだろう。

「理由がいる？」

「ええ、聴いておかないと気が済みません」

　彼女は答えが分かっていながら訊いているらしい。そんなの、決まってるじゃないか。その為だけに君は、誰よりも憎い僕とずっといたのだろう。

「君を不幸にしてやる為だよ」

　僕の言葉に、彼女はぶっきらぼうに「でしょうね」と言っただけだった。それに違和感を覚える。

「怒ってないの？」

「怒っていないように見えますか？」

「見えるから訊いたんだけど」

「本当に、貴方の言動は一々私を苛立たせますね。全身の毛が逆立ちます」

　そう言った後で紙透さんは、優しく目を瞑った。まるで何かを思い出そうとしているかのように。

　しばらくそうしていると、やがてまたゆっくりと瞼を開き、そしていつものようにピアノを弾くのだった。両腕を動かし、鍵盤に触れているかのような真似事をする。

「それ、意味あるの？」

「黙れ」

　はっきりと言われたので、その通りに黙る事にした。彼女が幽霊になってから会った初日にも似たような事を言われた気がする。

　やがて彼女は指をピタリと止め、大きな溜め息を一つ吐く。そして、こちらをゆっくりと振り向いて、とても嫌そうな顔でこう言ったのだ。

「手伝ってください」

「それが人にものを頼む態度かよ」

「嫌なんだから当然です」

　ここまで開き直られると、もう何も言えなくなる。僕が嫌いとか関係なく、ただ単に性格が悪いだけなんじゃないか。皆はよくこんな人間と仲良くしていたなと思う。

「僕に手伝える事があるの？」

「ええ、一つだけ」

「いいですか」と言いながら、またピアノを弾く素振りだけを見せる。手伝うかどうかはともかく、話を聞くだけはしてやろうと思った。

「私の身体は、何も通りません。全部すり抜けます。それは分かると思います」

「そうだね。どうしてピアノ椅子に座ってるかは知らないけど」

「なので、貴方は私に触れられませんよね？　触れようとしても、すり抜けるから」

　彼女が言いたい事が分からず、僕は眉をひそめる。彼女は「つまり」とまた無感情に言った。

「貴方と私が重なってピアノ椅子に座る。鍵盤を抑える私の指を、貴方も上からなぞって追いかける。そうすれば、私の作曲した音がどんなものかしっかりと分かるはずです」

　自信に満ちた紙透さんを見て、この人は天然なのだろうかと思った。あるいは、ただ馬鹿なだけなのか。

「無理だろ」

「どうしてです？」

「僕はピアノなんて弾けない」

「でも以前は弾いていたのでしょう？」

　一瞬呆気に取られたが、すぐに思い出した。蔑白さんとの会話も盗み聞きされていたんだった。

「ずっと昔の話だよ。無理なものは無理」

「未経験者よりはマシですよ。問題は貴方が名執崇音という事くらいです」

「存在そのものかよ」

「ええ、嫌いなので」

「見た事も聞いた事もない曲を、突然弾けると思う？」

「気力の勝負です。何度も繰り返し弾くんです」

「プロの曲ならともかく、素人の曲なんか無理。パターンも定型も何もないのに」

「そこは大丈夫です。私は紙透夏架なので」

「それを無駄に大きい自尊心っていうんだよ」

「いいから早く」

「断る。嫌いな人間に頼みを断られる不幸を噛み締めてろ」

「『私の両手を捧げます』」

　その刹那、ぴたりと時間が止まった。空間が止まった。まるで映画のワンシーンを写真で切り取ったみたいに、その瞬間の全てが固められたかのような感覚になった。

「……あの時、貴方が捨てた私の両手ですよ」

　そう言って彼女は、ひらひらと手を振る。あの時駅のホームで、僕の目の前に転がってきたものと全く同じもの。

「どうです？」

　挑発され、僕は溜め息をつく。そんな事を言われて、僕が断れるはずがない。紙透さんはそれを分かっている。やっぱり、彼女は性格が悪いのだ。

　立ち上がって、ピアノの傍に寄る。一瞬彼女を見たら「早く」と言われたので、仕方なくピアノ椅子に腰をかけた。

　そしてその上から、紙透さんが同じくピアノ椅子に腰を下ろす。彼女の目論見通り、生きた僕と死んだ紙透さんは、完璧に重なった。

「付いてきてください」

　彼女が鍵盤に指を置く。僕もその上から、自分の指を置く。

　そして次の瞬間、いきなり紙透さんが手を動かし始めた。当然、何も知らない僕がそれに付いていけるはずもない。

「付いてきてくださいって言いましたよね？」

「その前から僕は無理って言ってただろ。普通に考えれば分かる」

「じゃあ普通に考えないでください」

　自分の発する自分の声と、自分の口の位置から発せられる他人の声。気持ち悪い感覚だった。

「分かりました。最初はゆっくり弾きますから、追いかけてきてください」

　彼女は言葉の通り、ゆっくりと鍵盤をなぞっていった。僕は旋律をなんとなく頭に入れつつ、それを追いかける。

　僕の手は、彼女の手と重なっている。言い換えれば、僕がずっと求めていた、人生でなによりも大切なものが、今文字通り僕の手中にある。それが喜びかと訊ねられれば、正直分からなかった。

「……一つ訊いていいかな」

　指を動かしながら、僕が口を開く。紙透さんは何も言わなかった。僕はそれを肯定と受け取って言葉を続ける。

「どうして君は、僕の事が嫌いなの？」

　その質問は多分、本当は訊いてはいけないのだろうなという気がしていた。理由は分からない。ただ、その答えを聞いた時、僕は何か大切なものを失ってしまうのではないか。あるいは、紙透さんの大切な何かを壊してしまうのではないか。そんな気がしてならなかったのだ。

「……一つだけ言えるのは、貴方が名執崇音だから、という事です」

「どう考えても答えになってない」

「ええ、そうでしょうね」

　有耶無耶になんかできないと思う。僕自身は別にいいのだ。彼女にどれだけ嫌われようと、そのせいでどれだけの不幸に見舞われようと、多分何も思わない。

　その代わりに、それらを裏返した全てが紙透さんに重くのしかかる。全人類を幸福にするはずが、僕という人間を嫌ってしまった事。他の人間を使い、僕を不幸にさせた事。

　友人に心の底から嫌われていた事、幸福の道具であるはずのピアノで不幸にさせた人間がいる事。そういう全てが、彼女を縛り付け、強く蝕んでいる。死んで尚呪われ続ける。

「なら、もう一つだけ教えてあげます。貴方が名執崇音であるからと同時に、貴方が名執崇音ではなくなったから、という言い方もできます」

「どっちにしろ答えになってない」

　苦笑交じりに言った。彼女は何も言わず、ピアノを弾く速度を少しだけ上げる。まるで、彼女がその人生で歩んできた歩速のように。

　彼女が死んだ理由なんか知らない。知りたいとも思わない。ただ、その口で「名執崇音」と僕の名を呼んだ事は、間違いのない事実だった。彼女がそう言うのなら、彼女を殺したのは間違いなく僕なのだろう。それでいい。

　それから僕らは、ただ無言でピアノを弾き続けていた。どれくらいそうしていたか分からない。その日はどのクラスも音楽の授業はなかったらしく、一日中僕らの貸し切りだった。

　いつの間にか青空は夕焼けに染まり、黒色のピアノがそれを反射させていた。それに気付いた時、僕はようやくまともに曲を弾けるようになっていた。

「……やっぱり駄目ですね」

　突然、彼女はそう言ってピアノ椅子から立ち上がった。僕はその場に座ったまま「何が？」と訊ねてみる。

「いい曲だと思ってたんですけど、実際に聴いてみると全然駄目。全部創り直します」

「ようやく僕も弾けるようになってきたのに」

「あれで弾けてたつもりなんですか？　ペダル一回も踏んでないでしょう」

「ペダルの踏み方なんか聞いてない」

　紙透さんはうんと腕を伸ばした後、小さな欠伸をした。僕は自分の手を見てみる。指の腹が少し変色しているくらいで、何の苦労も知らないように綺麗なままだ。僕が追い求めた理想には、途方もなく遠い。

「曲名があるんです」

　突然、彼女が言った。

　ふと、彼女の筆箱が僕の視界に入った。そこに付けられていた音符は、初めから完成された、連桁で繋がっている四分音符だった。僕が完成を待ち望んでいる形がそのままある。

　それを見て、僕はふととある事を思った。でも、あまりにも荒唐無稽な話だったから、すぐに頭から振り払ってそのまま会話を続けた。

「それは、聞いてもいいやつ？」

「まあ、別に言いたくない理由はありませんから」

　彼女はゆっくりと、こちらを振り向く。

　窓から差し込む赤い太陽、夏風に吹かれてなびくカーテン、振り向きざまに流れる黒い髪、よく見慣れた制服、夏空を透過する華奢な体。

「全人類を幸福にする、その為だけに創られた曲。曲名は」

　夏の赤に染め上げられた彼女は、間違いなく、紙透夏架だった。

「〝幸福の唄〟」

　幕間

「後で音楽室も行ってみる？」

「……あ、うん、そうだね」

「じゃあ音楽室の鍵も借りてこないと」

　蔑白さんの問いに生返事をしてしまったのは、母校を歩くという行動がこんなにも胸を締め付けるとは知らなかったからだ。時折蔑白さんに挨拶を交わす生徒達が、同級生に思えて仕方がない。

「音楽の先生だっけ？」

「そう。もちろんピアノも弾けるよ」

「紙透さんの影響？」

「いや、名執君の影響」

　そんな会話をしていると、旧校舎にはすぐに着いた。ここからは、何年も人の立ち入りがない場所だ。玄関口の扉を開けると、埃っぽい空気が充満しているのがすぐに分かった。

「何年ぶり？」

「ここ使ってたのって私達の世代で最後だから、まぁ五、六年くらい？」

「教師になってから来た事は？」

「まさか」

　廊下を歩き、階段を上る。痛んだ壁や薄汚れた天井は、時の流れを感じさせるには充分なものだった。生きている限り、いつだって時間に置いて行かれるばかりだ。心はここに居たがっているのに、それ以外の全てがどんどんと先に進んでいく。

　やがて一年一組の教室が目先に見えた時、蔑白さんが「名執君」と僕の名前を呼んだ。

「凄く今更だけど、本当に来てよかったの？」

「どうして？」

「どうしてって、いい思い出なんか一つも無いでしょ」

　確かに、その通りだ。ここに想い遺した事なんて一つも無い。至る所に、あの日々の不幸が転がっている。制服を着た僕が、不幸だけを大切に抱き留めてしゃがみ込んでいる。

「過去の亡霊がここにはいる。いい加減弔ってあげないとね」

　そんな風に、口だけなら何とでも言える。でも、それを叶える事はきっと不可能なのだと知っている。いつだって大切なものは、過去形になっていくばかりだ。

　一年一組の教室を覗く。そこには、持ち主を失って迷子のままだった机や椅子、あの日々の空気だけがある。

　それだけがある、はずだった。

「……憐君？」

　廃れた椅子の一つに、彼が座っていた。

　彼は教室の中で煙草を吸っていた。机の上には煙草のパッケージがある。青空と言うにはあまりに深い、暗い藍色のパッケージだった。

　彼はこちらを確認すると、ゆっくりと立ち上がって深い息を吐く。紫煙が立ち昇って、ボロボロの天井に消えていった。

「憐君、来てたんだ」

　蔑白さんが嬉しそうな、戸惑っているような、そんな顔で言った。彼はそれに「お前が来いって連絡寄越したんだろ」と言った。

「まさか本当に来るとは思わなくて」

「俺だって来るつもりはなかった。けど」

　そう言って、僕の顔を確認する。僕と彼が目を合わせたのは、その数秒間だけだった。

「まあいいよ。もう用も済んだ」

「用って？」

　蔑白さんの疑問には答えず、彼は僕らの横を通ってそのまま教室を立ち去った。蔑白さんは「どっから入ったんだろうね」と苦笑いを浮かべる。

「名執君の事無視してたよね」

「あれも大人になったって事じゃない？　昔なら殴られてた」

「教室で煙草を吸う人が大人なの？」

「どうせ取り壊すんでしょ」

　ふと、とある机の上に花が置かれているのを見つけた。その青々しい茎を見る限り、つい最近置かれたものだというのは分かる。

「……ここ、夏架の席だ」

　蔑白さんが呟いた。「用ってこの事かな」と言いながら、花を手に取る。一輪がとても小さな薄紫色の花だった。

　彼もまた、時間に置き去りにされた人間だったという話だろう。未だに彼女の存在を忘れられないという証明だ。あるいは、忘れたいとも思っていないかもしれない。

　僕は無意識に、あの日を思い出していた。彼女と完璧に重なり、共にピアノを弾いた日を。僕だって、あの時の彼女の手を忘れられないままだ。

「……あのさ、蔑白さん」

「なに？」

　純粋無垢な瞳で、彼女が首を傾げる。そろそろ言うべきだと思った。忘れたふりから目を逸らすべきだと思った。僕はゆっくりと、口を開く。

「蔑白先生？」

　その時だ。僕があの夢での出来事を口にしようとした時、教室の入り口から声が聞こえた。そこには、制服を着た女子生徒が立っている。帰宅するところだったのか、学校鞄を右肩に下げていた。

「あれ、どうしたの？」

　蔑白さんが教師としてその子と接する。その女子生徒は飄々としていて、無感情で、どこか紙透さんと似たような雰囲気を感じさせる子だった。

「兄がこの校舎から出てきたのを見かけて、何かあったのかと思って」

「ああ、憐君なら何でもないよ。ちょっと色々あって」

「どっちですか」

「気持ちは分かるけど勝手に入っちゃ駄目。お化けが出るよ」

　兄。真囚君を兄と言った。まさか、この子。

「……もしかして、夢来ちゃん？」

　僕が名前を呼ぶと、夢来ちゃんは僕を見て目を細めた。そしてしばらく考えるような表情を見せた後、「名執さん、ですか」と呟く。

「そっか、この学校に入学してたんだ。いや、当たり前と言えば当たり前だけど」

　夢来ちゃんは、僕の知っている彼女よりも随分と大人になっていた。顔立ちは確かに昔の面影を残しているけど、それでもすぐには分からない。腰にまで届きそうだった髪は肩甲骨辺りで切っている。歳不相応だったあの大人びた雰囲気は、成長した彼女によく似合っていた。

　夢来ちゃんは僕の言葉にあまり反応を見せず、「まあ、はい」というような曖昧な返答をした。

　何を言うべきか迷った。言うべき事ならたくさんあった。身勝手かもしれないけど、僕はあまりに多くのものを夢来ちゃんに押し付けたから。

　だから最初、僕は「ごめん」と言った。夢来ちゃんも、僕が何を言いたいのか悟ったらしく、少し目を伏せて小さく頷いた。

「謝る事はたくさんあるけど、一番はやっぱりコンサートの事になるんだろうね。本当に、ごめん」

「……ああする他なかったのは理解してます。感謝するべきかもしれないとも思います。それでも、私にとって一番大切なものを全て壊した事だけは、やっぱり今でも許せません」

「許さなくていい」、と言おうとして口を噤んだ。それが不正解と分かったから。でも、それすら言えなくなったら、僕は何を言えばいいのか分からなかった。

　話を聞いていた蔑白さんは、僕と夢来ちゃんと交互に見て「何の話？」と少し言いづらそうに訊ねる。

「あの日のコンサートの話だよ。僕は、取り返しのつかない事をした」

「コンサートが、どうかしたの？」

「蔑白さんも見てたでしょ。あれは全部、僕のせいだ」

「……いや、本当に何の事か分からないんだけど」

　蔑白さんは、本当に訳が分からないと言うような表情で僕を見ている。僕はそこで違和感を抱いた。あの日、会場には蔑白さんだっていたのだ。分からないはずがない。

「だって、コンサートは大成功だったもんね？　夢来ちゃんのピアノ、凄く良かったよ」

「……は？」

　思わず、そんな声を出した。

　大成功？　そんなはずがない。だって僕はあの日、あのコンサートをめちゃくちゃにしてやったのだから。大失敗になって終わったはずだから。

「……あの、その事で、名執さんに言ってなかった事があるんです」

　夢来ちゃんが少し言いづらそうに口を挟む。

　その時、僕の目にとあるものが映った。夢来ちゃんの鞄に、ストラップが付いている。

「夢来ちゃん、それ」

　もちろん、世の中に同じものはごまんとあるだろう。「それ」と決めつけて訊ねるのは、天文学的に馬鹿な話だと思う。それでも僕は、訊いていた。

「その四分音符のストラップ、どこで手に入れたの？」

　夢来ちゃんは「え？」と自分の鞄を確認する。ゆらゆらと、四分音符が揺れる。

「これはただ、蔑白先生から貰ったもので」

　僕が蔑白さんを見ると、彼女は何の気なしにといった感じで頷いた。

「まだ『蔑白先生』じゃなくて『蔑白さん』って呼ばれてた頃ね。それこそ、あのコンサートが終わった後くらいかな」

「人から物を貰うのって苦手で、私は遠慮したんですけど」

「どうせガチャガチャで当てただけの安物だし、別にいいかなって」

「いらないものを押し付けられただけの気もしますね」

　ガチャガチャ？　あの四分音符を、ガチャガチャで？

　僕はまさかと思いながら、強く浮かんだ疑問を口に出した。

「蔑白さんってさ、昔、誰かに『ゆーちゃん』って呼ばれた事ある？」

　僕が口にした唐突な疑問に、蔑白さんは「え？」と少し戸惑った。

「昔、誰かと約束したとか、そういう事って覚えてない？」

「い、いやあどうだろう。そういうのって忘れるのが普通だし。でも、『ゆーちゃん』って呼ばれてた記憶はないかな」

「じゃあこれは？　これに見覚えない？」

　スーツのポケットから、例の四分音符のストラップを取り出す。それを見て彼女は、夢来ちゃんの鞄に付いているものと見比べた。

「これと似てるって意味では見覚えがあるって言い方もできるよ。でも似てるけど別物だよね、これ」

　そう言って夢来ちゃんの鞄に付いているものと、僕が持っていたものを並べる。形は確かに似ているが、大きさが少し違うし、何より彼女のストラップは番を想定されたものではなかった。

「ゆーちゃん」というのは、「蔑白夕未」の愛称なのだと思っていた。彼女の持つストラップは、僕の持つものと二つで一つなのだと確信していた。何より、彼女は昔、僕と出会った事がある。

「……蔑白さん、僕と初めて出会ったのっていつ？」

　そう訊ねると、彼女は一瞬夢来ちゃんの顔を見た。ここでそんな話する？　とでも言いたげに眉をひそめる。

「あんまり覚えてないけど、どこかのピアノのコンサートだった。そこで名執君の演奏を聴いて、名執君の名前を覚えた」

　夢来ちゃんが「何の話です？」と訊ねる。蔑白さんが「過去の話」とだけ答える。

　そう、これは過去の話なのだ。僕は昔、蔑白さんと約束をした。ただそれだけの話だ。彼女が言うように、こんな話忘れる方が普通だし、普通じゃないのは僕だけなのだと分かっていた。彼女が忘れているなら、別にそれでいい。それ以上にも以下にもならない。そう思うように努めていた。

　けれど、ここにきて僕はまた、あの過去を思い出す。もう手に入らないものを想起する。過ぎ去った〝手〟に、手を伸ばそうとしている。

　蔑白さんじゃないのなら、僕と約束をしたあの女の子は。

「……あの、それで、名執さんに言ってなかった事なんですけど」

　夢来ちゃんがまた口を開いて、話を続けようとする。その時だった。

　誰もいないはずの校舎に、ピアノの音が響いた。

　僕の未熟過ぎる絶対音感は、それが〝シ〟の音である事を告げていた。

　その音から始まったピアノは、曲を奏でていく。

　何もかもを赦す為の曲。誰も置いて行かない為の曲。全てを掬い取る為の曲。全人類を幸福にする、その為だけに創られた曲。曲名は。

「——〝幸福の唄〟」

第二部　「否定」

〝偶像を守る為なら、その偶像の全てすら否定してやろう。〟

「〝シ〟の音が好きなんです。シは幸せのシって、よく言うじゃないですか」

　音楽室は校舎の最上階に位置していて、つまり今、この場所は最も空に近い位置にある。天国にも地獄にも近いとも言えるかもしれない。いや、地獄はもしかしたら下にあるのかもしれないけど。

　地上よりほんの僅かにだけ距離の縮まった空が、教室の窓から目が眩むほどの青を伝えている。それがアクアリウムの床に反射して、どこに目を逸らしても眩し過ぎた。

　そんな床に散らばっている、数え切れないほどの楽譜を見る。どの一枚に目を通しても、確かにシの音階が多く使われているように感じる。

「紙透さんは、〝シ〟の音階が好きだって言ってた。シは幸せのシだからって」

　すぐ傍にいた紙透さんの言葉を、そっくりそのまま僕が反芻する。彼女の言葉を伝える相手は、床で一生懸命に鉛筆を走らせる夢来ちゃんだった。

「だと思います。そうじゃなきゃ、こんなにシの音階は使わないです。シの三連符ばっかりなのに、ちゃんと曲として成立してしまったのが凄い」

　三連符とは、一音が入る場所に三つも音を詰め込んでしまう音符の事だ。楽譜には、その記号が至るところにある。

「単純だと思わない？　作曲って、もっと小難しい事考えながら創るものだと思ってたけど」

「夏架さんはそういう人でした」

「単純って事？」

　僕が訊ねると、夢来ちゃんは鉛筆を持つ手を止めて、少し考えるような仕草を見せる。隣にいた紙透さんが「私、頭は良い方でしたけど」と少し怒ったように言った。

「確かに、夏架さんは単純な人だと私は思っています。でも単純というのは、難しい事を考えないという意味じゃありません。行動とか原理とかが、自分を構築するものが一貫しているという意味です。何か大切なものに限っては、誰が見ても分かりやすいような『何か』を残すというか」

　夢来ちゃんは自分で言いながら、自分で何を言っているのか分からなくなったらしい。「えっと、つまりですね」と、鉛筆の先で楽譜を叩きながら言った。

「夏架さんにとっては、『幸せ』というものがあまりに大切過ぎたんです。だから、それ以外の『何か』がそこに関与する事を嫌ったんじゃないかと思います。人を幸福にする為に創られた唄に、そうじゃないものが紛れ込んではいけない。ただ純粋に『幸せ』だけを伝える唄であるべきと、そう思っていたんじゃないかって」

　そう言いながら、今度は僕の顔をゆっくりと見た。自分の言いたい事が上手く伝わっているか心配、みたいな表情に見える。それが夢来ちゃんに似合わず、年相応の中学生に見えたから少し安心した。僕はゆっくりと頷いて「分かるよ」と言う。

「要するに、潔癖症なんだろうね。ただひたすらに、純粋なものだけを必要としていた。要らないものは極限まで削り出す。綺麗なものだけを残したかったんだろうね」

「夏架さんのそういう生き方が好きでした。盆栽みたい」

「……盆栽？」

　その単語の意味は少し分からなくて、訊ねるように呟いた。僕より付き合いの長い紙透さんですら「……盆栽？」と眉をひそめている。

「盆栽って余計な枝は切っちゃうじゃないですか。それで段々と綺麗なものにしていく。音楽、というかピアノに限っては夏架さんも盆栽みたいな人間だったと思います」

　横目で紙透さんの様子を伺う。僕には見せた事のない、不思議そうな表情で眉間に皺を寄せている。この紙透さんがこうなるのだから、やっぱり夢来ちゃんの性格はよく分からない。

　でも理解はできる。盆栽、という例えが正しいかどうかは分からないけど、美しさというのはそういうものなのだろう。余計で邪魔なものを排除していって、最後にようやく残る物だけが本当に大切になる。〝幸福の唄〟はきっとそういうものだし、紙透さんが全人類に伝えたかったのは、きっとそういうものだ。

「いい話だね」

　割と本心から思った言葉が口から零れたのだが、存外皮肉交じりのような口調になってしまった。紙透さんが僕を睨むのが分かる。どんな形であれ、混じり気の無い純粋な人間はどうしようもなく美しいと思う。

「いい話だと思いますか？」

　突然、夢来ちゃんが言った。地面に座ったまま、感情の読み取れない表情をしている。僕は正直、夢来ちゃんのこういうところが苦手だった。何を言いたいのか、何を考えているのか、よく分からない。いつも何かに苛立っている紙透さんの方がまだ分かりやすい。

「いや、『いい話』っていうのは主観的なものだから、一概には言えないだろうけど。でも、夢来ちゃんはそう思ったから今も曲を書いてるんでしょ？」

　音楽室の床を埋め尽くしそうなほどに、あちこちに散乱する手書きの楽譜。全ては、夢来ちゃんがほぼ一人で書き殴ったものだった。

「……そうだといいんですけど」

　それだけ言うと、夢来ちゃんはまた鉛筆を握って楽譜を創っていく。これ以上は踏み込んではいけない、何か個人的なものがある。僕はそう思ったのだが、紙透さんはそうじゃないらしく、「詳しく」と僕に言った。ここ最近、彼女は僕を雑用係みたいに扱っている節がある。

「何か思う事があるなら、ちょっと聞いてみたいな。もちろん、嫌なら無理にとは言わないけど」

　なるべく優しい言葉を選び、優しい声音を使う。夢来ちゃんのよく分からない性格に加えて、単純に年下の子供が苦手なのもあるかもしれない。接し方が分からない。

　夢来ちゃんは鉛筆を動かしたまま、無感情に説明してくれた。

「むしろ、何も思えないんです。夏架さんのやろうとしてた事が正しいのかどうか、いい話かどうか、私には分かりません。だから、名執さんが『いい話』だって言うなら、きっといい話なんだろうなと」

　真囚夢来という人間には、何も無い。これは夢来ちゃん本人が言っていた事だ。それが合っているのか間違っているのか、僕には分からない。

　これ以上は踏み込んでいけないと、直感的に思う。人が泣いているのを見た時、涙の理由を安易に訊いてはいけないように。紙透さんもそう思っているのだろう、少し目を伏せてやりきれないような顔をしている。

　分かっている。でも、僕は訊いてみたかった。どうして夢来ちゃんは、紙透さんの願いを叶えようとしているのか。どうして、〝幸福の唄〟を完成させようとしているのか。

「……できました」

　僕が口を開こうとした時、先に夢来ちゃんが呟いた。何か言いたげにこちらの様子を伺う。僕はついさっきまで彼女が鉛筆を走らせていた、その楽譜を見た。綺麗な五線譜の最後には、湖に浮かぶ波紋のように静かな終止線が置かれている。

「本当にこれを〝幸福の唄〟としていいんでしょうか。夏架さんは、これを望んでいたのでしょうか」

　夢来ちゃんの、所在の無い言葉が虚ろに零れる。僕は隣の紙透さんを見る。

「駄目なはずがない。これこそが、完璧な〝幸福の唄〟です。私が人生をかけて成し遂げたかった事です。夢来ちゃんがいたからこそ、やっと完遂する」

「紙透さんも喜んでるんじゃないかな。現状、僕らにできる事はこれ以上ないんだ。なら、彼女が遺したものを引き継いで、彼女が成し遂げたかった事を実現させる。紙透さんもそれを望んでるって思うしかない」

　紙透さんの言葉を代弁する形で、夢来ちゃんに告げる。未だ僕の言葉には不信感を拭えないけど、それでも納得しなければならない。死んだ人間の事は、生きた人間が勝手に想像するしかないのだから。

　夢来ちゃんの手にある〝幸福の唄〟を、僕は勝手に〝新・幸福の唄〟と名付ける事にした。もちろん、夢来ちゃんには言わない。彼女にとっては、自分の手元にあるものだけが本物の〝幸福の唄〟だから。

　じゃあ、〝旧・幸福の唄〟はどこにあるのか。そう訊ねられれば、僕はきっとこう答えるだろう。「どこにもないよ」と。

　未だ不安げな夢来ちゃんの目を見る。僕はもう少し、この少女について知りたいと思うようになっている。

＊　　＊　　＊　　＊　　＊

「やっぱり駄目です」

　その日は夏に相応しくない、曇り模様の日だった。どちらかと言えば、僕は晴れの日より曇りが好きだ。単純に涼しいから。

「駄目って、何が」

「全部です。これを〝幸福の唄〟と呼ぶには、あまりに遠く及ばない」

「偉大な音楽家の言う事は、凡人には理解できないな」

　机の上には何枚かの楽譜が積まれている。ざっと五十枚くらいだろうか。全て、僕が手書きしたものだった。紙透さんの指示の元、彼女が創り上げた〝幸福の唄〟を、完璧に譜面に起こした。

　僕は紙透さんと一つに重なり、彼女の手を追う形で完璧に〝幸福の唄〟を演奏した。紙透さんがそれを譜面に起こしたいと言うから、鉛筆も握られない彼女の代わりに、僕がこうやって楽譜を書いた。ちなみにその提案を断る事もできたが、「私の心臓を捧げます」と言われてしまい、仕方なく僕はそれを受け入れた。

「つまりじゃあ、これは全部没？」

「はい」

「僕がわざわざ手書きで、膨大な時間と労力を使ったのに？」

「はい」

「返せよ」

「失ったものは取り戻せません。命を失った私だからよく分かります」

「幽霊ジョークです」とつまらなさそうに紙透さんは言った。ピアノ馬鹿の彼女にはこういうところがある。天然と言えば聞こえはいいのかもしれないけど、僕からすればただ苛立つだけだ。

「じゃあこれはどうするんだよ」

「どうにでもしてください。捨ててもいいし、『紙透夏架』のブランドを付けて売ってもいいです」

「自惚れるな」

　これは捨ててやろう。名一杯の恨みを込めてゴミ箱に叩き付けてやろう。心底思った。

「じゃあどうするんだよ、〝幸福の唄〟は」

「創り直しますよ。決まってるじゃないですか」

「また一から？」

　僕がうんざりして訊ねると、紙透さんは当たり前のように「はい」と言った。人が苦に思う事が、自分にとっては何でもないような道のりにしか思えない。あるいは、それを楽しいとすら思ってしまう。それを多分天才と呼ぶのだろうし、だから間違いなく紙透夏架は天才なのだろう。

「君はそれで楽しいの？」

「どういう意味ですか」

「苦しんで創ったものが〝幸福の唄〟なんて、笑い話としか思えないけど」

　僕が言うと、紙透さんは珍しく怒らずに、「大丈夫ですよ」と静かに言った。あるいは、説法を説くみたいに優しい口調だった。

「私は何よりも、この曲を創る事が楽しいです。そんなのは杞憂です」

　楽しんでいいのか、と思わずにいられないが、それが彼女が成仏せずにいる理由なのだから、これ以上僕に言える事は何も無い。あとは勝手に頑張ってくれとしか。

「でも、そうですね。これ以上一人でやるには限界があるかもしれません」

　紙透さんが少し俯きながら言った。「僕には無理だよ」と言うと「自惚れないでください」といつも通り苛立ったように言われた。

「もちろん、このまま私一人で創る事も可能ではありますが、それだと、結局同じような曲が完成してしまう。私の持っていないものを持っているような、誰かの手伝いが必要です」

「それってつまり、君と同じくらいピアノを弾ける人間って事だろ。あるいは、それくらい音楽に精通してる人間。そんなのはそこら辺にいるもんじゃない」

「いますよ」

　呆気ないくらい、彼女は即答した。僕は言葉に詰まる。

「いるって、どこに」

　僕が訊ねると、紙透さんは少し考えてこう言った。

「多分、名執君が最も行ってはいけない場所に」

　そうやって学校を出る頃、曇り空は鈍色の曇天になっていて、重そうな雲から、いつ雨が降ってきてもおかしくない状況にあった。

「真囚夢来ちゃん。まず間違いなく、あの子は天才です」

「それは、君よりも？」

「私は天才じゃありません」

　太陽は見えないのに、気温だけが異様に高い道を歩く。平日の昼下がりに人気は無く、僕と紙透さんが喋りながら歩いても誰かに見られる事はなかった。ちなみに学校はサボりだ。

「君を天才って言わないなら、多分誰も天才じゃない」

「天才というのは文字通り、天からの授かりもののような才能の事です。私は血の滲むような努力があって、生前のような結果を残しました」

「それが分からないなら勝手な事言わないでください」と、紙透さんが少し苛立ったように言う。彼女の沸点はよく分からない。

「じゃあ、その真囚君の妹は？」

「夢来ちゃんは現在、中学一年生。ピアノを弾き始めたのは一年前らしいです。それで、私と同じくらいの技量がある。これ以上進歩のしようがない私が抜かれるのは、もう時間の問題です」

　具体的な事は何も分からないのに、その凄まじさは肌で感じ取る事ができた。彼女が人生で費やしてきた十何年の場所に、たった一年で到達している。

「しかも、夢来ちゃんはピアノをただの習い事だと言っている。私のように、時間の許す限りピアノを弾いているわけじゃない。ピアノ教室に通っている時間以外は、ピアノに触る事すらないらしいです」

「これで分かりますか？」と、少し呆れたように言われる。僕は「よく分かったよ」と心底頷いた。

「つまりその子に、〝幸福の唄〟を創るのを手伝って欲しいと」

「何回もそう言ってるじゃないですか」

「一回も言ってないだろ」

　いや、もしかすると一回くらいは言ったかもしれない。少し思ったけど、認めるのは癪だったから言わなかった。

「夢来ちゃんなら、私に足りない部分を持っているかもしれない。全てにおいて完璧な、〝幸福の唄〟が完成するかもしれない」

　それは別にどうでもよかったのだが、僕は一つ疑問に思っている事があった。僕以外の人間には、紙透さんの存在が見えないらしいという点についてだ。

「手伝ってもらうって、どうやって？　漠然とし過ぎじゃない？」

「簡単な事です。私の言葉は、名執君に代弁してもらえばいい。『紙透さんが言ってたよ』っていう体で。それで夢来ちゃんに伝えたい事が伝わる」

「当たり前みたいに言うなよ。なんで僕が引き受けると思ってるんだ」

「貴方にとっての執着がどれだけ強固なものか、最近になって理解し始めたからです」

　そう言って自分の手を、僕の顔の前でひらひらとふる。半透明だから向こうの景色は見えるけど、単純に邪魔だ。気が散る。

　紙透さんは分かっているのだ。僕がどれだけ彼女の〝手〟を妄信しているのか。僕はそれを世界の全てのように思っている。

「いいんですか、私が成仏しても。名執君が約束した『女の子』とそっくりな手ですよ」

「黙れよ」

　遠い昔に約束をした女の子は誰なのか。もう答えは分かっている。でも、そんな事は正直どうでもよかった。今の僕が何よりも欲しているのは、僕を掬い取ってくれる完璧な〝手〟の存在だけだ。

「ここですね」

　しばらく歩いていると、紙透さんが一軒の家の前で立ち止まった。表札には「真囚」とある。

「家にいるの？」

「ええ、不登校らしくて」

「知らない男が玄関の向こうにいて、素直に出てくれるとは思えないんだけど」

「そこは多分大丈夫ですよ。憐君と同じ制服ですし」

　確かに、学校からそのまま来たから制服のままだ。真囚君の知り合いと分かれば、少なからず警戒心を解いてくれるかもしれない。何となくそう思いながら、インターホンを押してみた。

『……はい』

　ざらついた電子音で、少女の声が聞こえた。ガラスのような、何かの拍子にすぐ壊れてしまいそうな、繊細でか細い声だった。

「こんにちは。僕、真囚憐君の友達なんだけど、ちょっと大丈夫かな？」

『お兄ちゃんなら、今いません。というか学校のはずですけど』

「真囚君が少し体調悪いらしくて、早退になっちゃったんだ。先に真囚君の荷物だけ届けに来たんだけど、受け取ってくれるかな」

『お兄ちゃんに限ってそんな事ないと思いますけど……』

　やや不審に思いながらも、『少し待っててください』と言ってくれた。玄関が開くまでの数十秒、「ほんと、嘘ばっかりですね」「僕に限った話じゃないし、今に始まった話でもない」なんて会話をした。

　やがて玄関から顔を覗かせたのは、その声によく似合うような、透明な儚さを持った少女だった。長く伸びた髪は腰にまで届こうとしていて、どこかの中学の制服を着た彼女は、この世のありとあらゆる悲しみを味わって生きてきたかのような雰囲気を纏っている。やっぱり、この前スーパーで真囚君と一緒にいた子だ。

「こんにちは。僕は」

　僕が名前を言おうとした時だ。少女は、急に玄関の扉を閉めて家の中に戻っていった。突然の事に、僕は言葉を発する事もできなかった。

「嘘つくからですよ」

「……そうなのかな」

　真囚君の鞄でも盗み出してくればよかっただろうか。どうしたものかとその場に立ち尽くしていた時、インターホンからまた少女の声がする。

『お兄ちゃんに言われてるんです。嘘くさい笑顔を浮かべてる、俺と同じ制服を着た男子が来たら逃げろって』

「狙い撃ちじゃないですか」

　紙透さんが少し愉快そうに言った。その通りだ。どうやら真囚君は徹底的に僕をブロックするつもりらしい。それにしても、まるで僕がここに来る事を見越していたかのような口ぶりだ。とりあえず、会話を続かせる為になんとか言葉を紡いでみる事にする。

「他には何か言われた？」

『あと、なんか苛々するとか、顔が生理的に受け付けないとか、そういう奴がいたらとりあえず逃げろって』

「初対面で酷い言われようですね」

　全くだ。つまり、この子にとってその全部が僕に当てはまっているという事じゃないか。少しげんなりしながら、僕はこう訊ねてみる。

「真囚君は、どうして僕を嫌ってるのか知ってる？」

『夏架さんを殺した奴だからって言われました』

　返事はすぐにきた。紙透さんと顔を合わせる。「そう思われてるなら、もうどうしようもありませんよね」と他人事のように吐き捨てた。

　ここまできたら、もう誠実さを見せるしかないだろう。警戒心を解くとか、そういう段階ではないのだ。そう思って、僕は「分かった」と言った。

「なら、そのままでいいから聴いて欲しい。僕は名執崇音っていいます。僕が紙透さんを殺したかどうか、それは君が判断すればいい。ただ、これだけは言わせて」

　僕はそこで、少し間を持たせた。これから言う事はとても大切な事だ、というような一瞬の間だ。

「『紙透夏架の命を捧げる』。少しだけ、紙透さんについての話をさせて欲しい」

　そう言うと、今度は僕の意図しない間が一瞬あって、やがてプツンと電子音が鳴った。切られてしまったらしい。

「勝手に私の命を使わないでくれますか」

「もう無いものをどうしようとどうでもいいだろ」

　どうしようもないなと、大きく息をついた。なんにせよ、今日はもう帰った方がいいのだろう。少し期間を置いて、また尋ねてみるといいかもしれない。最悪、真囚君本人をどうにか説得できないだろうか。いや、それはどう考えても不可能だ。多分紙透さんを生き返らせるより難しい。

　踵を返して学校へ戻ろうとした時、玄関の扉が開く音がした。見ると、さっきの少女が半開きのドアから顔を覗かせている。

　じっと目を合わせたまま数秒が経つ。やがて、先に口を開いたのは少女の方だった。

「使うなら、自分の命にしてください」

　何と返すべきか分からず、僕はとりあえず「そうだよね」と苦笑いをした。真囚君が噓くさいと言った顔だ。隣にいた紙透さんが、「だから言ったでしょう」と苛立ったように言った。

＊　　＊　　＊　　＊　　＊

「明日、高校の音楽室に来てください」

　さすがに、女の子が一人でいる家に上がり込むわけにはいかない。どこかで話ができないかと訊ねると、彼女はそう言った。どうしてその場所なのか、どうやって高校に入るつもりなのか。そういう事を訊ねる前に彼女は扉を閉めた。

　その日は土曜日で、いつもより学校にいる人は少ない。これならまあ、学校に入れない事もないかと、なんとなく納得した。空は昨日と同じく、落ちてこないのが不思議なほどに重そうな雲だった。

　音楽室に近付いてきた時、ピアノの音色が小さく聞こえてきた。そのメロディは〝幸福の唄〟ではなかったが、どこかで聞き覚えのある曲だった。

　その旋律は音楽室の前まで辿り着いても、鳴り止む気配がしなかった。扉の前で逡巡し、迷っていてもしょうがないと、扉を開ける。

　そうやって、真っ先に視界に飛び込んできたのが、真囚夢来だった。

　新品のピアノで旋律を奏でる少女は、悲哀に満ちていた。この世の全ての悲しみを詰め込んだかのような、そんな旋律と彼女だった。

　それを見て僕は、とある光景を浮かべた。自分以外の全人類が滅んだ後も、彼女はこうやって悲しいメロディを、誰にも届けられないまま弾き続けるのだろうなと。漠然とそう思った。

「ベートーヴェン、ピアノソナタ第十二番」

　いつの間にか隣にいた紙透さんが言う。聞き覚えがあるのも当然だった。クラシックの中では、群を抜いて知名度のある曲だ。

「通称、〝葬送〟」

　僕か紙透さんか、どちらかが呟いた。

　多分それは、紙透夏架という人間に捧げる曲だった。そうじゃなきゃ、こんなにも追慕を感じられるはずがない。僕が紙透さんを殺したのかどうかは知らないけど、それでも、世界が失った紙透夏架は、そのくらいの喪失だった。

　曲を弾き終えた後、少女は最初に「私、不登校なんです」と小さく言った。

「朝起きて、顔を洗って制服に着替えて朝ごはんを食べて、前の日に準備した学校鞄を背負って、玄関の扉を開けようとする。でも、そこまでなんです。そこから先に進めた事がありません。どうしてこんな簡単な事ができないんだろうって思うと同時に、学校へ向かおうとした足を家に戻した瞬間」

「……安心する？」

　僕が言うと、彼女は初めてこちらを向いた。一瞬驚いたような顔を見せ、すぐに「情けない話です」と俯いて言った。

「こんな事もできない人間に、生きてる意味は無い。夏架さんじゃなく、私みたいに無価値な人間こそが死ぬべきなのに」

「人間に価値なんか無い。どうせ死ぬだけの生き物だ」

　僕の言葉に、少女は「それいいですね」と言って少しだけ目を細めた。笑っている、のだと思う。

「お兄ちゃんは『価値が無いわけがない』って言ってくれるんですけど、それが申し訳なくて、窮屈なんです。誰にも価値が無いって言われると、少し救われます」

「シスコンってやつだ」

「かもしれません」

　少女は背丈に不相応なピアノ椅子から降りて、僕の方を見た。「私、真囚夢来です」とまた小さな声で自己紹介をする。

「お兄ちゃんと区別できないと思いますから、名前で呼んでください。夏架さんと同じように。人殺しさん」

　その「人殺しさん」には、どこか愛着と甘美な響きがあった。だったら僕は人殺しでもいいのかもしれないと、そんな事を少し思った。

　紙透さんを見ると、相変わらず不機嫌そうに顔をしかめている。夢来ちゃんみたいにちょっとは笑ったらいいのに。そんな余計なお世話を思った。

「それで、話ってなんですか？」

　音楽室にある椅子に腰掛けながら、夢来ちゃんは訊ねる。僕は少し迷って、夢来ちゃんの隣に座る事にした。彼女の小さな声が聞き取れるように。

「〝幸福の唄〟って、知ってる？」

　一応、少し神妙な顔を作って訊ねてみる。夢来ちゃんは「話だけは聞いた事があります」と言った。

「夏架さんが創ってたらしい曲。夏架さんが全人類を幸福にする為に創った曲、ですよね」

　僕はそれに頷く。

「その曲について、夢来ちゃんにお願いがあるんだ。彼女の、紙透さんの〝幸福の唄〟を完成させる手伝いをして欲しい」

　単刀直入に言った。ガラスみたいに純粋な彼女には、その伝え方が一番だと思ったから。

　夢来ちゃんは真顔のまま下を見る。何を考えているのか、あるいは何も考えていないのか。よく分からなかった。

「完成っていうのは、具体的にどうしたいんですか？」

　夢来ちゃんに訊ねられ、僕は答えに迷った。隣で話を聴いていた紙透さんに目をやる。意図を察したらしい彼女はすぐに答えてくれた。

「もうすぐで、夢来ちゃんの通っているピアノ教室のコンサートがあります。かつて私も通っていた教室です。そこで、完成させた〝幸福の唄〟を披露したい。それが私の願いです」

　僕はその言葉を、「紙透さん本人から聞いた事があるんだけど」という前提を加えてそっくりそのまま話した。すると夢来ちゃんは呆気ないくらいすぐに「分かりました」と納得した。

「私にできる事なら、やってみます」

　夢来ちゃんはやっぱり無表情で言った。僕はそれに違和感を覚える。いや、正確には昨日家を尋ねた時から感じていたものだった。

「あのさ、一つ訊きたいんだけど」

　僕が口を開くと、夢来ちゃんは真顔のまま視線だけをこちらに向けた。「もし気を悪くしたらごめん」とも付け加える。

「君が言う通り、僕は紙透さんを殺した人殺しかもしれない。なのに、そんな僕と一緒にいて、何も思わないの？」

　悲しくないの？　とは言わなかった。というより言えなかった。

　真囚君が紙透さんに取り付かれ、僕に復讐を果たそうとしていたみたいに。大切な人を殺した目の敵がそこにいるのに、夢来ちゃんはただ静かだった。それが少し不気味ですらあった。

　夢来ちゃんはまた下を向き、そして小さく「分かりません」と言った。

「夏架さんが大切な人だったのは、多分そうです。私に優しくピアノを教えてくれました。でも、夏架さんが死んで、悲しいかどうかも自分には分からないんです。名執さんに何か復讐をしてやろうとか、今は思いません」

　紙透さんは、小さく語る夢来ちゃんをただ黙って見ていた。多分、紙透さんがピアノを教えている時からこういう子だったのだろう。

「私には何も無いんです。悲しいとか嬉しいとか、正しいとか間違ってるとか、幸福とか不幸とか。そういうものを感知できるセンサーみたいなものが無いんです」

「じゃあ僕の、というか紙透さんの手伝いをしてくれるのはどうして？」

「それも、分かりません。ただ、大切な人がやろうとしていた事が途中で終わってしまったら、それを引き継ぐ必要がある。大抵、フィクションの世界はそうやって廻ってます」

「いつか、私なりの答えが見つかるといいんですけど」。夢来ちゃんは他人事のように言った。そんな事、ちっとも思ってないような顔をして。

＊　　＊　　＊　　＊　　＊

　それから僕らは、充分過ぎるほどの時間を共有した。作曲とはそのくらい、繊細なものだから。夢来ちゃんは紙透さんの言葉を代弁した僕と、曲の完成を手伝ってくれた。

　紙透さんが何か言い、僕がそれを伝える。夢来ちゃんは意見を言いながら、試しにピアノで弾いてみる。それに対してまた紙透さんが何かを言う。〝シ〟の音があまりにも多いから、絶対音感なんて持っていなかったのに、その音だけはなんとなく分かるようになってしまった。

　出来上がったものが良いものなのか悪いものなのか、正直なところ僕には分からない。でも、紙透さんは満足しているみたいだし、これで良かったのだろうと何となく思うようにしている。

「答えは見つかった？」

　完成した〝新・幸福の唄〟の楽譜をまとめながら、夢来ちゃんに訊ねてみる。夢来ちゃんと紙透さんが同時にこちらを向く。「何の話ですか？」と言ったのは夢来ちゃんだけだった。

「前に言ってた、夢来ちゃんなりの答え」

　その言葉で意味が分かったらしく、彼女は思い出したように口を半開きにした。しばらくその表情のままでじっと動かなかったが、また電源が付いたように「多分、分かりました」と言った。

「でもまだ、名執さんには言いません」

「まだって、どうして」

「信頼が無いから」

　そう言ったのは夢来ちゃんじゃない。紙透さんだ。僕が「信頼が無いから？」と確かめるように訊ねると、「ある意味ではそうです」という答えが返ってきた。

「名執さんは、夏架さんについてどう思いますか？」

　突拍子もない質問に、僕は眉をひそめる。同じ表情をした紙透さんと目が合って、紙透さんは更に苛立ったように舌打ちをした。

「腹が立つ。あと、いつも何かに腹を立ててる」

「私の知ってる夏架さんは優しい人でしたけど」

「夢来ちゃんと貴方に取る態度が同じなわけないじゃないですか」

　そりゃあそうかと少し納得した。彼女が他の人間と同じように僕と接していたら、この狭い学校はもっとシンプルなままだった。

「私が訊きたいのは、夏架さんが言っていた『全人類を幸せにする』っていう発言についてです」

「……僕が、それについてどう思うかって事？」

　夢来ちゃんは深く頷いた。質問の意図は分からないけど、ここで答えない事には何も始まらないのだろう。僕は少しだけ考え、正直に話してみる事にした。以前に、紙透さん本人に話したように。

「多分だけど、僕は紙透さんと逆で、不幸になりたい人間なんだと思う」

　何も言わず、表情も変えない。夢来ちゃんはただじっと僕の顔を見ている。それが話の続きを促しているのかどうかも分からなかった。

「僕は休みの日が好きだけど、休みの日になるのは好きじゃない。休みが始まると、結局は休みが終わっていくまでの時間をじわじわと身に刻まなきゃいけないから。好きな食べ物とか飲み物でも同じなんだ。それが好きなのに、それを口にした瞬間、あとどのくらいで無くなってしまうんだろうって考える。つまり、幸福を手にしてしまえば、もうそれ以上は何も得られない」

　未だ真顔を浮かべる彼女に、「分かる？」と訊ねてみる。夢来ちゃんはまた深く頷いた。

「あと単純に、幸福に手を伸ばすっていう行為が馬鹿らしく思えてる。貶すような言い方になるけど、紙透さんは『全人類を幸福にする』っていう夢を叶える為に、必死に努力してきた。でも結局彼女は死んだ。今まで夢の為に費やしてきた時間と労力が全部無駄になったんだよ」

　紙透さんが、じっとこちらを見る。最近になって分かった事だけど、彼女は常々僕に対して苛立ちと怒りを感じているが、本気で怒っている時はただ睨むだけだ。そこに何の他意もなく、生き物ではなくてただ物を見るような目でじっと見つめる。

「僕にはそう見えるんだから仕方ないんだ。何かを掴む為の必死な努力も、どこか遠くへ行く為の準備も。無駄とは言わない。でも、結局夢なんて叶わない事の方が多い。何かを得ようとするから、人はいらない成長痛に顔を歪ませるんだよ。どうして今立ってる場所を肯定してやれないんだろう。どうして今の自分を否定するんだろう。そうやってどこかへ足を進めようとするから、いらない痛みだって手にしてしまうんだ」

　半ば苛立ちながら、僕は言っていた。それは夢来ちゃんへ向けた言葉というより、ただ紙透さんを否定する為だけの言葉だった。不幸を否定するな。それで満足してる僕がここにいるんだから。程々で生きたい人間だっているんだから。そう言いたかった。

「……つまり、名執さんは幸福が嫌い、と」

「不幸にはいい事もあるよ。不幸にいればそれだけ、幸福が相対的に輝いて見える。ただご飯を食べるより、極限までお腹が空いた時に食べる方が美味しく感じるでしょ？　考え方としてはそんな感じ」

　少しムキになっていた自分に気が付き、僕はそれを取っ払うように笑いかけた。夢来ちゃんは「分かりました」とまた無感情に言った。

「どうしてこんな話が聞きたいのか分からないけど、夢来ちゃんの話も聞かせてくれないかな」

「何の話ですか」

「いや、ほら、どうして〝幸福の唄〟の完成を手伝ってくれたのかっていう」

　僕の言葉に彼女は「ああ、そうでした」と何でもないように言った。彼女にはどこかおっとりしている部分もあるらしい。

「今の話を聞いて思いました。やっぱり、名執さんには教えません」

　夢来ちゃんの言葉に僕は少し驚いて、「どうして？」と訊ねていた。

「やっぱり信頼が無いから？」

「それも多少あるかもしれません」

　集めた〝新・幸福の唄〟の楽譜をファイルにまとめる。その時、帰宅時刻を知らせる学校のチャイムが鳴った。休日用に鳴らされるものだから、いつもより少し早めの時間帯だ。

「明日、またここに来ます。それまでに考えてみてください。理由が分かったら、私も話をしますから」

　そして「さよなら」とだけ言い残すと、彼女は音楽室を後にした。

「どうにかしてくださいよ」

「何がだよ」

　人気のない駅構内。僕は自分が乗る電車を待つ為、いくつか連続して並ぶ椅子の一番端に座っていた。五つ分ほどの距離を空けて、同じく一番端に座る紙透さんが溜め息を吐く。掲示板に張られている張り紙の中に、夏祭りに関するポスターがあったのが目に入った。

「何で付いてくるんだよ」

「貴方がちゃんとしなきゃ、夢来ちゃんの話を何も聞けないじゃないですか」

「君には分かる？　夢来ちゃんが何を言いたいのか」

「おそらくですが」

「じゃあ教えてくれればいいだろ」

「馬鹿ですか、自分で気付かなきゃ何の意味も無いでしょう」

　電光掲示板に流れる文字は、電車が到着するまで二十分ほどと知らせている。そう言えば、夢来ちゃんは電車に乗って帰ったのだろうか。真囚君は電車に乗ってたみたいだけど。

「あれ、名執君」

　ふと、駅の入り口の方から名前を呼ばれた。声のした方に顔を向けると、私服姿の蔑白さんが立っている。僕はそれにまた「ああ、うん」みたいな曖昧な返事をした。

「なんで制服着てるの？」

「学校に行ってたから。でも外出する時は大概制服だよ」

「なんで？」

「おしゃれとか苦手だからかな。制服って何かと楽でしょ」

「もったいない。若いうちにオシャレしとかないと損だよ」

「私みたいに」と言いながら、蔑白さんは真ん中の椅子に座った。僕、蔑白さん、紙透さんの順番に、丁度等間隔で並ぶ形になる。

　蔑白さんは、シンプルな深い藍色のシャツワンピースに身を包んでいた。そのシンプルさは、彼女をいつもより大人びたものにさせているし、いつもより可愛げにもさせている。

「友達と買い物してきたの。この服もそのまま着ちゃった」

「じゃあ化粧してるのも買い物で？」

　僕が訊ねると、蔑白さんは一瞬驚いたように目を開いて動きを止める。なんだろう、考えなしに発言し過ぎただろうか。もしかすると女子にとっては触れて欲しくない部分かもしれない。女子じゃなければ化粧もしない僕には何も分からない。

「化粧してるの、分かる？」

「え、うん。いつもより可愛い感じがする。何となくだけど」

「そっか」

　蔑白さんは少しはにかんだような笑顔を見せる。早くこの会話を終わらせたかった。

「友達が『夕未も一回くらいやっとけ』って言うから仕方なくね。私は化粧なんて無意味だと思ってるから、普段はしないんだけど」

　化粧をしなくてもいい容姿だからだろう。言葉には出さなかったけど、そう思った。

「似合ってると思うよ」

　会話の区切りとして、僕はそう言った。それで彼女が「ありがとう」と笑って言うのも知っていた。

　僕が蔑白さんと話をしたくない理由はもう一つある。できればこのまま、電車が来るのを待つか蔑白さんが立ち去ってくれればよかったのだけど、先に彼女がその話を口にしてしまった。

「あのさ、この前の話だけど」

　僕はあの日、結局なんて言ったんだっけ。好きだとかそんな事を言われて、蔑白さんが昔に約束をしたあの女の子と知って。どうやってあの場を後にしたんだっけ。

「僕、返事したっけ」

「覚えてないの？　サイテー」

　蔑白さんはケラケラと笑った。僕もそれに愛想笑いをしようとしたが、少し考えてやっぱり止めた。

「まあ、返事は無くても分かってるようなものだけどさ」

「そう？」

「だって、名執君のタイプって自分なんかを好きにならないような子なんでしょ？　馬鹿じゃん」

　それは覚えてる。そんな事を言った記憶がある。

　蔑白さんは浮かべていた薄い笑顔を戻し、真剣な目つきをする。そして口を開いて小さく言った。

「どうして私じゃ駄目なの？」

「蔑白さんが駄目なんて、そんな事言ってないだろ」

「言ってるようなものじゃん」

　僕は迷い、もう洗いざらい話してしまう事にした。とは言っても、前に一度話した事の繰り返しに近いのだけど。

「僕なんかを好きになる人間がいていいはずがない。僕が人間に好かれるなんて、そんなのは」

「幸福だから、避けてるの？」

　少し首を傾げながらも小さく頷く。自分でもよく分かっていないけど、多分そういう事なのだろう。

「仮に本当だとして、蔑白さんのそれは不幸だよ。馬鹿みたいだから止めといた方がいい」

「どういう意味」

「分かるだろ。僕がどういう人間か分かってて、それでもなんて」

「いや分かんないんだけど」

　蔑白さんは少し苛立ちながら話していたらしい。僕には彼女が苛立つ意味が分からなかった。だって、形としてはもう僕は彼女の好意を断ったのだ。これ以上何を求めているのだろう。

「私はね、フラれたとかそういう事はどうでもいいんだよ。私が腹を立ててるのは、君が私を否定してるところだよ」

「否定って、どこを」

「前も言ったでしょ。君は、私の幸福を否定してるの。君を好きになってる事が不幸だって、私は可哀想なやつだって、勝手に決めつけてるでしょ。それが腹立しくて、凄く嫌」

　蔑白さんは立ち上がる。駅構内に通る風が、彼女のシャツワンピースを優しくなびかせる。

「きっかけは確かにピアノだよ。それも好き。でも、ちゃんと名執君が好きだよ。私はそれを不幸には思わない。名執君が好きな事が、確かに幸せなの」

「私をフるなら、まずはそれを受け入れて、それからちゃんとフッて」と、蔑白さんは改札へ向かった。ざらついたアナウンスが響くだけの、静かな空気が流れる。

「全部言ってくれましたね」

　紙透さんが椅子に座ったまま、どこか遠くを見つめながら呟いた。返事をするのも億劫で、僕は何も言わなかった。

「つまり、そういう事ですよ」

「要約しろって前にも言っただろ」

「貴方は矛盾してるんですよ」

　僕は横目に彼女を睨む。彼女は目を合わせた後、「望み通り、要約してあげます」と静かに前を向いた。

「貴方は不幸になりたいと言う。幸福になんかなりたくないと言う。何度も言うように、私はそんな貴方が嫌いです。でも、否定はしませんでした。受け入れたわけでもないですけど」

　そうだっただろうか。割と否定された気がするけど。

　でも、思い返してみると、確かに何となくそんな感じはした。嫌悪は何度も示されたが、僕の在り方や生き方を否定したわけじゃなかったのかもしれない。

「でも貴方は、私をはっきりと否定しています。幸福を否定しています。それが矛盾なんですよ。自分が少数派だと自覚していて、周りには自分を認めて欲しいと思う一方で、多数派は絶対に認めない。気持ち悪い」

　そう言いながら彼女はもう一度こちらを見て、僕の顔を伺った。その時僕がどんな表情をしていたのか、僕には分からない。でも、彼女は僕を見て浅い息をついた。「やっと気付きましたか」「しょうがないですね」とでも言いたげな、哀れみを含んだものだった。

「名執君って、死にたがる側の人間ですか？」

「……別に、生きたいとは思ってないけど、死にたいわけでもない」

「それと同じですよ。生きたい人間は死にたい人間を否定してはいけないし、死にたい人間は生きたい人間を否定してはいけない」

「だって、生まれたくて生まれてくる人間なんていないじゃないですか」と、どこか愚痴を零すように言った。

　人は誰しも、望まぬ生を与えられる。そこから生きたい人間になるか、死にたい人間になるか。その思想は人生経験によるものなのだろう。「生きてきてよかった」と生きていくのは結構な事だと思うし、「自分に生きる事は向いてなかったみたい」と言って死ぬのも別にいいなと、そんな風に思う。

「生と死は、本当の意味で平等です。どちらも不干渉であるべきだし、干渉するなら同じ分量であるべきです。生きるのに理由は求めないくせに、死ぬ時だけ『どうして死ぬんだ』なんて、おかしいと思いませんか」

「また極端な話だね」

　でも、確かにその通りなのだろう。紙透さんが死んで、「どうして」という言葉が聞き飽きるほどに宙を舞っていた。そんなに自殺をした理由が気になるのだろうかと、少し気持ちが悪かった。

　だけど、本当は違うのだ。誰も、紙透さんの自殺に興味なんか無い。自殺した理由なんてどうでもいい。日常に退屈したところに転がってきた非現実に興味が湧いただけだ。「どうして」という言葉を理由に、それについて触れる為の免罪符が欲しかっただけだ。

「夢来ちゃんは、そんな事が言いたかったの？」

「これはあくまで例え話です。私が言いたいのは『否定するな』って事です」

　紙透さんは立ち上がって、僕の目の前に立った。ただ強く在る瞳で僕を見下ろし、その奥にある感情を僕にぶつけようとする。

「蔑白さんと同じです。私の幸福を否定しないでください。私は努力を無駄にする気なんて毛頭ないし、今だって全人類を幸福するつもりでいます。その為に必要な痛みなら、どんなものだって受け入れる。何の苦労もしたくない貴方とは違うんです」

「……そんな話をする為に、ここまで付いてきたの？」

「そうじゃなきゃ、脳みその無い貴方は何も気づかないままだったでしょう。私は夢来ちゃんの話が聞きたかっただけです」

　紙透さんはそれだけ早口に言うと、駅の出口へと向かおうとする。きっと音楽室に帰るのだろう。そんな彼女の背中に、僕は一つだけ言葉をかけた。

「君は、それでいいの？」

　そう言うと、彼女はぴたりと足を止める。こちらを振り向かないまま、「何の話ですか」とだけ言った。

「君の大層な努力のおかげで、全人類が幸福になるかもしれない。その可能性はゼロじゃないし否定はしない。でも、その幸福の中に、君があの曲を届けたい人の中に、君自身はいるの？　その先で、君は幸福になれるの？」

　また、駅に人が入ってきた。男女のカップルらしき二人組だった。女の方が甘ったるい声で何かを言い、男がそれに何かを言う。紙透さんはその間黙っていたが、二人の声が聞こえなくなった後で、ようやく口を開いた。

「私は、幸福なんです。誰が何と言おうと、紙透夏架という存在が幸福の象徴なんです」

　これ以上は、踏み込んではいけない。直感的に思う。彼女に対してそんな事を思ったのは、初めてだった。

　遠くなる彼女の背中を眺めながら、漠然と思う。彼女の「幸福」とは、一種の強迫観念だ。そうなるべきなのだと、強く思い込んでいる。

　彼女が死んだ理由と、彼女が僕を嫌う理由。その理由もきっとそこにある。根拠はないけど、強く確信した。

＊　　＊　　＊　　＊　　＊

　翌日の日曜になって、僕はまた音楽室を訪れる為、古臭い校舎の廊下を歩いていた。昨日とは違い、未だピアノの音色は聞こえない。一人分の足音だけが小さく響いている。ひっそりとした空気感は、廃墟を歩くのと似ていた。

　そうやって音楽室の前に着き、ドアを開けようと取っ手に手をかけた時だった。教室の中から、ピアノの音色が聞こえてきた。〝シ〟の音がある。

　静かに扉を開けると、ピアノ椅子に座った夢来ちゃんがゆっくりと、あまりにも綺麗過ぎる旋律を奏でている。間違いなく、〝幸福の唄〟だった。

　傍で夢来ちゃんを見ていた紙透さんに近付き、ピアノの邪魔にならないようそっと耳打ちをする。

「もう弾けるようになったの？　何時くらいに来た？」

「音楽室に来たのは、三十分ほど前です」

　たった三十分の練習で、ここまでの完成度を。これが、彼女が天才である所以。そう言いたかったのだが、紙透さんは続けて「ですが」と言った。

「来てすぐに、机に寝そべって眠ってしまいました。それからしばらく経って、ようやく起きたのでピアノ椅子に座り、〝幸福の唄〟を弾き始めた次第です」

「……つまり、この曲を弾いたのは」

「今この瞬間が初めてです。彼女の人生でも、世界的に見ても」

　譜面台に楽譜はない。彼女は、全てを暗記している。

　化け物だと、率直に思った。しっかりと見た事もない楽譜を、初めてで完璧に演奏してしまう。そんな人間がいるのだろうか。

「君にできる？」

「自信はありません」

　僕も紙透さんも、完成された〝幸福の唄〟を聴くのは、その瞬間が初めてだった。

　これは断言してもいいけど、僕と紙透さんは全く同じ事を思っていた。つまり、その曲には、〝幸福の唄〟だと認識できるような美しさとか強さとか救いとか、何か絶対的なものが確かにあった。そういうものを全て過剰摂取してしまった。

　どのくらいそうしていたか分からない。いつの間にか演奏は鳴り止み、ピアノ椅子から夢来ちゃんがこちらをじっと見つめている。

「……どうでしたか？」

　彼女の言葉に、僕は何を言おうか迷ってしまった。何を言っても蛇足になると感じた。多分、宇宙のどんな言語を以てしてもその曲を表す言葉はないのだと思う。だから結局、こう言うしかないのだ。

「この曲は、〝幸福の唄〟なんだ」

　僕の言葉に、夢来ちゃんは「そうだと思います」と言った。ピアノ椅子から降りた彼女は、またこちらを見て口を開く。

「答えは見つかりましたか？」

　未だ演奏の余韻が抜けきらず、少し気の抜けた僕は「何の話？」と訊ねる。夢来ちゃんはそれに「昨日の話です」と念を押すように言った。

「私が名執さんに話をしない理由、あるいは、不信感を抱いている理由」

「人殺しだから？」

「それもあるかもしれませんけどね」

　夢来ちゃんはまた、教室にある椅子の一つに腰をかける。僕もその隣に座った。

　それで夢来ちゃんは、じっと僕の顔を見つめた。僕の言葉を待っているらしい。どこから話そうかと少し言葉を推敲し、まずは一番大切な事から口にする事にした。

「正直に言うと、僕はやっぱり紙透さんみたいな生き方は納得できない」

　家に帰って、ずっと考えていた。僕みたいな人間でも、彼女のようになれるだろうかと。理解はできるのだ。人間は普通、そういう風に作られていると思うから。でもやっぱり、それを易々と受け入れる事はできなかった。

「僕はどうしようもない人間だと思う。こんな生き方しか模索できなくて、一生幸せになんかなれないんだろうなとも思う」

　夢来ちゃんはいつもの仏頂面で僕の話を聞いている。傍で話を聞く紙透さんは、やっぱりいつもの不機嫌そうな顔をしている。

「だけど、確かに否定する必要はないのかもしれない。お互いに何も強要しなければいいだけなんだ。僕は勝手に不幸になるから、そっちはそっちで勝手に幸せになってろって、そう思う事はできる」

　そこまで言うと、紙透さんが溜め息を吐いた。夢来ちゃんは「それでいいと思います」と少し微笑んで言った。

「肯定も否定もなくていい。私が価値のある人間かどうかなんてどうでもいいように」

　それから夢来ちゃんは、少しだけ自分の話をした。僕と紙透さんは黙って彼女の話に耳を傾けていた。

「私は人間という存在が根本的に嫌いです。ある時、少しピアノを弾けるというだけで、何かしらの大役を任される事がありました。でも、本番では人の目があるとどうしても失敗してしまうんです。否定の目で見られて、失敗して、案の定否定の言葉を浴びさせられる。そういう事を幾度と繰り返していくうち、大衆の目に苦手意識が刷り込まれました。一人では電車にも乗れない始末です。どれだけ遠回りになってでも、なるべく人のいない方へ少ない方へ。そうやって逃げ続けています。学校に行かないのもそういう事です。眠りに就く度、このまま静かに死ねたらいいのにって思います。朝起きて、いつもの天井が目に入る事に絶望します」

「逃げてもいい」、なんて言葉が大嫌いだ。あまりに無責任だから。その言葉を頼って逃げ続けて、手遅れと気付いた時に誰が責任を取れるだろう。時として、「逃げるな」と強く言った方がいい事もある。

　夢来ちゃんは自分でその選択をして、そして、自分で後悔している。自責の念に囚われ続けている。いつまでも自分という生き物を好きになれないのかもしれない。

「なら、どうしてコンサートに出ようと思ったの？」

　ずっと気になっていた本題だった。僕みたいな人殺しの言葉に耳を貸した理由。人の目に晒され続けるであろうコンサートに出る理由。夢来ちゃんの根本にあるものは、一体何なのか。

「夏架さんと同じように、こんな私にも夢があるんです」

　開いていた窓から、優しい夏風が吹き込む。夢来ちゃんの長い髪が、それに優しく流される。雲の切れ目から覗く日の光が、彼女の背で燦燦と輝く。

「たった一度でいい。生きてきてよかったと、心の底から思ってみたい。そうすれば私は、何の未練もなく死ぬ事ができる」

「……コンサートに出る事が、それなの？」

　そう訊ねると、夢来ちゃんは少し目を伏せて「分かりません。もしかすると違うかもしれない」と小さな声で言った。

「それでも、夏架さんが成し遂げたかったように、全人類を幸福にするような曲を弾けたら。その時は、『生きてきてよかった』と思う理由には充分だと思いませんか？」

　夢来ちゃんは目を細めて、小さな口の口角を上げて笑った。僕が初めて見る、どこにでもいるような女子中学生みたいな、無邪気な笑顔だった。

「いいと思う。幸せなまま死ねるなら、それ以上の事はない」

「はい。私もそう思います」

「頑張りますね」と言って、夢来ちゃんはまたピアノに向かい、練習を再開する。僕からしてみれば、これ以上ないくらいに完璧ではあるのだけど。

「私、貴方の事嫌いですからね」

　隣にいた紙透さんが呟く。僕はピアノの音にかき消されるくらい小さく、だけど紙透さんの耳には届くくらいの声量で「今更？」と言った。

「無責任な事を言わないでください。夢来ちゃんは、本当に死ぬかもしれないですよ。私と同じ末路を迎えるかもしれない」

「君とは違う。幸せを自分の中に閉じ込めたまま、どこまでも綺麗に終われるんだ。夢を途中で投げ出した君とは真逆だ」

「そういう事を言ってるんじゃなくて」

「『否定はしない』」

　僕が言うと、紙透さんは言葉を止める。二人の言う、「否定しない」とはそういう事なのだ。

「彼女がどんな末路を迎えようと、否定しないと誓った僕らが目を背けちゃ駄目だろ。誰も綺麗な死なんて受け入れないかもしれない。だけど、せめて僕らだけは、否定しちゃいけないんだ」

　夢来ちゃんが望んだものなら、僕はそれを見届けてあげよう。せめて、彼女が安らかに眠れるように。

「もう僕は君を否定しない。誰かを幸せにしたいなら、その邪魔もしない。だから、僕の邪魔もするな。もちろん、夢来ちゃんの事も」

　それきり、紙透さんは何も言わなかった。受け入れたのか、受け入れられないのか。僕には分からない。

　コンサートの日はすぐそこまで近付いている。彼女が幸せなまま死にたいと言うなら、せめて思い出の一つでも作ってやろう。夢来ちゃんの笑顔が見れたら、紙透さんも納得するかもしれない。そんな事を思った。

　練習がひと段落したところで、僕は「夢来ちゃん」と声をかける。

「夏祭り、行ってみない？」

* ＊　　＊　　＊　　＊

その日は、晴天の名残を残した夜だった。未だ湿度を多分に含む熱気が籠っていて、夜風がそれをさらってしまうように優しく吹いている。

雲の一つもない夜空には、怖いくらいの星空が瞬いていた。深い深い黒は、ずっと見ていると吞み込まれてしまいそうになる。それも悪くないかもしれないと思った。

「さて、どこに行こうか」

「どこにも行きたくないです」

　即答だった。制服姿のままの夢来ちゃんは、屋台の並ぶ会場の数十メートル前で立ち止まってしまう。

「ちょっと、あんまり無理させないでくださいよ」

「まあ、そうだよね」

　それは紙透さんへの返事のつもりだったのだが、夢来ちゃんはそれを自分に向けられた言葉だと思ったらしく、「ごめんなさい」と呟いた。

「せっかく誘ってくれたのに、何もできなくて」

「いや、僕も人込みは苦手だから、気持ちは分かるよ」

　もしかすると、人嫌いを克服できるかもしれない。そんな期待を抱きながら来てくれたのだろう。克服できるかどうかはどうでもいい。ただ、「自分は何もできないままだった」と、自分の事をもっと嫌ってしまったまま帰らせるのは、少しだけ残酷だと思った。

「とりあえず、夢来ちゃんはどこかで待ってて。僕が適当に食べ物とか買って持ってくるから。怖いかもしれないけど、きっと紙透さんが見ててくれる」

　夢来ちゃんは当然、僕の言葉に「何の話ですか」と少しムキになって言った。紙透さんは僕の意図を汲み取ったらしく、「分かりましたよ」と諦めたように溜め息交じりに言った。

「夢来ちゃんに何かあったら、私が名執君に知らせる。そういう事ですか」

　僕は二人の言葉に同時に答える形で、「きっと大丈夫」なんて、鳥肌が立つような言葉を吐いた。

「全部すり抜けるとは言っても、私だって怖いんですけどね」

　紙透さんが文句を言うのを聞き流して、「じゃあ、すぐ戻ってくるから」と会場に向かおうとした、その時だった。

「あの、もしかすると大丈夫かもしれません」

　突然、夢来ちゃんが言った。僕と紙透さんが同時に「え？」と夢来ちゃんを見る。

「私、人が多い場所ではイヤホンを付けながら過ごすんです。曲に集中すると、人の視線を紛らわせるような気がして」

「……つまり？」

「つまり、何か紛らわせるような事があればいいなって」

　夢来ちゃんの意図が読み取れず、僕は首を傾げる。

「つまり、イヤホンを付けて歩くって事？」

「いえ、今日はイヤホンは持ってきてません」

「じゃあどうしたいの？」

「……そうですね。例えば、手を繋ぐとか」

　真っ先に、紙透さんが「ひ」と悲鳴に近い声を上げた。僕はどうしていいか分からず、「それでいいの？」と訊ねてみる。

「気が紛れるなら、聴覚でも触覚でも何でもいいんだと思います。凄く臭いものを嗅ぐとかでも」

「そうじゃなくて、僕なんかと手を繋いでもいいの？」

「……名執さんが嫌なら、いいんですけど」

「まさか。嫌じゃないよ」

　でもそれって、余計に人の視線を集めるんじゃない？　僕がそう言う前に、夢来ちゃんは僕の手を取った。これ、大丈夫だろうか。中学生と高校生だぞ。

「ただの妹に見えますから。多分大丈夫ですよ」

「……今度こそ真囚君に殺されるような気がする」

「名執君、離してください。今すぐ。マジで」

　今手を離したら、傷付くのは夢来ちゃんだ。そんな事も分からないのか。まさか口に出せるはずもないから、紙透さんの言葉は全部無視した。

「行きましょう」

　夢来ちゃんが覚悟を決めたように言う。何も、否定しない。僕は「無理はしないでね」とだけ言って、そのまま歩き出した。

　僕と夢来ちゃんは手を繋いだまま、人込みの中を歩いた。後ろから聞こえる紙透さんの声がうるさかった。だけど、僕はそんな事より、ずっと俯いたまま歩く夢来ちゃんの事が心配だった。彼女の傷一つない手が、ずっと震えていたから。

　僕が何か買う時、財布を開く為にどうしても両手を使わないといけない。その時だけは仕方なく、僕の袖を掴んでいた。その震えが紙透さんの目に入ったらしく、屋台の並ぶ会場を歩き終える頃、彼女は何も言わなくなっていた。

　右手に持った袋が食べ物でいっぱいになった時、会場から少し離れた場所に神社があるのを見つけた。誰もいなさそうだったから、夢来ちゃんの手を取ってそこに向かう事にする。

「どうだった？」

「ちょっと、疲れたかもしれません」

「ちょっとには見えないけどね」

　石階段に夢来ちゃんを座らせ、袋からラムネを取り出し、蓋を開けて手渡す。珍しく、ビー玉を押し込んでも吹き零れなかった。

「まさかこんなに酷いとは思いませんでした。もう少しやれると思ってたのに」

「頑張ってたね。泣きそうな顔してたよ」

「そんな事言わないでください」

　袋から焼きそばのパックを取り出して、割り箸と一緒に手渡す。蓋を開くと、焼き焦がしたような香ばしい香りが僕らを包んだ。

「そう言えば、夏祭りって初めてかもしれません」

「本当に？　一回もないの？」

「もしかすると、記憶も無いくらい幼い頃はあったかもしれませんけど。でも、物心付いてからはそういう記憶はありません」

　つまり、物心が付く頃から、人の目や自分自身に苛まれてきたのだろう。夢来ちゃんは「人んちの焼きそばって感じがして美味しいです」と、誉め言葉なのかどうか分かりづらい事を言いながら麺を啜っていた。

「名執さんは何か無いんですか？」

　紅しょうがを口に放り込んだ時、夢来ちゃんに訊ねられた。甘辛いそれを咀嚼し、飲み下す。

「別に人んちっていうか、普通に店の味だと思うけど」

「いやそうじゃなくて、なんか、昔の思い出って」

「あ、そっちか」

　そう言われ僕は、少し昔の事を思い出してみた。僕の幼い頃の記憶というのは、いつも嫌な大人達が傍にいて、いい思い出というのがあまり無い。それこそ、あの女の子と約束をした事くらいだろうか。

　僕は「昔、ピアノやってた時の話なんだけどね」という切り出しで、あの夢の話をした。もちろん、蔑白さんの名前は伏せて。

「じゃあ、その約束の相手を探してるって事なんですか」

「探してる、というより、待ってる、かな。いつか彼女の手が、僕を救ってくれるって信じたいから。夢来ちゃんが『生きてきてよかった』と思って死にたいように、僕も『不幸でよかった』って思いながら救われたい願望がある」

「前に言ってた、『相対的に幸福が輝いて見える』ってやつですね」

「そうかも」

　僕と夢来ちゃんは石階段の同じ段に座っていた。紙透さんは僕らよりも少し下の段に座りながら、つまらなそうに、あるいは不満そうに、少し遠くの夏祭りの会場を眺めている。

「私の手はどうですか？」

「夢来ちゃんのはちょっと綺麗過ぎるよ。ガラス細工を扱うみたいな感じ」

「褒めてるんですか、ねそれ」

「綺麗って褒め言葉でしょ」

　焼きそばを同時に食べ終わり、ゴミを袋の中に入っていたもう一枚の袋に入れる。一枚余分に貰っていた分だ。食後のデザートみたいにラムネを飲む夢来ちゃんに、僕は言葉をかける。

「まだ何か食べる？」

「いえ、私はもう」

　お腹いっぱいです。多分、夢来ちゃんはそう言いかけた。

　言葉にしなかったのは、その時、彼女の目がある一点で止まったからだ。

　視線は夏祭りの会場にある。そこでは、寄せて返す人並でごった返している。夢来ちゃんが何を見ているのか、誰を見ているのか、僕には分からなかった。

「私、ちょっと、行かなきゃ」

　夢来ちゃんがそう言って立ち上がる。会場へ向かおうとする。

「名執君」

　僕の名を呼んだのは、紙透さんだ。分かってる。

　歩き出した夢来ちゃんの手を取り、僕は彼女を引き留めた。

「夢来ちゃん」

　どうしてこんな事をしたのか、自分でも分からなかった。

　否定してはいけない、それはよく知っている。この行動が間違っているのもよく分かっている。なのに、僕は夢来ちゃんの手を離せなかった。立ち去ろうとした夢来ちゃんの目が、言葉にならないほど悲しいものに見えたから。

「名執さん、大丈夫ですから」

　そう言って微笑む彼女の顔は、前に見せた無邪気なそれとは全くの別物だった。誰が見ても分かる、愛想笑いだった。そんな笑顔で、なのに、そんな事を言われたら、引き留められるはずがないじゃないか。

「……無理はしないで」

「分かってます」

　夢来ちゃんはまた笑い、僕の手から離れて、会場へと歩き出して行った。綺麗な手は、やっぱりまだ震えているというのに。

「いいんですか、行かせて」

「……行かせなきゃいけなかった。それは分かるだろ」

　僕はまた同じ場所に座る。僕の下に座る紙透さんが「どうしたんでしょう」と、少し不安げに呟いた。

「分からないけど、あんまりいい事じゃないのは分かる」

「ええ、そうでしょうね」

　それから少し無言の時間が続いて、僕らは黙って会場を見つめていた。その奥に消えていった夢来ちゃんの姿はもう見えない。

　会場からまた、何か香ばしい香りを運ぶ夜風が吹いてくる。ふと、僕はどうでもいい事を彼女に訊ねてみた。

「紙透さんって、匂いとか分かるの？」

「何の話ですか」

「ほら、風とかもすり抜けるみたいだから、匂いもすり抜けるのかなって」

　そう言うと、紙透さんがすんすんと、何かを嗅ぐように鼻から息を吸い込む。そしてすぐに顔をしかめた。

「まあ、薄々気付いてましたけど、死んでからは匂いとかないです」

「お腹が空くとかは？」

「美味しいものを見て食べたいな、とかは思いますけど、空腹は感じませんね」

「そっか、可哀想に」

「勝手な事言わないでください」

　紙透さんはまた苛立ったようにこちらを振り向いた。それを確認し、僕は袋からアメリカンドッグを取り出す。彼女に見せつけるようにして。

「こんなにも美味しいものを、君はもう食べられないんだ。そりゃあ不幸だね」

　サクサクとした衣にかぶりつく。音を鳴らして進んだ先に、ふわふわとしたホットケーキミックスの甘みが仄かに香る。紙透さんはそれを、ただじっと見ていた。

「美味しいよ」

　僕が嫌味を込めて言うと、紙透さんはついに立ち上がって僕の前に立った。さすがに怒っただろうか。何もできないとは言え、少し怖い。

「……食べる事はできなくても、感覚を味わう方法はあります」

　彼女はそう言って、僕と全く同じ場所に座った。つまり、以前ピアノを弾いた時と同じように、僕と綺麗に重なったのだ。

「無茶苦茶だ」

「他に方法は無いでしょう。貴方が焚き付けるのが悪いんです」

「逆に虚しくなるだけじゃないの？」

「いいから黙って早く食べてください」

「これ、気持ち悪くてあんまり好きじゃないんだけど」

　渋々僕がアメリカンドックを持った右手を上げると、彼女もそれに合わせて右手を上げる。口まで持ってきて、かぶりつき、咀嚼する。彼女が全く同じ動作をするのが分かる。

　視界に入る彼女の鼻や、咀嚼する度に動く彼女の頬、視界に入る長い髪、位置が少しズレた時に見える、彼女の半透明な肌。自分じゃない身体がこんなにも近い距離にあるのは、言葉にできないような気持ち悪さしかない。

「美味しい？」

「この世には無いような味がします」

「君にとってこの世ってあの世だろ」

「この世にいるんですからこの世はこの世ですよ」

「どうでもいい」

　またアメリカンドックにかぶりつく。紙透さんもそれを真似る。傍から見れば、ただ僕が黙って食事をしているようにしか見えないだろう。ふと夜空を見上げると、綺麗な月が一つ浮かんでいるのが目に入る。まるで寂しさの象徴みたいに優しい月だった。

「優しい月ですね。私みたい」

「それも幽霊ジョーク？」

　それからしばらくは「花火とかあるんですか」「多分」なんて、生産性も何もない会話をしていて、丁度その時だった。

　夢来ちゃんが、覚束ない足取りでゆっくりと帰ってきた。

「……ちょっと、遅くなりました」

　暗闇の中、会場に並ぶ提灯の煌びやかな遠い光が、僕らを薄っすらと照らしている。

　徐々に、徐々に、暗闇に慣れた視界が、夢来ちゃんの顔を映す。

　そして、見えてしまった。彼女の顔が、赤く腫れあがっている事に。明らかに、人為的な害が浮かんでいる事に。

「やっぱり」

　僕の口元から、彼女の声がした。

〝やっぱり〟？　やっぱりって、なんだよ。

「……どういう事だよ」

　誰に対して言ったのか、何に対しての言葉なのか。それは僕の口から自然と零れていた。

「説明しろよ」

　それは、紙透さんに向かって言ったつもりの言葉だった。でも当然、紙透さんの姿は誰にも見えていない。夢来ちゃんがまた悲しく笑って「何でもないですよ」と言った。

「ちょっと大きな蚊に刺されただけですから」

　確信した。紙透さんは多分、全てを知っている。夢来ちゃんに何が起きたのか、誰がこんな事をしたのか。

　なのに、彼女はずっと黙ったままだった。右手に食べかけのアメリカンドックを持ったままの体勢の僕と、ずっと重なったままだった。

「言ったでしょう。私はこれでいいんです。名執さんだけは、私を否定しないでください」

　小さく呟く夢来ちゃんの背で、夜空に向かって一直線に昇るものが見えた。

　やがてそれは、黒い夜の中に大きな花を咲かせる。一瞬の間があって、すぐに大気を震わせる轟音が鳴り響いた。

「もう、そんな時間なんですね」

　夢来ちゃんはそう言って、何でもないように僕の隣に腰をかけた。何度でも開花する火の花を、うっとりと見つめている。

「花火の音って、私が死んだ時の音とよく似てます」

　また、僕の口から彼女の声がする。

　半透明な顔越しに見える花火は、なんだかいつもより綺麗に見えた。夏の亡霊の特権だろうかと、そんな事を思う。

＊　　＊　　＊　　＊

　その日以来、夢来ちゃんと僕の間に会話は少なかった。というより、会話ができるほどの余裕が彼女になかった。それこそ取り付かれたように、ピアノだけを延々と弾き続けている。

「人の目があるんですから、私からすればどれだけ練習しても足りません」

「だからって平日まで学校に来て、もし見つかったらつまみ出される」

「ピアノが家に無いんです。だから、ここに来るしかない」

　そう言ってまた、〝幸福の唄〟を弾き始める。僕は「どういう意味？」という意図を込めて紙透さんに説明を求めた。

「夢来ちゃんの言う通りです。あの子の家にはなぜかピアノが無い。だから、あの子の通うピアノ教室に直接お邪魔して、私が色々と教えていました。前に言ったように私も通っていた場所なので、多少の融通なら効きました」

　夢来ちゃんが来た時にまだ青色だった空は、いつのまにか茜色に染まっている。窓の外から、放課後の生徒達の喧騒が遠く聞こえる。コンサートの本番は、明日だった。

　あの夏祭りで夢来ちゃんに何があったのか、一度だけ訊ねてみた事がある。でも結局、何も教えてくれなかった。だから、それ以上は踏み込んではいけないのだと悟って、以降は何も訊いていない。何かを知っているような素振りを見せた紙透さんでさえ、何も教えてくれなかった。そもそも、どうして紙透さんは「やっぱり」などと言ったのか。あれはまるで、夢来ちゃんがああなる事を予見していたような言葉だ。

　もう何度目か分からない、まるで機械のように正確無比な〝幸福の唄〟。どれだけ人を幸福にしようと、夢来ちゃん本人が幸福であるようには、僕には到底思えなかった。これでいいのかと、紙透さんに問いただしてみたかった。

　壁掛けの時計を見ると、もう帰宅時間をとっくに過ぎている。そろそろ教師が来てもおかしくない。曲が終わったのを聞き届けて、夢来ちゃんに声をかける。

「夢来ちゃん、もう終わらなきゃ」

「もう一回だけ、お願いします」

「無理。ここで見つかったら明日のコンサートにも出られなくなる」

「でも、私はまだ弾き足りない」

「いくら弾いても足りないくせに」

　分かる、などと簡単に言ってはいけないけど、それでも、彼女の考えている事は少し分かる。人の目があって、万全を期すに越したことはないのだ。例えそれがいき過ぎたものだとしても。何かが少しでも狂えば、その拍子に全て崩れてしまうと分かっているから。

「今日はもう帰ろう。今日はというか今日が最後だけど」

　僕が優しく言うと、夢来ちゃんは納得いかない様子で小さく頷いた。〝幸福の唄〟の楽譜を鞄にしまい、音楽室を出る。僕もその後ろを付いて行き、当たり前のようにここに居残る紙透さんを一瞥してから、扉を閉めた。

　廊下には誰の気配もない。当たり前だ。というかあったら困る。僕が女子中学生を連れ回していたら問題だ。

「緊張してる？」

　静かな廊下に、僕の声はよく響く。でも夢来ちゃんは響かないほど小さな声で「分かりません」と言った。

「想像もできないです。人前でピアノを弾くなんて初めてなので」

「初めてなんだ？」

「そんな事したら、私舞台で吐きますから」

「明日は吐かずに済むといいね」

　少し笑って言った。前を歩く彼女が「そうですね」と言ったのは聞こえたが、その表情は見えなかった。

　校舎を出て、僕は正門へ、夢来ちゃんは裏門へ向かう。裏門方面は人がいないからだ。いつもそこから出入りしている、らしい。

「じゃあ、今日はゆっくり休んで」

「はい。また明日です」

　お互いに手を振って、そうやって別々の帰路を歩く。

　正門はほぼ一直線上にあって、ぽつりと空に浮かぶ太陽が、僕の邪魔をするように眩しかった。視界を細め、ゆっくりと歩く。

　だから、最初は気付かなかった。もうほとんどの生徒が帰ったはずの正門に、人が立っている事に。ましてや、それが彼だなんて、ギリギリまで近付かないと分からなかった。

「おい」

　最初、僕は何でもないように通り過ぎた。無視したわけじゃない。陽が眩しくてずっと靴先だけを見ていただけだ。声をかけられて、ようやく僕は振り向いた。

「話がある」

　そう言って彼は、真囚君は、僕の家とは真逆の方向に歩き出す。僕が付いてくるのを疑いもせず、ただ前を向いて。僕は少し迷ったが、結局付いて行く事にした。話があるのは、僕も同じだったから。

　僕は幼い頃、ブランコが好きだった。一番振り切った時に一瞬だけ感じる、無重力のような感覚が、まるでこの世と断絶される瞬間のようで。もしかして死ぬ時には、こういう浮遊感を味わうのだろうかと思っていた。

「進路、決めたかよ」

　僕の右隣のブランコに腰掛ける、真囚君が訊ねる。僕は「まだ」と答えた。

「別に何でもいい。なるようになる」

「お前のそれは進路ってより末路の話だろ」

「かもね」

　上手い事言う、と思って少し笑った。彼は笑わなかった。

「大人って生き物になるのが想像できない」

「もう充分に大人だろ」

「嫌な話するなよ。そんな事が言いたくて僕を連れてきたの？」

「ある意味じゃそうだよ。嫌な大人の話がしたくて来た」

「君は大人が嫌いなんだね」

「どうだろうな。よく分かってない」

　溜め息を吐く。僕が何よりも嫌いな、多分幸福ってものよりも嫌いなものの話だ。

　真囚君は僕の言葉を待っていた。なんとなく、彼はこういう話が聞きたいんだろうな、というのが分かった。だから僕は、遠い日の記憶について語る事にした。

「僕の人生で一番古い記憶は、保育園で読んだ絵本の話なんだ」

　そこには、家族愛がいかに素晴らしく、尊いものであるかというのが馴染みやすい絵で書かれていた。それを読んだ僕が初めに思ったのは、「気持ち悪いな」という感想だった。人の支えがなきゃ生きられないとか、人間はなんて不充分で可哀想な生き物なんだろう。言葉にはできなくても、そういう感情が奥底にあった。

　それから本や漫画、映画やドラマ、そういうものを見る度、おかしいのは自分の方なのかもしれないと思い始めた。普通の親は理由も感情もなく子供を叩いたりしないし、暖かい晩御飯を用意して、何かどうでもいい会話をしながらそれを一緒に食べるらしい。僕にとっては別世界の話だった。

　四角い果物や野菜を作る為に、発達段階の実をケースに閉じ込めるように。幼い頃からあの絵本とは違う形で育ってきた僕は、ごく普通の常識や世界を知らなかった。どうしようという気も起きなかった。我慢していた、という言い方すら正解ではない。人が歩く時に足への負担を意識している感覚はないように、それが極々当たり前だったから。

　物心というものが付くような年齢になる頃、僕は近所のピアノ教室へと行かされた。今考えればこそ、あれはただの厄介払いだったのだろう。ただ、僕はそこでようやく世界の破滅者と出会った。あの女の子だ。あの女の子が、「不幸だ」「それは『可哀想』な事だ」と教えてくれた。

　おかげで親への猜疑心が生まれた。僕の何が、母親や父親をこうさせるのだろう。これが罰だとすれば、僕はどんな罪を犯したのだろう。考えても考えても理由は分からなくて、やっと「我慢」というものを自覚した。そうか、僕は不幸なのだ、と。

　それでも僕が何とかやっていけたのは、あのピアノ教室に通っていた事、そしてあの女の子の存在が大きい。あそこだけが唯一、僕が安らかな時間を過ごせる場所だった。ただピアノの事だけを考えていればよかった。

　親に勝手にピアノ教室を辞めさせられたた時、初めて反発心を覚えた。親に逆らった。もちろん、僕一人ではどうにもならなかった。我慢すべき事は増えていくばかりだった。

「前に、『自分にとっては何より大事なものでも、他の人間からすればどうだっていいんだ』って言ったのはそういう事だよ。覚えてる？」

「知らねえよ」

　それでも、なんとか僕が耐えられていたのは、女の子との約束があったからだ。これだけ不幸になれば、いつか気付いてくれる。四分音符のヒーローが来てくれる。あのボロボロの手で、僕を掬い取ってくれる。そう信じたかった。

　痣が服では隠し切れなくなってから、ようやく周囲の大人は異変を感じたらしかった。大人という生き物に対して、果てのないような嫌悪を覚えたのはその時だ。これまで僕を殴り続けた親以上に、今になって綺麗事を吐くような大人がどうしようもなく嫌いだった。

　それから少しの間だけ親戚の家に住み、高校生になってやっと一人暮らしを始めた。親戚は皆、優しくて生暖かくて、少しだけ、気持ち悪かった。

「どこにでもあるような話だよ」

「そうだな。在り来たりな『在り来たりじゃない話』だ」

　真囚君は大きな欠伸をする。つまらない話だと暗に言われた。陽はいつの間にか山に隠れかかっていて、空はほんの少し薄暗い。

「お前ってさ、嫌いなものの為なら何でもする？」

「限度はある。でも、学校のピアノを壊すくらいの事なら何とも思わない」

「だろうな」

　結局彼は、何の話がしたいのだろう。僕をこんなところまで連れてきて、僕のつまらない思い出話が聞きたかったのだろうか。

　真囚君を見ると、彼は一瞬だけ目を合わせた後で一つ息をついた。そしてようやく、口を開いて話をし始める。

「お前、夢来と夏祭り行ったらしいな」

　その言葉に僕は少し悩み、嘘をつく理由も見つからなかったから頷いた。手を繋いだとか夏祭りに行った理由とか、そもそもどうして夢来ちゃんと親交があるのか、とか。彼はそういう事は訊かなかった。その代わりに、こう言ったのだ。

「あいつ、殴られて帰ってきただろ。なんでだと思う？」

　端的に言えば、僕はその言葉に真っ先に腹が立った。そんなの、僕が知るわけがないだろ。

「蚊に刺されたって言ってたけど」

「害虫には変わりないのかもな」

「何が言いたいんだよ」

「お前の嫌いなものの話だよ」

　真囚君は鞄から煙草を取り出して、何でもないように火を点けた。僕がそれを邪険な目で見ていると、「いる？」と言われた。僕は何も言わなかった。

「あいつが通ってるピアノ教室、先生がスパルタっぽいんだよな」

　紫煙を吐き出しながら、彼は言った。ほろ苦い香りのする空気が僕らを包む。

「『っぽい』ってなんだよ」

「百パーセントとは言えないから。夢来本人が意地でも認めない。そんな事されてないって。だから辞めさせようにも無理なんだよ」

「無理やりにでも辞めさせればいいだろ。僕がそうだった」

「分かるだろ。あいつが何よりも嫌ってるのは『否定』なんだ。暴力とか辞めさせるとか、そういう話じゃないんだよ」

「じゃあ」

　じゃあ、何がしたいんだよ。そう言おうとして、やっぱり止めた。何がしたい、ではない。何もできないのだ。

「あいつはピアノが好きだ。学校には行かないのに、ピアノ教室には行くくらい。でも、俺らとしては当然そんな所辞めて欲しいわけで、精々家ではピアノから断絶した生活をさせるくらいしかないんだよ。逆効果かもしれないけど」

「夏祭りの時、夢来ちゃんは自分から歩いて行った。わざわざ、苦手なはずの人混みの中に」

「そういう風に躾けられてるんじゃねぇの。見かけたら挨拶しろ、みたいな。殴られた理由は知らねぇよ。『挨拶が遅い』かもしれないし、『こんなところで遊ばず練習しろ』かもしれない」

「他人事みたいに言うんだな」

「そう見えるか？」

「そうにしか見えない」

　真囚君は鼻で笑った。また深く、息を吐いて煙を吹かす。

「要約しろよ。何で僕にそんな話をしたのか」

「さっきのお前の話を聞いて確信したから。今の夢来は、お前によく似てるよ」

　意味が分からなくて、僕は眉間に皺を寄せる。

「夢来は、自分の事を何も無い人間だって言ってる。悲しいとか嬉しいとか、正しいとか間違ってるとか、幸福とか不幸とか。その判別がつかないって。ただピアノさえ弾ける人生ならそれでいいのかもな。ほら、ピアノ教室に通う前のお前と同じだろ？」

　全くの別物だけど、少し似ていると思ったのも確かだった。誰が見ても「可哀想」なのに、渦中にいる本人だけがその言葉に首を傾げてしまう。夢来ちゃんはその先生とやらにされている事を何とも思わないのだろう。それが当たり前だから。ピアノを弾く上で、必要な事でしかないから。

「全部大人のせいだ。先生も、どっちつかずの親も、俺も。何もかも、お前の嫌いな大人のせいだよ」

「僕に何が言いたいんだって訊いてる」

「俺はお前の事尊敬してるんだぜ？　自分の嫌いなものの為なら、何でも壊すところ。そんなガキが癇癪起こすみたいな事、俺にはできない」

　まだ中途半端に残っている煙草を吐き捨て、靴で踏みつける。そして彼は口を開いた。多分、一番言いたかった事を言う為に。

「お前の好きなようにやれ」

　そう言って彼は、自分の鞄を僕に投げて寄越した。受け取った瞬間、理解した。中に入っているものが、何なのか。その重みを、僕らはよく知っていたから。

「人任せ過ぎない？」

「ああ、だろうな。お前に頼むなんて、これ以上に死にたい事は無い」

　彼はブランコから立ち上がって、体をうんと伸ばした。空はもう、黒のような深い藍を残すばかりだった。

　そしてその場を去ろうとした彼だったが、ふと足を止めて、思い出したようにこちらを振り向いた。何でもないような真顔をしていて、夢来ちゃんとよく似ていると思った。

「俺は夏架を忘れない。夏架を殺したお前を許す気も、ない」

　それに僕が何か言う前に、彼は立ち去って行った。

　僕は、それでいいと思った。

＊　　＊　　＊　　＊　　＊

　コンサートの会場は夢来ちゃんの通う中学の体育館だという。ホールほどではないにしろ、館内は界隈で有名なピアニスト達で一杯になる。普通の観客が集まるよりもよっぽど貴重なコンサートだ。

　僕は会場に向かう為、大きな川を渡るようにして作られた橋を渡っていた。すぐ傍の海に直結しているこの川には、横殴りするかのような突風が吹く。目を開けるのも一苦労だった。

　狭まる視界の中に、見覚えのあるシルエットが映った。その人は僕の行先を邪魔するように、目の前に立っている。

「いい天気だね」

　彼女は下を流れる川を眺めながら言った。日の光を乱反射させる水面が眩しい。僕はそれに「そうだね」と言った。

「コンサート、見に行くの？」

「夢来ちゃんと色々あってさ」

「憐君怒りそう」

「多分ね」

　蔑白さんは白いブラウスに、柄の入ったロング丈のプリーツスカートという服装だった。夏風に揺られるスカートがなびいて、彼女をどこか遠くまで連れ去ってしまいそうに見える。

「蔑白さんは行かないの？」

「実は夢来ちゃんとの面識ってあんまりないんだ。ピアノを教えてるっていう夏架を通して何回か会ったくらいだし」

「行かない理由にはなってなさそうだけど」

「女子ってそういうものなの」

　目を細め、少し微笑むようにして言う。そう言われてしまっては、僕は何も言えない。ただ「そっか」とだけ何となく返しておいた。

「じゃあ、また学校で」

　それだけ言って、彼女の横を通り過ぎようとした時だった。彼女が「名執君」と名前を呼ぶ。僕は振り返って「なに？」と訊ねた。

「答えは決まった？」

　まあ、そう言うだろうなと思っていた。あの日駅で会って以来、答えも感情も、全部を置いてきたままにしてきたから。

「うん。ちゃんとあるよ」

　でも、僕は教えてもらった。理解した。何も受け入れなくていい事を。自分の生き方にそぐわないものは、無関係なふりをして目を逸らせばいい事を。

「否定しちゃいけないっていうのは正しいと思う。僕は君にとっての幸福が何なのか知らないまま、それを勝手に推し量った。多分、それは間違いなんだ」

　最初から全てを知っていた彼女は、それに「そうだね」と優しく微笑んだ。あるいは、何もかもを諦めているかのように。

「何も否定しないって、難しいけど、大切だよ」

「僕もそう思う」

　それから一瞬だけ沈黙が流れて、でもすぐに蔑白さんが口を開いた。

「分かってるなら、それは持っていっちゃダメだよ」

　そう言って僕が持っていた鞄を指差す。正確には、その中に入っているものを。僕は少し驚き、「どうして分かったの？」と訊ねていた。

「夢来ちゃんがどんな境遇にいるのかくらい、私も知ってるよ。名執君がしそうな事も」

「買い被りだ。僕は自分のしたい事しかしない。真囚君の言葉を借りれば、ただの子供の癇癪なんだ」

「うん。知ってる。だからだよ」

　蔑白さんはそう言って、僕の鞄の中に手を入れる。そして、ハンマーを取り出し、川の方へと思いきり投げ捨てた。真囚君から受け取ったそれが宙を舞い、やがて鈍い音を鳴らして着水する。

「またピアノ壊す気だったの？　学校の備品じゃないんだから、ちゃんと器物破損だよ？」

「真囚君に命令されたって言えばいい。彼には僕を苛めてた事実がある」

「性格悪いなあ」

　そう言って彼女は大きく笑う。僕は軽くなった鞄の持ち手を強く握った。

「否定しないって決めたなら、ちゃんと見届けなきゃ。受け入れなきゃ」

　君ならそう言うのだろうなと、心底思った。やっぱり紙透さんとは真逆の人間だ。紙透さんならどこまでも正しく、人が幸せになる方へと道を歩む。例えそれがどんな手段であっても。

　どちらが正しいのかなんて分からない。でも今、僕のやるべき事は分かる。否定も幸福も全部捨て去って、どこまでも自分本位になろう。自分にとって都合の良いものだけを選び取っていよう。

「僕のタイプは、僕なんかを好きにならないような子なんだ。ごめん」

　蔑白さんはそれに一瞬何の事か分からないような顔を見せ、でもすぐに思い出したように「ああ」と言った。

「私今、フラれた？」

「うん。多分そう」

「そっか。でも、私は忘れないよ」

　当たり前のように彼女は言う。その人にとっては何でもないような一瞬が、別の人にとっては一生を支配するような出来事になる事は、きっとある。

　そんなの、僕だって同じだよ。言葉にはせず、心の中で留めて置いた。彼女の傷一つない、綺麗な手を見る。

　それから、もう何も言う事がなくなった蔑白さんが「気が向いたら私も行こうかな」と立ち去ろうとした。その背中に、今度は僕が「蔑白さん」と声をかける。

「どうでもいいかもしれないけど、紙透さんは本気で、君の事を友達だと思ってた」

　彼女は、僕の言葉に呆けたような顔を見せた。「だからどうしたって話だけど」と言い訳のように付け加える。すると、彼女は大きく笑った。夕焼けのように、眩しい笑顔で。

「何それ」

＊　　＊　　＊　　＊　　＊

　体育館を訪れると、まだ観客はいないらしく、僕が一人目だった。けど、観客がいないだけで、ピアノの音は絶えず鳴り響いている。

　舞台の上で、夢来ちゃんが〝幸福の唄〟を演奏している。どれだけ練習しても足りないのだろう。僕が来た事にも気付かず、体育館でただ一人、無我夢中で鍵盤を叩いていた。

　いや、正確にはもう一人いた。もっとも、「人」としてカウントできるのかどうかは分からない。

「早いですね」

　体育館の後方、最後列にあるパイプ椅子に腰をかけた彼女が言う。僕も数席分の間隔を空けて、同じ列の椅子に座った。

「君に言われたくないな。いつからいたの？」

「昨日の夜です」

「……なんで」

「どうせ暇なので。たまには音楽室から離れてもいいかなって」

　舞台には聞こえないくらいの声量で会話をする。とは言っても、演奏に集中した夢来ちゃんに周りの事なんか見えないのは、僕らが一番知っているけど。

「来る途中で蔑白さんに会ったよ」

「だから何ですか」

「『紙透さんは本気で、君の事を友達だと思ってた』って言っておいた」

「……何の為に」

「さあ？　君への嫌がらせかな」

〝幸福の唄〟が終わる。でも、夢来ちゃんは終わらない。続けてまた最初から弾き始める。「これ何回くらいやってるの？」と訊くと「十回目くらいから数えるの止めました」と言われた。

　その後しばらく、僕らはそのまま彼女のピアノを聴いていた。何度やっても僕には同じに聴こえるけど、夢来ちゃん本人はそうじゃないらしく、一曲弾き終える度に一々楽譜を睨み付けていた。

「多分、あれが努力って事なんでしょうね」

　ふと、隣で紙透さんが呟いた。僕は横目で彼女を見て、視線だけで続きを問う。

「天才が努力し始めたんですもん。私なんかもうとっくに追い抜かれてますね」

　珍しく眉に皺の無い、真っ新な真顔でそう言った。彼女の半透明な手は、ボロボロに傷付いている。

「私、幸福の他にもう一つだけ執着してるものがあるんです」

　そう言って紙透さんは、自分の過去をゆっくりと語る。僕は何も言わず、黙ってそれに耳を傾けていた。

「『才能』がそうなんです。いや、もしかすると、幸福以上にそれを求めているかもしれない。私は、天才になりたかった」

　紙透夏架を知る人間は、誰もが彼女を「天才」と褒め称ええる。それはある意味で残酷な事だ。彼女のこれまでの努力を全て無視しているようなものだから。彼女がどれだけの時間をかけてきたのか、彼女の手を見ればすぐに分かると言うのに。

「『この世界でたった一人、憧れたピアニストがいた』と、前に話しました。今もその偶像を追いかけ続けているんです。あの人のようにならなければいけないと、強く思いました。その人の才能こそが、私にとって唯一の執着です。私の全てです」

　もう死んでしまったか、あるいは、ピアノを辞めてしまったか。彼女はそう言っていた。全人類を幸福にする力があるのだと語っていた。

「私にとっての幸福は、きっと才能を手に入れる事。才能さえあれば、天才にさえなれば、私は幸せになれたのに。誰もを幸福にできたのに。あの人のようになりたかったのに」

　そう言いながら、手を強く握りしめる。僕はふと思い出した事があって、それを訊ねてみる事にした。

「『やっぱり』っていうのは、どういう意味だったの？」

　紙透さんがこちらを見る。僕は夢来ちゃんの姿を遠目に、「夏祭りの日の」と言った。

「夢来ちゃんが戻ってきた時、彼女の顔を見た君は『やっぱり』って言ったんだ。自分で覚えてる？」

　そう言うと、紙透さんは少し考えるような表情をし、やがて「正直なところ、覚えていません」と言った。

「でも、言った意味は分かります。あの日会場に、先生がいたのを私も見かけていました。それで戻ってきた時、殴られたようだったので『やっぱり』と言ったのだと思います」

　紙透さんは、夢来ちゃんと同じピアノ教室に通っていた。だから当然、先生も同じなのだろう。それは分かる。同じ事をされていた紙透さんが「やっぱり」と言うのも理解はできる。でも。

「納得できない。『やっぱり』で済む問題じゃないだろ。夢来ちゃんが顔に傷を付けて戻ってきて、それで『やっぱり』で終わらせるつもりかよ」

　そう訊ねると、彼女は「何の事ですか？」と、呆けたように言った。

「君は、誰よりも人の幸福を望んでたはずだろ。夢来ちゃん本人がどう思うかはともかく、君だけは、それを許しちゃいけないだろ」

　それが、紙透夏架だから。そう、強く叫びたかった。

　紙透さんは眉をひそめる。嫌悪や不快の表れじゃない。本気で、何を言っているのか分からないという表情だ。

「夢来ちゃんはピアノを弾いてるんですよ？　それで何が悪いんですか？」

　彼女の言う意味が分からず、今度は僕が顔をしかめる。その表情には、きっと不快感もあった。

「ピアノを弾けるからって、じゃあ殴られる事は容認するって言いたいの？　それで夢来ちゃんは幸福だって、本気で言うつもり？」

　僕の質問に、紙透さんは呆気なく「はい」と即答する。

「だって、夢来ちゃんは天才で、ピアノが好きで、ピアノを弾いてるんです。もう幸せに決まってるじゃないですか。才能の無かった私なんかより、ずっとずっと幸せなんです」

　そこで僕は、ようやく気付いてしまった。紙透夏架という存在の人間性に。「幸福」という言葉の意味に。彼女の持つ、執着の恐ろしさに。

　紙透さんにとって、幸福と天才はイコールだ。才能さえあれば、ただそれだけで幸せだと言いたいのだ。

　紙透夏架は、例えどんな手段であっても、人が幸せになる為なら何も厭わない。例えそれが、大人に脅かされる事であっても。あるいは、死ぬ事でさえも。

「……君は、それで幸せだったの？」

　小さく、僕が訊ねる。彼女は昔を懐かしむように「そうですね」と言った。

「結局私には才能が無かったわけですが、それでも、天才になれるかもしれない、あの人のようになれるかもしれない。そう考えるだけで幸せでした」

　ああ、彼女もか。

　僕も、夢来ちゃんも、紙透さんも。結局は同じだったのだ。

　誰が見ても「不幸」なのに、世界でただ一人、本人だけがそれに気付いていない。全てが、自己完結している。本人にとっては、それが疑う事すらない当たり前だから。

　僕が虐待を何とも思えなかったように。夢来ちゃんが暴力を受けている事の善悪が判別できないように。紙透さんは、才能という幸せの中にそれがある事を当然の事実としている。それが、幸せなのだと言っている。

「夢来ちゃんは幸せですよ。大丈夫です」

　紙透さんは、ピアノを弾き続ける彼女を見つめている。羨望、慈愛、喜び。そういうものを含んだ視線で、うっとりと眺めている。

「……そうか。君は、幸福を信じるんだな」

　それは、ただの独り言だった。紙透さんにも聞こえていなかったらしい。

　僕は決めた。また、紙透夏架を不幸にしてやろうと。同時に、真囚夢来を裏切ってやろうと。全部全部、ぶっ壊してやろうと。

「……どこに行くんです？」

　気付けば僕は、鞄を持って席を立っていた。体育館の入り口から、ようやく観客が入ってくるのが見える。その中に蔑白さんの姿もあった。

　僕をじっと見つめる紙透さんに、僕は一言だけ言い残す。

「僕は、君の全部を否定する」

　開演直後の体育館は人でごった返していた。先生とやらも、蔑白さんも、紙透さんも。誰がどこにいるか分からない。もしかして真囚君もいたりするのだろうか。

「夢来ちゃん？」

　舞台袖の角で縮こまって、どこか遠くを見つめる夢来ちゃんを見つけた。声をかけると、焦点が合っているのかどうか分からない目で「はい」とだけ言った。

「緊張してる？」

「……分かりません」

「どこからどう見ても緊張してるようにしか見えないけど」

「でも、楽しみなのもちょっとあります」

「ほんとに？」

「だって、私はこれでようやく、生きてきてよかったと、心の底から思う事ができるかもしれないんです」

　相変わらず無表情のままで言う。彼女の冷たそうな手が、傷一つもない手が、小刻みに震えている。

　頑張れ、応援してる、大丈夫だよ。そんな薄っぺらい言葉が思い浮かぶ。でも、どれも不正解な事くらい僕にも分かる。だから代わりに、僕は彼女に向かってこう言った。

「夢来ちゃん、大切なお願いがある」

　僕は鞄を床に置いてしゃがみ込み、彼女と目線を合わせる。夢来ちゃんは震える声で小さく、「何ですか」と言った。

「トップバッターが君なのは知ってる。でもその前に、僕に行かせて欲しいんだ」

　予想外過ぎる言葉だったのだろう、夢来ちゃんは「え」と言って手の震えをピタリと収めた。

「そ、それはどういう意味ですか」

「そのままの意味。ちょっとだけ僕に弾かせて。すぐに終わる」

「そんな事言われても、それは私の一存じゃ決められませんよ」

「コンサートなんて関係なく、君にお願いしてるんだ。『君の前に、僕に少しだけ弾かせて欲しい』って」

　夢来ちゃんは俯いて、ほんの少しだけ顔をしかめている。嫌なのだろう。それは、彼女を見ていた僕がよく知っている。

「私は、この瞬間の為に、何も狂わせない為に準備してきたんです。私の中ではもうプログラムの一番目になってて、順番とか、椅子の座り方とか、視点の位置とか、楽譜とか、鍵盤の触り方とか。とにかく、少しでも何かが違ってしまうと」

「『僕の命を捧げる』」

　そう言った瞬間、夢来ちゃんが大きく目を開いた。僕は微笑んで、「今度はちゃんと、自分の命だよ」と言った。

　大きな音が鳴った。夢来ちゃんの身体が驚いたように跳ねる。どうやら開演のブザーらしい。まるで映画が上映するみたいだ。

　鞄を持って立ち上がる。夢来ちゃんに何か言おうとして、でも何を言っても間違いのような気がして、だから黙って舞台へと向かった。後ろから「名執さん」と、僕の声を呼ぶ声が聞こえる。

　僕が登壇した瞬間、館内が一気に騒めきだすのが分かった。そりゃあそうだ。プログラムにもない、誰も知らないような一般人なのだから。でも、僕の行動が自然だからなのか、運良くつまみ出される事はなかった。

　そういえば、人前でちゃんとピアノを弾くのは初めてかもしれない。深く息を吸いながら、ピアノ椅子に腰をかける。鞄の中から楽譜を取り出し、譜面台に置かれていた〝新・幸福の唄〟と入れ替える。

　鍵盤に指を置き、もう一度だけ深く息を吸う。そして、ゆっくりと、穏やかな音色を奏でる。

　——ベートーヴェン、ピアノソナタ第十二番。通称〝葬送〟。

　序盤はどこまでも静かに、暗闇のように、落ち着いた旋律を。中盤は素早く、その名に反して陽気にすら感じるように、飛び跳ねるような音を続ける。そして、そこから終わりにかけてを、また静けさを取り戻した音が、でも確かな力強さを感じさせるように重く流れる。

　音楽家、エトヴィン・フィッシャーは「葬儀の後に降った雨が、埋葬地を慰めの灰色の霧の中に覆い隠していくかのようである。もはや誰も残っていないであろうその場で、大自然が最後の言葉を与えるのだ」と語った。死んだ人間は生き返らない。だけど、どうしようもない自然のように、その眠りを妨げるほどの追悼がたった一つの偶像に捧げられる事だけは、僕がよく知っている。

　何かを降りるように、徐々に曲は静かになっていく。そうやって密かな余韻を残したまま、曲は終わりを迎える。ふと気付いた時、僕の手は酷く震えていた。

　何も知らない観客は、僕に対して細やかな拍手をくれた。僕はそのまま鞄を持ち上げ、うるさく鳴り響く破裂音を無視して退場する。

　人の視線から早く抜け出したくて、早歩きで向かった舞台袖の先で、夢来ちゃんが待っていた。祈るように手を組み、僕の名を呼んでいる。

「名執さん、ピアノ弾けたんですか」

「今更？」

「そうじゃなくて、いや、そうだけど、でもそういう事じゃなくて」

「落ち着いて」

　優しく、笑って諭すように言う。自分よりも落ち着きのない人を見ると、少し落ち着いてしまう。強く脈を打つ心臓が、体中に血を巡らせている感覚が伝わる。

「名執さんがこんなにも凄い人だなんて知らなくて。私なんかよりずっと凄い」

「それはさすがにないかな」

　本当に、そう思った。僕が夢来ちゃんより凄いなんて事はない。この子は誰よりも強くて素晴らしいピアニストだ。

　僕のやるべき事は終わった。夢来ちゃんには悪いけど、もうこのまま帰ろう。酷く気分が悪かった。

「あの、ありがとうございます」

　ふと、夢来ちゃんが言った。僕は意味が分からず、「何が？」と息の上がったまま訊ねる。

「自惚れてたら恥ずかしいんですけど、多分、私の緊張を解そうとしてくれたんですよね」

　その時の僕は、一体どんな表情をしていただろう。上手く笑えていた自信が無い。夢来ちゃんは僕を見ながら、無邪気に笑っていた。

「ありがとうございます。いい意味で、失敗してもいいやって感じになりました」

「……失敗は駄目だよ」

「分かってます」

　彼女は僕に手の平を見せる。意味が分からずその手を見つめていると、「ハイタッチですよ」と言われた。

　少しだけ迷い、でも結局、僕は彼女と手を合わせた。彼女はこの後、地獄を見るだろうから。僕からの、せめてものの同情だった。

「生きてきてよかったって、心の底から思ってきます」

　彼女は最後に大きく笑って、舞台へと歩きだして行った。

　ただひたすらに、気分が悪かった。今にも倒れてしまいそうだった。夏のへばりつくような湿気が不快だった。人生で初めて、ちゃんと「死にたい」と思えた。

　だからもう、全部終わらせようと思った。彼女がそうしたように、僕もそうするべきだと思ったから。

＊　　＊　　＊　　＊　　＊

　無数に群れる羊雲達が、夕焼けの茜色に段々と染まっていく。東の空は未だ青く、西の空は赤い。

　ふと気付くと、僕は音楽室にいた。屋上の次に空との距離が近いその場所で、窓の外から見える天空を仰いでいた。

　コンサートの開演は正午頃で、〝葬送〟を弾いた後、僕はすぐに体育館を出た。その後の数時間分の記憶が全く無い。多分、取り付かれるようにここに来たのだと思う。

　未だ気分は優れない。胃の底で虫が這い回っているようだった。死ぬ前はこんな気分なのだろうか。それとも、こんな気分になったから死ぬのだろうか。紙透さんはどっちだっただろう。

「いい天気ですね」

　音楽室の扉を平然とすり抜け、彼女がやってくる。長い髪を耳にかけ、「やっぱり、死ぬならこんな天気の日がいい」と言った。

「何しに来たんだよ」

「何しにも何も、ここが私の居場所ですよ」

「君の居場所はどこにも無い」

「そうかもしれません」

　彼女は、とても穏やかな表情をしていた。ふと吹いた夏風が、いつかの遠い記憶の香りを運んでくるような。でも、どんな思い出だったのかを思い出せないような。そんな表情だった。

「答え合わせをしましょう」

　そう言いながら、彼女はピアノ椅子に腰をかける。僕はそんな紙透さんをただ黙って見つめていた。

「『それ』の中身を見せてください」

　僕の足元に転がっている鞄を指差す。もう隠す理由もないか。そう思って、僕はそれを拾い上げ、中身を全て床にぶちまけた。何十枚の楽譜がバサバサと音を鳴らして落ちていく。

「……やっぱり」

　シの音が羅列する楽譜。〝新・幸福の唄〟の楽譜。今日の夢来ちゃんに、何よりも必要だったもの。それを、僕は奪ってしまった。

「どうしてあんな事をしたのか、教えてくれますよね」

　それが当たり前だとでも言いたげに、僕が説明すると信じて疑っていないように、紙透さんは言った。どうしてって、そんなの、決まってるだろ。

「全部全部、紙透夏架を否定する為だ。紙透夏架を不幸にする為だ」

　僕の中心にはいつだって二つの楽譜があった。〝旧・幸福の唄〟と〝新・幸福の唄〟。

　紙透さんがいらないと言った〝旧・幸福の唄〟の楽譜を、僕はまだ捨てずにいた。理由は特にない。ただ鞄の奥底に入れたまま、放置していただけだ。あのストラップのように。

　夢来ちゃんに命を捧げて、僕は〝葬送〟を演奏した。その時、僕はこの二つの楽譜を入れ替えた。夢来ちゃんの為に用意されていた〝新・幸福の唄〟を鞄にしまい、譜面台には〝旧・幸福の唄〟を置く。〝旧・幸福の唄〟の存在を、夢来ちゃんは知らなかったから。そうなれば、いつもと違う楽譜が置かれている事に気付いた彼女は、平常ではいられなくなると知っていた。あのコンサートを、夢来ちゃんの覚悟を、紙透さんの幸福を。全部全部、ぶっ壊せると知っていた。

「夢来ちゃんは、どうなった？」

　訊かずとも分かる事を、聞きたくもないはずの事を、僕は彼女に訊いていた。紙透さんはそれに何も答えなかった。その沈黙が、全てを表していた。

「私が訊いているのは、『何をしたのか』ではなく、『どうしてあんな事をしたのか』です」

「それはもうさっき言った」

「なぜですか。なぜ私を否定するんです。どうして幸福を否定するんです」

　なぜって、自分を不幸にしてくれと、それは君が望んだ事だ。そう言おうとして、やっぱり止めた。

　分かっている。本当は知っているのだ。そんなの、ただの建前だ。虚言だ。欺瞞だ。

　僕が、本当に欲しかったもの。ただ一つだけ、幸福と定義してしまったもの。僕はそれを、どうしようもなく手放したくなかった。

「僕にとっての、執着を守りたかった」

　手に力が入る。爪が食い込んで、血が滲む。

「名執君は、私の事が嫌いですか？」

　彼女が静かに問う。僕にはもう、世界の全てがどうでもよかった。

「……ああ。大嫌いだよ。この世の何よりも、幸福なんかよりも、僕自身よりも。僕は、君が嫌いだ」

　紙透さんは、ただ小さく「そうですか」と言っただけだった。なぜか悲しく聞こえる、この世の悲哀を全て詰め込んだかのような「そうですか」だった。

　何も、否定してはいけない。でも、これだけは、どうしたって許せなかった。

　全人類を幸福にするはずの彼女が、ただ一人、僕だけを許せなかったように。僕はたった一つだけ、彼女の幸福を否定しなければならなかった。彼女の存在を、彼女の全てを、何一つ残らず否定しなければならなかった。

　紙透夏架という偶像の、その全てを信じたかったのに。ただ一つの執着だった彼女を守る為、僕は彼女そのものすらも否定しなければならなかった。

「名執君は、これからどうするつもりですか」

　彼女は僕の全てを嫌い、否定し、そして死んだ。死んで尚、僕と正反対の位置で幸福を叫んでいた。何もかもが間違いだらけの幸福を。

　なら、僕も同じだ。彼女がそうしたように、僕もこの末路を迎えなければならない。紙透夏架の全てを嫌い、否定し、そして、死ななければならない。

「ここから飛び降りる。君と、同じように」

　あの日の花火を思い出す。〝幸福の唄〟を思い出す。高いシの音はきっと、死の音にも似ている。どこにも、幸福なんか無かったじゃないか。全部が、紛い物だった。

「私も、貴方が嫌いです。名執崇音という存在の、全てを嫌悪し、否定します」

「何を今更」

　彼女はそう言って立ち上がり、歩き出す。僕の元へ、ゆっくりと。

「これが最後です。これが貴方に捧げる、最後の復讐です」

「……どういう意味だよ」

「そのままの意味です。幸福を嫌う貴方に、不幸を望む貴方に。最後の幸福を与えます」

　僕の元まで来ると、彼女は僕の手を取った。そのボロボロの傷だらけの手で、僕の手にそっと触れた。夏そのものみたいに、暖かな体温だった。

「貴方の前から、私が消える。その幸福を、よく噛み締めてください」

　窓から差し込む赤い太陽、夏風に吹かれてなびくカーテン、振り向きざまに流れる黒い髪、よく見慣れた制服、夏空を透過する華奢な体、僕に初めて見せた、優しくて美しい微笑み。夏の赤に染め上げられた彼女は、間違いなく、紙透夏架だった。

「『私の全てを捧げます』」

　そうやって、夏の亡霊は僕の前から消え去った。

　エピローグ

「……『四分音符のお化け』」

　最初に、蔑白さんが言った。僕はその言葉に「何それ？」と訊ねる。

「誰も立ち入る事のできないはずの旧校舎から、ピアノの音が聞こえる。誰の何の曲かも分からない曲を、延々と弾き続けている。この学校にある怪談の一つです」

　夢来ちゃんが説明をしてくれた。今この瞬間にも、〝幸福の唄〟は流れている。ありえない。そんなはずがない。だって、この曲は。

「僕は、信じない」

「でも現に、今こうやって鳴ってるじゃないですか」

「……ねえ、夢来ちゃん」

　蔑白さんが夢来ちゃんの肩をつつく。蔑白さんは、眉をひそめて怪訝な表情をしている。怖いとか、そういう類のものではない。

「あの怪談って、『何の曲かも分からない』って話だけど、この曲、私聞いた事あるよ」

「……奇遇ですね。私も同じ事を思っていました」

　今、旧校舎に響いている曲は間違いなく、〝旧・幸福の唄〟だった。知っているのは、僕と彼女の二人だけのはずだ。意味が分からない。

「名執さん、話の続きです。あの日、コンサート会場で起きた事の全て」

　情報過多が起き、頭がどうにかなってしまいそうな僕に、夢来ちゃんは言った。

　夢来ちゃんが唯一、僕に言っていなかった事。僕が知らない出来事の全て。

「あの日舞台に上がった私は、譜面台に置かれている楽譜が私の知らないものである事に気が付きました。当然、私は取り乱します。ピアノ椅子に座り、鍵盤に指を置く。普通なら初見の楽譜を弾くなんて、誰にでもできる事です。でも、私にはできなかった。指が動かなかった。過呼吸を起こしそうになっていました」

　そうだ。僕はその為にあの日、楽譜を入れ替えた。夢来ちゃんが失敗すれば、コンサートが台無しになると知っていたから。夢来ちゃんが、自分の置かれている不幸に気付けるはずだと思ったから。

「問題はその後です。信じてくれるか分かりませんが、ピアノが勝手に鳴ったんです。鍵盤が下がったんです。私が何もしなくても、目の前にある譜面通りの曲が、勝手に流れたんです」

　誰も知らないはずの〝旧・幸福の唄〟が、勝手に流れた。その言葉が意味するところは、ただ一つだけだ。

「それで平静を取り戻した、というわけでもありませんが、誰かが弾いているように下がっていく鍵盤を追いかける事くらいならなんとかできました。観客席から見れば、私がただピアノを弾いているように見えたでしょう」

「コンサートは最高のスタートで始まった。もちろんその後も、全部大成功した。そんな事が起きてたなんて、私知らなかった」

　蔑白さんが付け加えるように言う。僕は回らない頭で、二人の話を必死に理解しようとする。

「じゃあまさか、その時に勝手に流れたっていう曲が」

「……間違いありません」

　そう言って夢来ちゃんは、顔をそちらに向けた。音楽室のある方へ。

「『相対的に幸福が輝いて見える』。いつか名執さんが言ってたみたいに、確かにあの瞬間は少しだけ幸せでした。生きてきてよかったとまではいきませんでしたが、あれは、まるで」

　夢来ちゃんは何か言いかけ、すぐに「いや、何でもないです」と首を横に振る。

　何が起きたのか、何が起きているのか、何が起きようとしているのか。僕には何も分からなかった。どうしても、全てを知る必要がある。

「……行かなくちゃ」

　教室を飛び出し、音楽室へと走る。その背中に、「名執さん」と声がかけられた。彼女らしからぬ、大きく叫ぶような声だった。

「もう一つだけ。『四分音符のお化け』という名が付いた理由があります」

　僕はその場で立ち止まり、二人の数メートル先でその話に耳を傾ける。

「ただの噂ですが、生徒の一人が真相を確かめようと、旧校舎に入った事があるそうです。職員室から盗んだ鍵を使い、音楽室の扉を開ける。すると、その瞬間にピアノの音は鳴り止んだ。当然、そこに人の姿はありません。でも一つだけ、不可解なものがあったそうです」

　心臓が、強く脈を打つ。

　話の続きが、全て分かってしまった。あの日の空を、ピアノの音色を、彼女を。僕は、鮮明に思い出してしまった。

「閉じられた鍵盤蓋の上に、連桁で繋がれた四分音符のストラップがひっそりと置かれていたそうです」

　初めて僕と彼女が重なったあの日、彼女の指を追いかけたあの日。ピアノの上に置かれていた彼女の筆箱。そこに繋がれていたのは、完成された四分音符のストラップだった。

「……ありがとう、夢来ちゃん」

　それだけ言い残して、僕は走る。人を幸福にする為に創られた、その曲が鳴る方へと。

　ずっと、気になっていた事があった。

　遠い昔、僕と約束をしたあの女の子は誰だったのか。それが蔑白さんではないとしたら、「ゆーちゃん」と呼んでいた彼女は、誰なのか。

　ポケットから四分音符のストラップを取り出す。この先に繋がるべき四分音符を持っているのは、誰なのか。

　記憶というのは朧げなものだ。遠い昔の事などすぐに忘れる。ましてや夢なんて、何の確証にもならない。

　彼女と初めて重なったあの日、彼女の四分音符のストラップを見た時、僕の中に一つ、荒唐無稽なとある可能性が生まれた。

　——もし、僕の記憶や夢が間違っていたら？

　——もし、完成するべき音符が繋がった四分音符ではなく、三連符だったとしたら？

　僕が見たい完成形は、連桁という上の線で繋がった形の四分音符だ。符頭と呼ばれる、譜線の上に置かれる音階を示す玉のようなものが二つ、繋がった形をしている。

　でも、三連符は普通の四分音符と、元々繋がった四分音符が合体したような形になる。つまり、符頭が三つ繋がったような形になるのだ。

　もし、僕が持つ四分音符と、彼女が持つ四分音符が繋がるのだとしたら。

　いつの間にか、音楽室の前まで辿り着いていた。加齢のせいか、早くも乱れた呼吸を整える。その間にも、〝幸福の唄〟は絶えず響いている。

　そしてふと、思い出した。僕が幽霊となった彼女と初めて会ったあの日。音楽室の前に着いたあの瞬間。僕を襲ったあの気持ち、感覚。

『僕は、この扉を開けなければならない。理由は分からないけど、脳内で僕の声がこだましていた。本能にも近しい何かが、僕を掻き立てていた』。

　今なら分かる。あの感覚は、いつも見ていた夢と同じ感覚だった。女の子と約束をする夢を見る時、それはいつも扉を開けるところから始まっていた。多分、扉を開けた先にいる少女が、彼女だと直感で分かっていた。

　そしてそれは、今この瞬間も同じだ。僕は、この扉を開けなければならない。あの女の子と、再会を果たさなければならない。そっと、扉の取っ手に手をかける。

　しかし、鍵が開いていなかった。何度引いても扉は開かない。仕方なく僕は、扉をノックしてみた。

「……まだ死んでなかったんですか」

　聞き慣れた声がした。こんな状況にも拘らず、僕は思わず笑ってしまう。第一声がそれかよ。

「君こそ、もうとっくに消えたと思ってた」

「ええ、私もです。お互い、くたばり損ねたみたいですね」

「……昔の君は、もっと可愛げがあったんだけどなぁ」

　そう言うと、彼女は黙ってしまった。何を言うべきなのだろう。何もかも、言うべきなのだろう。交わしたい言葉があり過ぎる。

　僕らが話を始める時に、相応しい言葉が一つだけあった。それを口にしようと、僕がゆっくりと口を開いた瞬間。

「答え合わせをしましょう」

　先に彼女に言われてしまった。僕は少し残念に思いながら、「そうだね」と言った。

「私と名執君は、同じピアノ教室に通っていました。当然、私だってあの約束を覚えていましたよ」

「なのに知らないふりをしたわけか」

　僕は扉に背を預け、その場に座り込んだ。空気を響かせるピアノの音が、扉を振動させて僕を小さく震わせる。

「ですが、名執君は途中で辞めてしまった。その後も、私はずっとそこに通い続けました。だから、知らなかったでしょう、教室の住所が移転した事なんて。講師が途中で交代した事なんて。暴力を奮うような講師に変わった事なんて」

　僕が通っていた頃、講師はごく普通の人だった。ちゃんと優しく教えてくれて、悪いところは指摘して、良いところは褒めてくれる。そんな、普通の大人みたいな人だった。

「名執君が辞めてすぐの話です。それから私は十年近く、あの人に暴力を奮われました。でも、何も感じなかった。それが幸福の一部に含まれていたから。それが当たり前だと知っていたから」

「……だろうね。それが君だよ」

　ふと思う。幼い頃、彼女が言っていた「可哀想」の中に、それは含まれていなかったのだと。僕が「幸せになって」と言ったから、彼女はピアノを弾き続けてしまった。暴力を受けながらでもピアノを弾く事が幸せだったから。

　僕は虐待という「可哀想」を受けたまま、ピアノを弾き続けた。そして、僕のようになりたかった彼女は、大人から虐げられる事で僕のようになれるのだと勘違いしてしまったのだ。全部、僕が与えてしまった呪いだ。

「じゃあ、もしかして、あの誓約の文言って」

「そうですよ、『たーくん』が教えてくれたものですよ。覚えてないんですか」

「……ごめん」

　僕が言うと、紙透さんは呆れたように溜め息をついた。やっぱり、記憶なんてものは何の頼りにもならない。

「私がこの高校に転校してきた理由、覚えてますか？」

「ちゃんとは聞いた事ないけど、親の都合って言ってた気がする」

「盗み聞きですか」

「君もやってた事だろ」

「……そうでしたか？」

「覚えてないの？」

　思わず笑ってしまう。彼女の口調が本当に覚えていないように、真剣だったから。

「そうです。親の都合です。離婚して、旧姓である『』になりました」

「じゃあ、離婚する前の苗字は？」

「……です。」

「君に似合わず綺麗な名前だね」

「どういう意味ですか」

　夏祭りで見た、あの綺麗な月を思い出す。

『優しい月ですね。私みたい』

　つまり僕は、その苗字を取って「ゆーちゃん」と呼んでいたのだろう。そんな彼女は、僕の事を名前から取って「たーくん」と呼んでいた。

　これで、僕らの間で止まっていた幼い頃の過去が、ようやく終わりを告げた。全てが綺麗に消えていった。

　なら、その次だ。時計の針を少し進めた先の、僕らの高校時代の話を。

「今更かもしれないけど、どうして君は僕を嫌った？」

　あの夏、いや、あの三年間。僕らの間にあった歪な鎖。錆びたそれで繋げられていた理由がなんだったのか。彼女はそれについても教えてくれた。

「分からないんですか。貴方は、私の前から消えた。ピアノを辞めていた。私が世界でたった一人憧れていた『名執崇音』というピアニストがいなくなって、代わりに貴方のような人間になっていた。私がどんな気持ちだったか。貴方に分かりますか。この、最低最悪の」

『裏切り者』。紙透さんの声と、夢の中の女の子の声が重なる。

　一度だけ、彼女に僕を嫌う理由を訊ねた事がある。その時彼女は、「貴方が名執崇音だから」と言った。そして、それと同時に「貴方が名執崇音ではなくなったから」とも言った。

「私は、どこまでも不幸になった『たーくん』を救わなければならなかった。でも貴方は、不幸になるどころかピアノすら弾かなくなっていた。私の前から消え、ピアノを辞め、何者でもなくなり、私の偶像ですらなくなった。そんな、『名執崇音』が、大嫌いだった」

「……嫌いだから、僕を学校ぐるみで苦しめた」

　そう訊ねると、彼女は「半分正解、半分不正解です」と言った。

「確かに、ただ嫌いな人間を苛めていた、という言い方もできます。でも私は、ほんの僅かな、一抹の淡い期待を抱いていたんです。貴方を不幸にさえすれば、また『彼』が帰ってくるかもしれないと。そうすればようやく、私は胸を張って名執君の手を掴めると」

「まさか不幸を望むような人間になっていたとは思いませんでしたけど」と、彼女は付け加えるように言った。それはそうだなと少し同意した。こんな人間性を持ってしまった僕の方がどうかしている。

「貴方は、不幸になっても変わらずにいた。それで理解したんです。私の好きだった『名執崇音』はもう死んだって。私にとっての全てだった執着は、もうなくなったんだって」

「……だから、死んだのか」

「ええ。人生の指針のように思っていたから」

　結局、人を呪う執着とはそういうものだ。自分にとっては何より大切で、失ってしまえば生きる事すら億劫になるようなもの。人には誰だって、そういうものがある。

「僕だってそうだよ。君を失わない為なら、君を不幸にする事だって躊躇いがなかった。ピアノだって簡単に壊せる」

「そうらしいですね。よく分かります」

〝旧・幸福の唄〟が、丁度終わった。彼女は続けて曲を弾いたりはしなかった。夏の夜のような静けさの中で、僕の言葉を待っている。だから続けて、僕はこう訊ねてみた。

「あのコンサートの日、君は何をしたの？」

　僕が滅茶苦茶にしたはずの、夢来ちゃんの演奏。それがなぜか、大成功で終わっている。紙透さんは、「簡単な事ですよ」と言った。何の音も邪魔をする事のない声が、クリアによく聞こえる。

「夢来ちゃんの様子がおかしい事に気付いて楽譜を見たら、名執君が捨てたはずの〝幸福の唄〟があった。だから、夢来ちゃんと重なってそれを弾いた。それだけの話です」

「それは分かってる。でも、君は」

「ええ、そうです。極限まで不幸のどん底に突き落とされた時、本当の絶望を知った時。その瞬間だけ、私は何かに触れる事ができる。そう言いたいのでしょう？」

　ガタン、と。鍵盤蓋を閉じる音が聞こえた。確かに今、彼女はピアノに触れている。

「私もそう思っていたのですが、どうやら勘違いだったらしいんです」

「……勘違い？」

「不幸になった瞬間、ではなかった。本当は、極限まで幸福と感じた瞬間だけ、私は何かに触れる事ができるらしいです」

　ふと、背中に重みを感じた気がした。彼女の声が近く、すぐ傍に聞こえる。ドア越しに、彼女も背中合わせで座っているらしいと気付いた。

「私が死んですぐ、ピアノに触れる事ができていたのは、本当は幸せだったからなのでしょう。死んでしまって、でもまだ、ピアノの傍にいられる。どうしようもないのに、どうしようもなく嬉しかったんです」

　僕が覚えている限り、彼女が何かに触れていた回数は三回。一回目は、死んですぐにピアノを弾いていた時。二回目が、夢来ちゃんと重なってピアノを弾いたという時。三回目はコンサートの後、僕の手を取ってくれた時。

「私は、どうしようもなく嬉しかったんです。名執君が、私を否定してくれた事。私の幸福を否定してくれた事。ようやく気付けたんです。私の全ては、何も幸福なんかじゃなかった。〝幸福の唄〟なんて、全部嘘だった。だからあの日、私はピアノに触れる事ができました」

「……あの後、僕の手を取ってくれたのは？　あれも幸福だって言うの？　僕の事が大嫌いな君が？」

「そうですよ。どんな形であれ、私を失わないよう、私を不幸にしてくれた事。矛盾してるかもしれませんけど、やっぱり嬉しかったんですよね」

　紙透さんは、少し笑いながら言った。あの日と同じような、優しくて美しい微笑みを浮かべているのだろうか。

「その後、消えたと思ったらいつの間にかまたここに戻ってきていました。学校を探索してびっくり。もう名執君達の代は卒業してました」

　彼女は少し大げさに言った。約七か月。長いような短いようなそんな時間、彼女は消えていたらしい。

「卒業するまでに、何か面白い事ありましたか？」

「別にないよ。真囚君も蔑白さんもいつも通りだし、夢来ちゃんとは会う勇気がなかった」

「そうでしょうね、あんな事したんですから。ざまぁないです」

　僕はそれに、少しだけ笑った。背中越しに震えが伝わってきたから、多分彼女も笑っていたのだと思う。

「それから私は、ただ純粋に楽しくてピアノを弾いていました。才能という執着を手放して、ずっと幸福のままいられた。まあ、いつの間にか怪談になっていましたが」

「でも成仏はしなかったんだ」

「……ええ。一つだけ、ちょっとした未練があったので」

　彼女はそう言って立ち上がったらしい。背中に感じる体重が無くなった。なんとなく僕も立ち上がって、扉の前に立つ。

　音楽室の扉には、小さなすりガラスが一枚張られている。向こうの景色がぼんやりと見える程度のものだ。

　すりガラスの向こうに、彼女がいる。距離が近いからなのか、何となく微笑んでいるようにも見えた。

「名執君に、『ありがとう』って言いたかったんです。ずっとその瞬間を待っていました」

「……それは、何に対して？」

「私の死体を見つけてくれた時に言い忘れていた『ありがとう』。それから、私を否定してくれて『ありがとう』」

　僕は、彼女の言う通りにただの臆病者だったのかもしれない。言い訳や屁理屈ばかりを並べて、手に届くような幸福を避けて歩いていた。幸福を手に入れた、その先が怖かったから。どれだけ綺麗なガラスでも、いつかは粉々に砕けるように。幸福は手にしたその瞬間から経年劣化を始め、いつかは失う。それが酷く恐ろしかった。

　でも彼女は、いつだって愚直に幸福に手を伸ばし続けた。誰がそれを嘲笑おうと、僕がどれだけ不幸にしてやろうとしても、それでも、諦めなかった。死んで尚、ずっとずっと上を見上げていた。紙透夏架は、どうしようもなく美しかった。

「……僕も言い忘れてたよ。『ありがとう』って」

　あの日、僕の手を取ってくれたのは確かにあの〝手〟だった。ボロボロで傷だらけで、僕が唯一執着を抱いたものだった。それが、十年以上の時を経て僕の手を取ってくれた。死を選びかけた僕を、確かに救ってくれた。これ以上の幸福があるだろうか。もしかすると僕は、生きてきてよかったと思っているかもしれない。

　約束を守って、こうやって僕を救いに来てくれて、ありがとう。言葉にせずとも、ちゃんと彼女には伝わったはずだった。また、彼女は笑ってくれたから。

「さて、名執君」

　紙透さんは切り替えたように、明るい声で言った。

「これで、私の未練はなくなりました。多分成仏するんでしょうね。あんまりしたくないんですけど」

「……駄目だよ」

　優しくて小さな言葉が、口から零れていた。彼女が少し驚いたような表情をするのが、何となく見える。分かっている。僕がこんな事を言うなんて、僕が一番信じられない。どうしてこうも、彼女を手放したくないのだろう。分からない。

「駄目って、何がですか」

「まだ僕は、言いたい事がたくさんある。交わしたい言葉もたくさんある」

　そう言うと、彼女は微笑む。まるで全てを諦めたように。きっとそれは、世界の何よりも美しい。

　紙透さんは「名執君」と僕の名を呼ぶ。そして、手の平を見せつけるようにして、すりガラスにそっと手を置いた。ボロボロで、傷だらけの手を。

　僕もそれを真似して、そっと手を置く。すりガラス越しに、彼女の体温が伝わる。

「……ここ、開けて」

「どうしてですか」

「まだ話足りない。まだ言い足りない。まだ聞き足りない。何もかも」

「駄目ですよ。分かるでしょう？」

「『僕の全てを捧げる』。命でも、両手でも、君の欲しかった才能でも。何でも。だから、ここを開けて」

　僕がそう言うと、彼女は一瞬だけきょとんした顔を見せて、でもまたすぐに笑った。夏そのものみたいに綺麗で、あどけなくて、眩しかった。

「馬鹿ですね。私が本当に欲しかったのは、才能なんかじゃないのに」

　どういう意味？　そう訊ねようとした時だった。

「名執君」

　廊下の向こうから声がした。蔑白さんと夢来ちゃんが息を切らしながらやってくる。

「ごめん。音楽室の鍵、借りてくるのにちょっと時間かかっちゃって」

　ふと、すりガラスに顔を戻すと、彼女はもういなかった。室内にある窓から、夕焼けの茜色が教室を染め上げているのが分かるだけだった。

「すいません。兄が不法侵入したのを見られてたみたいで。そのせいで色々と戸惑ってしまって」

　そう言いながら、夢来ちゃんが音楽室の扉を開ける。

　当たり前だけど、音楽室には誰もいなかった。ただ、あの日々の空気だけがそこに滞留している。時間が止まったように。

「……懐かしい匂いですね」

「……ほんとにねぇ」

　二人の会話を聞き流しながら、僕はピアノのある方へと向かう。

　閉じられた鍵盤蓋の上に、連桁で繋がった四分音符のストラップがある。

　ポケットから四分音符のストラップを取り出して、それを組み合わせる。いつの日か約束した三連符は、ようやく完成した。

　鍵盤蓋を開け、〝シ〟の鍵盤を優しく押してみる。

　高いシの音はきっと、幸せのシとよく似ている。